
箱庭ゲーム

夜猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

箱庭ゲーム

【Nコード】

N5784T

【作者名】

夜猫

【あらすじ】

VR（仮想現実）技術が発展し、そのシステムを利用したVRMMORPGが開発された。

そして、これはオンラインゲーム『GOD・S WORLD ONLINE』をプレイする人々の話。

よくわからないけど、成り行きでゲームの中に取り残されてしまった。

でも、別にデスゲームとかじゃなくて……。一体、自分達に何をしろと？でも、このゲームにはいろいろと問題点があつて……。？

スピード狂の猫妖精やその仲間たちがどんちゃん騒ぎながら行く、
なんちゃってファンタジーコメディー！

*これはチートな人達がチートな殴り合いをする話です

プロローグ

森の中を走る。

後から、誰かが走ってくる音が聞こえる。

私はただ、初心者用のクエストを受けていただけだ。

簡単な、薬草の採集クエスト。変に強いモンスターに出会うことなく、依頼主であるNPCの元にこの薬草を届けるだけだった。

「ファイア！」

後かその言葉が聞こえた途端、何か放たれるのがわかった。

私は無我夢中で転がるようにして避ける。

すると、さっきまで私の体が会ったところを炎の塊が飛んでいき、木に当たって弾ける。

ココの木は、破壊不可オブジェクトだったんだなーというどうでもいい考えが一瞬だけ頭をよぎる。

「まあ、そんなに慌てて走るなよ。・・・ゆっくりと殺せねえだろ？」

『初心者狩り』

どうも、私はそれに出くわしてしまっただらしい。

相手は男が三人、女が二人の合計五人。たぶん、全員がPKプレイヤー。

「わ、私をPKしても、な、何も無いですよ!？」

「ハア?だから?」

私がそういうと目の前の人たちは嫌な感じのする笑い声を上げる。そして、少しずつ私に近寄ってくる。

たぶん、私は恐怖に顔をゆがめて必死に逃げようとしていると思う。

でも、相手にはそれがたまらなく愉快でしょうがないみたいだった。

「ホレホレ、逃げないと死んじゃうよ〜?」

「なにそれ?ウケるう!?!」

相手は、どうも私をじわじわと痛めつけて殺そうとしているらしい。

こんなことなら、ペナルティを受けてもいいから自殺してしまおう。そう考えたときだった。

一陣の風が吹き、私と相手の五人の間に誰かが立つ。

「お兄さん、そんなしつこいとモテないよ〜」

「・・・お前、何様のつもりだ?」

「ただの通りすがりの猫妖精ケットシーです!」

フードで顔を隠しているけど、確かに猫妖精ケットシーの特徴の耳のあるだるう部分だけがとがっているのがわかる。

「で、初心者狩り?いや、答えはわかっているけど・・・もし、今からその剣を引いてどっかに行くんなら俺も『ガーディアン守護神』達には何も言わない!」

「お前、今の状況がわかっているのか？」

そうだ。例え、この人がいたとしても五人対二人。でも、自分は初心者だから実際には戦力にできるかも怪しい。

「……要するに、見逃してくれる気は無い」

「当たり前だ。それに、この人数差ならお前がどんなハイランカープレイヤーでも負けは目に見えている！」

そういつと、相手は一斉に攻めてきた。

「……できれば、PKなんてしたくなかったんだけどな」

そして、勝負は一瞬でついた。

プロローグ（後書き）

どうも。初めての方は始めまして。

初めてじゃない方はまたもこの作者夜猫の小説を呼んでいただきありがとうございます。

今回は、なんと『VRMMORPG』系の小説です！

自分、某『加速する世界』とか『SAO』とか大好きなんです。

それに影響されて考えてみたら面白いぐらいにアイデアが出たので
・
・
・。

ですが、今の段階では何じゃこりゃ？と言う感じになってます。

今後、あとがきにて用語説明をしていきたいと思っておりますのでよろしく願います。

クエスト1・ゲーマー達の日常

Player - ミッド

「おい！危ないって！一旦引け！！」

「・・・俺、このクエストを完了したらケツコンするんだ」

「死亡フラグ！？なんでこのタイミングで！？」

目の前には全長五メートルはあろうかと言う巨人。

それが手に持ったトゲトゲのメイスをぶん回す。

それだけで風が巻き起こり俺達はたたらを踏む。その攻撃は、一撃受けただけで致命的なダメージになることがわかる。

そして、そんな無茶苦茶な敵を相手に俺達は後一歩のところまで来た。

既に相手のHPゲージはレッド。だが、俺の仲間の一人も既にHPゲージが数ミリほどしかない。

「・・・後は、頼んだぞ！」

「待て、ダメだ！行っちゃダメだ！！」

「うおおおおおおお！！」

そして、特攻。

相手の巨人へと渾身の一撃を放つ。

だが、特攻をかけた俺の仲間も巨人の一撃を貰う。

相打ち。

そして、俺の仲間の体が輝きだし、ドットへと変換される。
その現象はすぐに治まりそこには誰もいない。
そう、死んでしまった。

「……嘘だろ、カーイー!!」

あ、そういえば言ってなかったけど、俺の仲間の名前は『カイ』
です。

そして、俺がそう叫んだ途端、後頭部にゴンという音が響く。

「何バカなことやってんの、さっさとカイを迎えに行くわよ」

「……へい。わかりました」

この暴力女様と心の中で付け加えておく。

コイツは『ロゼ』。種族は人間。見た目は美少女だが、外見に騙
されちゃいけない。いや、アバターだからって意味じゃないよ？普
通にそこらへんの男性のヤンキーさんなんか片手でひね……。

「ねえ、ミッド、何か失礼なこと考えてない？」

「イエイエまったく!!だからその剣を振り下ろさないで!!」

……ま、そういうわけです。

ちなみに、俺のネームは『ミッド』。種族は猫妖精^{ケットシー}。

「はぁ……。じゃ、さっさと町に戻って合流するわよ」

「わかってるって」

そういつと、俺とロゼは近くの拠点登録をした町へと歩いていった。

もう、お気づきの方も多いかもしれないがココで少しだけ説明をしておこう。

まあ、ぶつちやけると、ココは現実の世界じゃない。

まあ、普通に歩いてて魔物だ！巨人だ！なんていってたら命がいくつあっても足りない。

・・・そういえば、俺の場合はロゼがいるだけでいくつあっても命が足りない気が・・・。いや、気のせいだ。

・・・ちょっと話がそれた。というわけで戻そう。
簡単に言うと、これはゲームだ。

ヴァーチャル・リアリティ・・・ナントカRPGってヤツ。所詮はVRMMORPGって小説とかでよくある仮想世界であたかも現実のように世界を体感できるってモノ。

まあ、要するに電気信号とプログラムで構成されたもう一つの世界だとも思ってくれば良いと思う。

この、VR技術が開発されて数年。

つい最近、やっこのことで日本で初のVRMMORPGができた。
その名も『GOD'S WORLD ONLINE』。通称『GWO』なんて呼ばれている。

古来からある有名な神話、つまりはギリシヤ神話に北欧神話、エジプト神話、封神演技、アーサー王伝説、もちろん日本神話も。そして、それらを日本のある地域に当てはめて各神話領で領地の奪い合いをするって言うのがこのゲームの特徴。

ちなみに、割り当ては大体こんな感じ。

北海道・・・北欧神話（オーディンとかグングニルとか）

東北・・・ケルト神話（エクスカリ約束された勝利のつる・・・何でもありません・・・）

関東・・・ギリシャ神話（ゼウスとかポセイドンとかハデスとか）
近畿・・・無所属領（ココにはどの神話領にも属さない、簡単に言うところの方中心の領地）

中部・・・エジプト神話（ラーとかオシリスとかオベリスクとか有名かな？）

中国・四国・・・封神演技（バオベエ寶貝とか仙人）

まあ、こんな感じかな？

・・・え？神話じゃないのも混じってる？

そんなの、運営に文句をお願いします。『封神演技』は違つぞ！とかね。

まあ、それはおいといて・・・ちなみに、このゲームは完全スキル制で、スキル熟練度がモノを言うオンラインゲームだ。

そして、スキルの熟練度の最高値は一〇〇〇。そして、熟練度がある程度たまるとステータスポイントが与えられ、STRやDEF、INTなどに振って自分の好きなようにカスタマイズできる。でも、振ったらその時点でステータスポイントの変更は不可能だ。

要するに、俺達はこんな世界を冒険している。

ただ、一つだけ問題があるとすれば、それは『ログアウト』・・・つまりはこのゲームをやめることができないってことだ。

俺は、町のほうへとロゼと歩きつつ、『あの日』のことを思い浮かべた。

（二年前）

「たあ！」

俺は剣を振るう。

・・・って、言っても初期装備のショートソードに皮の鎧だけどこのゲームを始めて数日。

とりあえずはソロでプレイしている。場所は初心者用ダンジョンの森。名前は・・・忘れた。

そして、目の前には初期モンスターの象徴である水色のスライム。それを狩ってスキルをあげてみる。

・・・でも、ホントにすごいな。

目の前にあるものは水色でぶよぶよした物体。なんていうか、ザ・スライムって感じた。実際にスライムがいればこんな感じなんだろうなと思える。

そこでふと熟練度がどの程度たまったのか気になってシステムウインドウを立ち上げてみる。

「コマンド・メニュー」

このゲームは、大抵のことが音声入力方式でできる。

チャットやアイテムの呼び出し、スキルも然り。

そして、俺の音声で開かれたメニューを見て、スキルのタブを人差し指でクリックしてスキルの詳細情報なるものをチェックしてみる。

「・・・全然たまっていない」

初期スキルなのに・・・。

ちなみに、俺が使っていたのは初期スキル リスタ・ソニック。簡単に言うと、これは高速の二連続斬撃。威力の補正はなしですが初期スキルって感じだった。・・・でも、この技を使うとなんか気持ちいい。

まあ、それはいいとして・・・。

このゲームはスキル制だ。そして、更にはスキルの熟練度をあげると派生するらしい。

例えば、俺の聞いた話では魔法 ファイア の熟練度をあげる上位スキル、 ファイア・ボール が使用可能になるだとか。他にもある一定条件をクリアすれば覚えるEXスキルと言う特殊なものまであるらしい。

でも、これでわかった。スキルは相当使い込まなきゃダメなんだ。最高値一〇〇〇のうち、三日間スキルを使い続けてたまったのはなんと三。

・・・なるほど、千日かけてカンストしろと。

「やってやるうじやないか！俺はRPGでもとことんやりこむ派だ！！」

なんていうか、自分がいろいろとダメだなと思った。

一言で言うなら、廃人乙。

なんかテンションが駄々下がりになったから俺は町に戻って今日は落ちるかと思った。

まあ、そんなに森の深いところまで行ったわけじゃないからすぐに最初の町に着いた。

ちなみに、初心者用の町は無所属領に 現実で言うなら名古屋のあたりに ある町、その名も『ナゴヤ』がそうだ。

運営は絶対に考えるのが面倒になってそのままの地名を使いやがったなって俺は思ってる。・・・まあ、そんなわけでナゴヤに行くと、やたらと中央の広場が騒がしい。

なんだろうと思ひ、喧騒の方向へと向かう。

そこには、多くのプレイヤー達がいた。

俺は気になって近くのプレイヤーに尋ねようと思ったけど……
いかんせん、対人スキルが皆無だからどうしたものか……。

……インドア派だからしょうがないよね！

すると、いきなり何かのノイズが入る。そして小さいけど他の音も聞こえる。

「こんにちは、諸君。私はこのゲームのGMだ」

GM？つまりはゲームマスター？

……何かのイベントかな？……まあ、日本初公開のオンラインゲームだから何かしらのイベントがあったっておかしくない。

「まず、諸君はお気づきだろうが、三十分ほど前からこのゲームからログアウトできない。そしてアバターが解除されて自分本来の姿になっている」

……な、何ですと？

俺は急いでメニューを開きログアウトのボタンを押してみる。が、うんともすんとも言わない。まあ、アバターのほうはキャラメイキングでなるだけ自分に近い容姿にしたから別にいいとして……。
で、猫耳ついたままじゃん。

それに……なんだろう、すごく嫌な予感がする。

これはアレだろうか？

昔の小説にあった、ゲームの中に囚われてデスゲームをするって言う……。

「無論、ココに閉じ込めたのにはわけがある。それは、デぬおお
おおおおお！……？？」

いきなりGMが素っ頓狂な声を出したかと思うと、その後続いて金属同士がぶつかるような音が響く。

そして、小さく大丈夫か！とか救急車を呼べ！聞こえる。

いや、これってまさか・・・？

「交通事故!?」「」

・・・まあ、そんなわけで俺達は何でココに囚われた。それからが大変だった。

だって、最後に『デ』とか言ってるなんか事故った。

全員の反応はもちろんこの一言。

「デスゲームに巻き込まれた!？」

・・・そういうこと。

そのあともいろいろ意見が出た。

実はデスゲームとか言うのは嘘で死んだらログアウトできるとか。そういうとある人は小説だとそう言ったヤツが真っ先に死んだだけだな!!とか言ってる結局は膠着状態（まどろみじょうたい）が続いたまんま。すると、あるヤツが考え付いた。

「クリアすれば出れんじゃね?」

「それだ!」「」

そういうわけで、このゲームの目的は簡単に言つと領地の奪い合い。

それだと、犠牲者が出る可能性があつたが話し合いで『日本神話』領が一旦日本を統一。戦線布告をし、相手側が降参することによつ

て平和的に日本を舞台にしたゲームの領地は日本神話領で統一された。だが、何も起こらない。・・・そういうわけで、本当に八方塞な状況に。ちなみに日本神話領の方々は自分達のホーム以外をちゃんと返却してくれた。どうも、やたらと武士道とかにこだわる人がいたらしい。閑話休題。

ならば今度はダンジョンの制覇はどうだと、ハイレベルプレイヤー達が率先して攻略を開始。そして、ついにそれは起きた。すなわち、仲間の死。

でも、その人は拠点にしていた町で普通に生き返った。

いや、まさかデスゲームなのに生き返るとか・・・。

そして、俺達はついにマジでどうするってなった。

死ねない。出れない。どうしようもない。

まあ、こうなると外、つまりは現実世界からの助けを待つしかなくなったわけで・・・。俺達はこの世界を楽しむことにした。

良くも悪くもネトゲをやる皆さんは廃人が多く、リアル現実逃避を満喫していたりするって言うのが今の現状。

まあ、かく言う俺もこの世界を楽しんでいたりする一人だ。

・・・一応、ちゃんと元に戻る方法も探しているよ？

〜現在〜

ココは無所属領・ナゴヤ。

俺達が拠点登録している広場に行くと、そこには見知った影があった。

「あ、いたいた。お〜い！カイ！！」

「おっ？どうだった？やっつけられたか？」

「ええ。アンタのバカな特攻でね」

「……ロゼさん、えらくトゲのあるお言葉ではないですか？」

カイ、種族は魚人族^{マイマン}。ギリシャ神話系に登場する種族だ。特徴としては、耳のある辺りに綺麗な魚のヒレの飾りみたいなものがついてる。

主に槍を主体にコイツは戦っている。

……てか、魚の癖に槍とか。アンタが槍^{それ}に貫かれていそう。

まあ、そんなことはいいとして。

「で、どうなった？」

「ああ！お前等のおかげで新しいスキルを覚えたぜ！」

今回、どうもカイはもうすぐスキルの熟練度でカンストしそうなのがあつたらしく、俺とロゼにダンジョンの同行を求めてきた。

……って、言ってもただ単にコイツの後方支援をしるって話だけだな。

それに、ロゼは口より先に手が出るが、戦闘スキルに重点を置かれたこのゲームにおいて、回復スキルを極めている数少ないプレイヤーだ。自称『神官騎士』と言うだけのことはある。ちなみに、このゲームでは職業^{ジョブ}と言う概念は無く、自分で適当に名乗っているというのが現状。

「いやあ、でも、お前等がいてくれて助かったよ。ロゼのおかげでHP減っても回復できたし、お前がタゲられてたからこそこっちに攻撃はあんまり来なかったしな」

「・・・なら、何故に最後は突貫したし？」

ロゼは呆れた表情でカイに言う。

まあ、そこはアレだろ。」

「「ノリで」「」

「バカ二人に聞いた私がバカだったわ」

周りから見たら俺達はバカ三人だろうな。

「で、どんなスキル覚えたんだ？」

「それは内緒に決まってるだろ？」

「まあ、それもそうね」

俺も別にそんな強引に聞こうとまでは思わない。

何回も言うが、このゲームはスキル制だ。スキルの数、質がモノを言う。

簡単に言うと、スキルを他人に教えることは自分のステータスそのものだからだ。

好き好んで自分の強さはこれだけだぜ！・・・なんていうのはホントに少数派だと俺は信じたい。

だが、これには例外も存在する。

例えば、あまりに強すぎて周りに知れ渡ってしまったとかだ。

まあ、そんなハイレベルプレイヤー相手に勝てる人なんてそうはいないけど。

……そうだな。例えば、俺の知り合いにでっかいワゴン
を従えた女の子。二つ名は通称。

「おい！『グレイブニル神の鎖』か、あれ！？」

「そうそう。かなり大仰な名前の『グレイブニル神の鎖』。

北欧神話にて出てくる、『フェンリル魔氷狼』を繋ぎとめたつていうヤツ。
ちなみに、ヤツは俗に『テイマー魔獣遣い』という職業ジョブだな。ただ、テ
ムしてるのがあまりにヤバすぎてみんなから畏怖の念を……。

「……おい、ミッド。お前の彼女が来てるぞ？」

「はあ？俺に彼女なんていないし。……ちょっと、急用を思い
出したから俺行くわ」

そう言っつて可及的速やかにその場を離れようとするって回れ右を
すると、なにやらやわらかいものにぶつかった。

ほんの少しだけ離れると、目の前には青い毛が。

そして徐々に視線を上に向けていくと、でっかくて青い毛並みの
ワゴンにまたがったミスティアスな美少女が。

そして、無表情な顔で俺にこういった。

「……見つけた。……タマ二号」

「タマって誰？俺はジョン・ぼち・ジローです。人違いですね、
じゃー！」

速攻で逃げ出した。

だって、厄介ごとには関わりたくない！

「……待て……タマ二号……タマ……!」

相手がそういうとでっかいワンコ、『タマ』が猛スピードで俺に近づいてくる。

「俺を、舐めるなあ!」

俺も猛ダツシユ。

だが、距離は一向に開かない。

……チクシヨウ、自分のペットのステータスを上げやがったな!?

「……いや、いつ見てもありえないと思うな」

「……確かに、ユニークモンスターの魔氷狼フエンリルを近づけさせないって、どう?」

「……待て。タマ二号」

「誰が待つか!?!」

あ、そついやカイの熟練度上げのときの俺の役割を言ってなかったな。

俺は敵に近づき、カイにターゲットをもっていかさないようにするコト。

それができるのも、このスピードがあるからだ。相手に近づいて攻撃されそうになったら離れるという方法でカイを敵のターゲットをできるだけこっちに向けた。

まあ、そういうわけで俺には実は二つ名があったりする。ただし、これはどっちかって言うと蔑称かもしれない。

「おい、あれって、まさか『音速の剣士』か？」

「・・・ああ。あの、スキルを一つしか覚えてないSPD極振りの変態か」

周りの人が何か噂してるけど、たぶんそれが俺だ。

俺が使える戦闘スキルは リスタ・ソニック。北欧神話系のキヤラがまず最初にチュートリアルで覚える初期の技。それを愛用してる。

・・・いや、俺は変態じゃないっすよ？

クエスト1・ゲーマー達の日常（後書き）

用語集

GWO・オンラインゲーム。自由度が高い、スキル制のゲーム。

主人公たちはこのなんちゃってデスゲームに囚われてしまった。

スキル・ゲーム内で私用できる技。戦闘スキルのほかに生産スキル等がある

二つ名・そのゲーム内で有名なお方につく一種のステータス。

主に神話にあるものを使うことが多い。特に、神様の名前ゴッド・ネームを持つものを神名と言う。

クエスト2・猫妖精の憂鬱

Player・ミッド

「ゼーはー……」

「お疲れ……ほらな、俺が言ったとおりだったろ？」

「……最悪、何で負けないのよ」

広場の喫茶店にカイとロゼはいた。

そして、カイとロゼがさういうとロゼがカイに何かを渡す。
……どうも、お金らしい。

「お前、等、人が、死ぬ思いで、あの、鉄仮面、女から、逃げて
る、ときに、何、賭けとか、しちゃっ、てんの……!？」

「まあまあ、ほれ、お前の配当だ。受け取れ」

さういうと、カイは俺に飲み物を渡してくれた。

ごく普通のオレンジジュース。

まあ、このゲームの世界ではメシを取らなくても死ぬことは無い
けど、腹が減るという感覚はガマンできない。何故かはよくわから
ないけど。

俺はカイがくれたオレンジジュースをありがたく頂くと、それを
一気に飲み干す。

「ぶはあ……でもさ、あの女も何で俺に構うのかね」

「……ペットが欲しいんじゃない？」

「ペット!?俺ペット!?」

ロゼの一言はかなり傷ついた。

いや、確かに俺は猫妖精ケットシーだけどさ!
でも、断じてペットじゃない!

「……アレじゃね?やっぱ、お前が好きなんだよ」

「カイ、お前、どの口でそんな事言うか。大体、それなら目の前ではつきり言えがいい。それなら俺も考えてやらんことも無い」

「……わかった。……スキ」

「うおおおおい!?!」

なんかイター!?!?

でっかいワンコ連れてないけどイター!?!?

俺はもはや条件反射的に逃げようとしたらカイに腕を掴まれた。

「は、離せ!俺は、走り出さなくちゃいけないんだよおおおおお
お!?!?!」

「いや、ココで熱血いらないから」

「……私は答えた。……で、どうするの、タマ二号?」

「だから俺はタマ二号じゃねえー!」

いつの間にかいたのはミステリアスな雰囲気、と言うよりも最早

怪奇現象な雰囲気醸し出している美少女。ただし、性格は・・・最低。

「・・・安心して・・・ほんの少し調教するだけ・・・痛くないから・・・たぶん」

「黙れこのサディスト！！たぶんって何だよ！？それに調教って！？俺はそんな性癖は無い！」

「・・・いやん・・・そんなに褒めないで」

そういうと頬に手を当てて腰をくねくねさせているわりに顔は完璧なポーカーフフェイスを保つ変な生命体が。

「まあまあ、いいじゃない。たまにはイースさんの話も聞いてあげなさいよ」

「だが断る！」

「・・・タマと追いかけて」話を聞こうじゃないか！！」・・・ありがとう」

いや、もう正直な話、タマとの追いかけては辛い。

この見た目十代前半の美少女は『イース』。このゲームで一回しか出てこないモンスター、つまりはユニークモンスターの『フェンリル魔氷狼』をテイムすることに成功した猛者だ。そのため、このゲームで治安の維持を目的とした『ガーディアン守護神』と呼ばれる組織の一員でもある。

ただ、このイースのホームは北欧神話領、実際の地名では北海道の当たりにいるはずなんだけど・・・。

「……有給貰った」

「まさかの給料制!?!」

『ガーディアン守護神』の意外な事実が発覚した。

ちなみに、この『ガーディアン守護神』と呼ばれる組織。

もちろん、ハイレベルプレイヤー達が中心になって取り締まっている。

そして、『ガーディアン守護神』の幹部プレイヤー達の名前に特徴的があり、それぞれのエリアに關した神様の名前が二つ名になっていることが多い。

例えば、のトップは『オーディン』と呼ばれていたり、ギリシャ神話領では『ゼウス』、『ポセイドン』、『ハデス』。封神演技では『ナタク』、『ヨウゼン』など言った名前をよく聞く。

つまり、コイツも北欧神話系の神器の名前を冠した二つ名を持っているのもそういう理由からだ。

「で、何で俺を追い掛け回す?」

ただ、本当にだいたい前に、一度だけ俺がなんかやったような気がしないでもないけど……。

「……お前、強くなりそう。……それに、タマがついて行くのが精一杯。……リーダーに褒められそう」

「いや、そんなアバウトな……しかも下心満載で」

「……何より、私がお前を調きよ……訓練したい」

「おい!?!お前、何さりげなく調教とか言ってるの!?!お巡りさ

ん！ここに変態がいます！！」

この女はただの変態だった。

いや、だって、調教したいって言いながら何で恍惚とした笑みを浮かべるの！？しかも頬を赤らめて！明らかに普通の人の精神じゃない。

俺はマジでいろいろとやばいものを感じ取り、すぐそこにいた『ガイディアン守護神』の人つばい人にすぐ声をかけた。

すると、何故か俺は同情するような顔だけ向けられて何事も無かったかのように巡回をし始めた。

「ちょ！？おたくの『ガイディアン守護神』つばい人が職務怠慢ですよ！？」

「・・・大丈夫。・・・私が邪魔するなって、アイコンタクトした」

ダメだコイツ何とかしないと！？

でも、やっぱり、権力には立ち向かうことができないか・・・。
てか、明らかに職権乱用だ。

・・・よし、また今度北海道に行くことがあれば北欧支部のトップの人に匿名で垂れ込みをしておこう。

「でも、何で追いかけてっこしないのよ？」

「・・・さあ？」

確かに、今の俺はかなり参ってるから、タマに追いかけられたら普通に負けると思う。

「・・・タマも疲れてる。・・・それに、約束した」

「……どんな？」

カイが俺に聞くが俺だってわからない。何か、約束したことあったか？

「……いや、だいぶ前にした『俺に追いつけたら何でもしてやる！』と言うヤツのことを言ってるのか？」

確か、あの時はコイツがフィールドでモンスター追いかけていて、その時にたまたまこいつ等の進路上にいて轢かれた時に文句言ったらコイツが俺のせいで獲物^{エモ}が逃げた的なコトを言ったもんだから俺がそのモンスターひっ捕まえてやったら何かものすごく驚かれたよ
うな気が……？

そして、俺に『タマ二号になれ』って言うわけのわからんことをいわれて今に至ると……。

「……お前の全力に追いつけないと、意味が無い」

「……無駄にスポーツマンシップに則っていうるんだな」

どうも、そういうことらしい。

俺達は上の人が考えることはよくわからないと目配せしながらため息をついた。

「あ、あの、すみません！」

いきなり謝る声が聞こえた。

俺は誰かがカツアゲでもされているのかと思って声の方向を見ると、そこには通りかかる人に声をかける少女が。

でも、何か相手にされてないっぽい。

「なあ。あれ、何してんの？」

「あれ？・・・ああ、さっきから、ここら辺でどうも聞き込みをしてるらしい」

「私たちもここに入る前に聞かれたわ」

「なんて？」

「名前はわかんないし、容姿も猫妖精^{ケットシー}ってコトしかわかないけど、アレは確実に『風の踊り子』のことを聞いてたわ」

「・・・『風の踊り子』、ね」

『風の踊り子』。それはこのゲーム内にある一種の都市伝説みたいなもの。

何でも、やたらと強いプレイヤーがいるらしい。

何でらしいかと言うと、攻撃があまりにも速過ぎて何をされたのかわからないらしい。

んなバカな話があるかとは周りの言葉。

「何で、そいつのことを調べてるんでしょかねえ・・・」

俺は注文した緑茶を飲みながらのほほんと言う。

「さあ？どうも、数ヶ月前にあの娘はPK集団に襲われたらしいで、そこを助けたのが『風の踊り子』らしき人物。格好はマントを被ってて耳の辺りがとがってたから猫妖精^{ケットシー}ってのはわかつたらしいけど。・・・相手が降伏しないとわかると本当に瞬殺したらしい」

「……要するに、あの娘も何が起きたかわかってない」

俺達は何とはなしに聞き込みを続けるその少女に目を向けた。

すると、その少女は俺達の視線に気がついたのかくると振り向いて俺達を見る。

すると、俺で視線を固定。

「……あ、俺さ、つい最近料理スキルを上げ始めたんだよね。だから、今日は帰って料理するわ」

ごく自然に、さりげなく帰ろうとした。

なぜかって？もちろん、厄介事の臭いがしたからに決まっているじゃないか！

でも、神様は俺が嫌いらしい。

というか、『ガーディアン守護神』のミスティアス女神様が俺の襟首を掴んでいた。

「すみません、イースさん。この手を離していただけませんかコ
ンチクシヨウ！」

「……まあまあ。……ゆっくりしていけ」

「お前、わかってやっているだろう!？」

「あの一!」

いつの間にか聞き込み少女が目の前に。

まあ、見た感じはごく普通のどこにでもいる女の子だ。

種族は『エルフ』。北欧神話領の出身だろう。

ちなみに、エルフは、たしか北欧神話にしか出てこなかったりする

るっていう豆知識。・・・たぶん、あってる。

いや、それは今はどうでもいい。つか、このドS女に邪魔されたおかげで逃げられなくなっちゃった。

「貴方、猫妖精ケットシーですよね？」

「いいえ、私はケットニヤーです」

「おい。何を新しい種族を作ろうとしている。確かにコイツは猫妖精ケットシーだ」

カイは普通に俺の種族をばらした。

・・・後で八つ裂きにしてやる。

「貴方が、私を助けてくれた人ですか!？」

「全然違います」

俺がそういうと、目の前の聞き込み少女はあからさまに落胆したというのを全身で表す。

・・・何でだろう?別に俺が悪いわけじゃないのに、後からの視線がものすごく痛い。

「・・・いえ、実は貴方は嘘をついているんです!！」

「その根拠は何!？」

いきなり俺にビシッと指をつきつけたかと思うと、いきなり俺がうそついた宣言をされた。

いったい、その自信はどこから来るんだろう?

「ああ、なるほどな。確かに、猫妖精^{ケットシー}はSPD補正がいくらかつく。要するに猫妖精^{ケットシー}を選ぶってコトは盗賊系^{シーフ}の職業^{ジョブ}につくのと同じだ。つまり、ソロでプレイするには火力が足りないから、基本的にPTでのプレイでしか本領を發揮できない。そして、ココは無所属領だからな。基本的にソロプレイするヤツが多い。そうすると必然的に猫妖精^{ケットシー}みたいなSPD系のキャラはかなり少なくなる」

「ちよつと待て、それはこの聞き込み少女が無所属領で襲われたってコト前提だろ？確かに、無所属領は全部の領地の中で一番ダンジョンが多いけど、他の領地にもダンジョンはあるぞ？」

「あ、私は無所属領のダンジョンからの帰りに教われました」

「……さいですか」

確かに、俺もSPD系のキャラに会ったことはあんまりない。でも、だからって、俺だってコトにはならないと思うのですが？

「でも、コイツはただのヘタレよ？」

「……俺、泣いていいか？」

「……タマ二号、泣くなら私の胸で。……そして持ち帰る」

「黙れドS女、無い胸でどう泣け……すみません、もう言わないからその鞭を振り下ろさないで!!」

「ね。わかつたでしょ？」

「……でも、この辺で猫妖精ケットシーの人がいないんですよ。それに、猫妖精ケットシーで男の人って言うのもあんまりいないので……」

「……あれ？『風の踊り子』って、男だったの？」

「あ、はい。たぶんですけど、声は男性のものかと。それに、一人称も『俺』でしたし」

「猫妖精ケットシーで、男、そして一人称が『俺』」

そういつと、ロゼは俺のほうを向く。

「……でも、コイツだけは無いわ」

「酷い！？お前、俺とPT組んでドンだけだよ！？」

「……三日ぐらい？」

「違い！？一年はいつてる！それをどうしたら三日と間違える！？」

「いや、アンタ影薄いから。そうそう、私が回復魔法を覚え始めたのって、アンタにあっけからだったわね」

「そうなのか？……ちなみに何で？」

「コイツを回復してボコるために」

「鬼だ！ココに鬼がいる！？」

「たぶん、もうすぐ蘇生魔法覚えるからそんな時は心置きなく殺れるわ。・・・安心して、ちゃんと蘇生してからもう一回殺るから」

「何で俺の周りにはDS女しか集まらないんだよ!!」

人生つてのは理不尽だと思った。

何で、俺には女運が無いんだろう？

「でも、この人が一番怪しいんです」

いや、何で犯罪者みたいに言われなくちゃいけないの？

「だから、私を貴方のPTに入れてください!」

「・・・は?」「」

俺の人生、何でこうも厄介事ばかりなのかなあ・・・。

クエスト2・猫妖精の憂鬱（後書き）

用語集

『ガーディアン守護神』・ゲーム内における警察のようなもの。実力者でないプレイヤー達を捕まえることができないので、二つ名持ちが多い。また、それぞれの神話領を分担し、エリア争奪戦のときはこの人たちが中心に指揮をとって戦う。

クエスト3・商い少女の調査報告

Player・ミッド

聞き込み少女　ちなみにあの子は『ミサ』というらしい　との遭遇から数日がたった。

俺とカイとロゼはいつものように適当なダンジョンにもぐったり、そして俺はイースとそのペットのワンコのバカ達に追っかけまわされたりと、日々、平和に暮らしていた。

まあ、いつもと違うのはミサがいるってコトぐらいだろう。でも、そんなのは些細な問題だ。別に、低レベルの戦闘プレイヤーだから俺達は放っていいたりしないしな。

そして、俺はふと気になったことがあってミサに聞いてみた。

「・・・そういやさ、何でPK集団に襲われたか心当たりは無いの？」

「はい?・・・いえ、そんなものは・・・強いて言うなら、私が初心者ってコトでしょうか？」

そうか・・・。

相手はただの愉快犯か。

「あら?でも、アレから二年よ?それで今、初心者ってどづいつこと?」

ロゼが気になったのか俺とミサの会話に口を挟む。

・・・そういわれるとそうだ。

確かに、二年経って初心者とか・・・ね?

「たぶん彼女は生産組なんじゃないのか？」

すると、カイが俺達の疑問に答えてくれた。

「・・・でも、『生産組』と初心者がどういう関係があるんだ？」

『生産組』って言うのは簡単に言えば生産系スキルを極めている人たちの総称。料理スキルや鍛冶スキルに相当するものだ。

逆に、俺達みたいな戦闘系スキルを極めているのが『攻略組』って言われている。

「でも、それなら余計にわからないわ。だって、『生産組』の子がいきなり『攻略組』にシフトチェンジするって意味がわからないじゃない」

「いや、大有りだ。つい最近、問題になってきたんだけど・・・まあ、簡単に言うと、今になると極めたいスキルをコンストさせたヤツが大勢いるんだ」

「・・・なんとまあ」

正直、生産スキルを極めるのは相当メンドイ。

遅々として熟練度がたまらないうえ、物を作るためには元になる素材がいるからだ。

でも確かに、二年もここにいたらイヤでもコンストするよな・・・

「はい。私も料理のスキルを一通りコンストさせてしまったので・・・」

ミサは地味にハイレベルプレイヤーだった。

下手したら俺よりもステータスが高いんじゃないか？

でも、ミサはそこで表情を暗くして深刻そうに言った。

「でも、お金が無いんです」

「……どういふこと？」

というわけでカイ先生に聞いてみよう！

「いや、な。……このゲーム内で、建物が購入できるのは知ってるだろ？」

「ああ。だって、個人でも家かってそこで店をやっているとかあるもんな」

「うん。私の知り合いの鍛冶師にも自分の工房を持っている人がいるわ」

「そう。……で、実は今のこのゲーム内には個人で購入できるような物件が無いんだよ」

「え？何で？」

「簡単だ。売り切れ。……そういうわけで、個人で店を開きたいやつは露天商するか、でっかい大手ギルド用のホームを買いしか方法が無いんだよ」

「……うそお！？」

だって、家だよ！？

建築スキルの持ち主とか……。

そうだった。このゲームには建築スキルなんてものも土木スキル

なんなんて物も無い。

もちろん、閉じ込められているからかアップデートなんてシャレたものもない。

「で、今あるのは大手ギルド用の豪邸みたいな家しか空いてない」

「そうなんです。・・・私、どうしても自分のお店を作りたくて・・・。それでも、今はそういうところしかなくて・・・。」

「だから、多くの生産職のヤツ等は路頭に迷ってる。それに、このゲームは元々が領地の奪い合いだからな生産職向けの待遇がまだ微妙だつて言うのは始めの段階で言われてた」

「・・・ちなみに、大手ギルド用ホームはおいくらで？」

ちなみに、ココでのお金の単位は『ネル』。もし、俺が前に飲んだジュースを買おうとすれば五〇ネルだったか？

「ああ。確か・・・数千万ネルだっけ？」

「あ、はい。たぶんそれぐらいかと」

「「数千万!?!」」

天文学的数字だった。

・・・なあ、数千つてゼロが何個？

「・・・つて、まさか、狙われた理由って!?!」

「たぶんそうだろうな。金目当てだ。それもかなり問題になって

きている」

このゲームでもしも死んでしまった場合、デスペナルティと言ったものが発生する。

これはプレイヤーが死ぬと所持アイテム、または装備が確立でドロップしてしまうという内容だ。

でもPKしたときには相手の所持金の半分が必ず自分に来る。

つまり、PK集団がミサをPKすればかなりの額の金を横から掻っ攫うことができる。

「最ツ低ね！！カイ、何とかできないの!？」

「いや、そんなこと言われても……。今も対策を考えている途中だ」

「大変だねえ。……ミサ、ちなみに今いくら？」

「あ、えと……。八六〇万ネル……。ぐらいですけど？」

「なるほど。……コマンド・メニュー」

そういうと、俺はメニューを展開。

そして、手早く操作してトレードのボタンを押す。

すると、ミサがいきなり驚いた表情をする。

「え?でも!?!?!?こんな!?!?!」

「ミッド、アンタ何したの?」

「投資。……喫茶店を作ってくれらるとうれしいな」

「え？・・・で、でも、こんな大金・・・」

「・・・別に貰ってもいいんじゃない？コイツ、よくわからないけど、装備はやたらとレアだし買い替える気もまったく無いみたいだし」

「そうそう。でも、大丈夫。三分の一ぐらいは残ってる」

「・・・これの、三分の一？」

「・・・アンタ、ドンだけ投資したのよ」

「まあまあまあ。俺はロゼと違って浪費癖が無いんだよ」

「・・・そこはかとなくむかつくわね」

「でも・・・」

「なら、それは貸しってコトで。無利子無期限。返せるようになつたら返して」

「・・・もう、この数日でわかってますから」

そういうと、どこと無くやけくそ気味にミサは承諾のボタンを押す。

すると、俺の金額の欄から所持金の三分の二が消えた。でも別に惜しいとは思わない。

スキルの熟練度上げるついでに適当にモンスターを狩っていればそのうち貯まる。

そして今日もいい天気だなーと思って空を見上げた瞬間、頭に何かモフモフしたものがぶつかる。

恐る恐る離れてみると、そこには青い毛並みのでっかいお犬様。そしてそれにまたがる怪奇現象・ドS女。

「・・・タマ二号、見つけた」

「それらば...!」

そういつと、俺は目にも留まらぬ速さでそこを駆け出した。

Player・ミサ

私は最早消えたと思えないスピードで走り出したミッドさんとそれを追いかける『グレイブニル神の鎖』と名高い魔獣遣い、イスさんを見て思った。

「・・・ホントに、このゲームで一番弱いプレイヤーなんですか?」

「ある意味においてはかなり強いと俺は思う」

「・・・でも、確かにアレはかなりのステータスポイントをSPDに振ってるわね。それも極振り。そうでもしないと魔氷狼フェンリルと追いかけてこなんでできないわよ」

ミッドさんの二つ名『音速の剣士』

これは、ミッドさんが北欧神話系キャラでチュートリアルを受けてすぐに習得するスキルだ。このスキルの詳細は、高速で剣を振って攻撃すること。でも攻撃力の補正が無いうえ、スキルの熟練度を

上げても一向に派生スキルを覚えない。攻撃内容もそんなに変化無しという・・・言ってしまうえばDMな人の使うスキルだろう。

「でも、さすがに他のスキルも覚えていきますよね？」

「・・・それがね、どうもアレだけみたいなのよね。あ、投擲スキルも持ってたっけ？」

「お？そうなのか？」

「・・・」

カイさんはそれすら知らないらしい。

・・・私達の事情にはものすごく明るかったのに。

「・・・でも、お二人とも、相当強いですね？」

「まあ、それなりに？」

「俺は確かに結構強いと自負しているぞ」

「じゃあ、何でミッドさんと一緒に？」

「俺は・・・まあ、流れで？」

「・・・私は、そうね・・・。一年前、アイツに助けられたから？」

「・・・はい？」

おかしい。

頭の中で再生される映像はミッドさんがロゼさんにボロボロにされる映像だけだ。

・・・中には、ダンジョン内にも関わらずかわいそうなことをされているミッドさんの姿が・・・。

うん。ロゼさんがミッドさんに助けられるってところが想像できない。

「でも、本当なのよね。それに、あの時だけなんか リスタ・ソニック じゃない技を使った気がするのよ」

「気がするって・・・」

「それがさあ、たまたまエジプト神話エリアでさ、ダンジョンの性質のおかげで前が見えなかったのよ。でも、その時に相手してたモンスターが文字通り八つ裂きになってたのよ」

・・・いや、ミッドさんのことだからきつと何かあげつないことをしたんだ。

例えば、モンスターにモンスターをキルさせるとか、実はそれはミッドさんじゃなかったとか。

私頭の中について最近のミッドさんの戦闘方法がフラッシュバックされる。

例えば、ミッドさんが何故か私のほうにモンスターを連れてきてMPKをしようとしたとか、遠くから私達の応援をしていたりとか・・・。

・・・あれ？やっぱり、私を助けてくれたのはこの人じゃないのかも？

「でも、アイツは地味にこのゲームのことを知ってるのよね」

「はあ?」

「いや、ね……。別に、神話のことをよく知ってるのはいいと
して、アイツが倒せないはずのモンスターの詳細知ってたりとか」

「……あれ?でも、このゲームは基本的に上位のモンスターは
神話に出てくるもので、それに限りなく忠実に再現してあるとか聞
いたことありますけど?」

「……でも、ね」

ロゼさんはどこか納得しないような表情でそういった。

「……でも、確かに謎の多い人だとは思う。」

最近この人達と過ごしてみてわかったことは、この人達は個性的
だぐらいだし……。

「……そういえば、イースさんにいつも追いかけてられています
けど、何ですか?」

「ああ、それはな……。イースのヤツな、獲物を狩っていたら
しい。そこで、そいつを追いかけていた進路上にミッドがいて、そ
のままミッドは轢かれる」

「……なんというか、不憫な人だ。わかってはいたつもりですけ
ど。」

「それで、ミッドはイースにお前のせいで獲物を逃したみたいなの
ことを言って、ミッドは代わりにそいつをひっ捕まえてきたんだと」

「・・・わかった。それがレアなモンスターとかだったんじゃないの？」

「そうらしい。でも、俺が知ってるのはそこまで。ミッドはモンスターの名前まで覚えていなかった」

「・・・なんていうか、いい加減ですね」

「確かに。・・・まあ、そんなわけで今のアレにたどり着く」

カイさんが指をさす方向を見ると、そこにはものすごい展開が・・・。

ミッドさんは忍者よろしく『ナゴヤ』の建物の屋根を爆走。

そして、それを追いかけるようにして大きな青い影が。

しかも、咆哮系ブレスの攻撃をしてミッドさんを足止めしようとしている。

そこを、ミッドさんは手を動かし、何かをしていた。

「・・・おっと」

カイさんは、そういうと何かを取る仕草を行う。

すると、そこにはついさっきまで無かったはずの投擲ナイフが握られていた。

「危ない、危ない・・・おい！ミッド！あんまりナイフを投げんな！」

「無理！」

「・・・今日こそは、逃がさない」

そういつと、ミッドさんとイスさんは風のように走り去って
った。

そして、後に残るのはしんとした広場。

何だが、それは嵐が通り過ぎていったような感じだった。

クエスト3・商い少女の調査報告（後書き）

用語集

PK・プレイヤーキルの略。『GWO』内にてPKをすると倒した相手の所持金の半分が手に入り、運がよければ装備していたものをドロップする。

MPK・モンスター・プレイヤーキルの略。高レベルモンスターを引き付け、他のプレイヤーへと誘導しそのモンスターにPKさせるという極悪な行為。よい子のみんはマネしないでね！

ネル・『GWO』内での通貨。お金があれば何でもできる。

エジプト神話領・中部地方を中心に広がる神話領。全体的に砂漠のフィールドが多く、主要都市は水が流れており外観が大変綺麗。『遊王』で有名なアレである。

クエスト4・猫妖精の剣技

Player・ミッド

〔無所属領ダンジョン・地下迷宮〕

「・・・いつ来ても何かココはいやだなあ」

「何？アンタ、幽霊が怖かったんだっけ？」

「いや、まあ・・・やけにリアルだから地味に・・・」

「・・・わからないでもないわ」

ココは無所属領ダンジョンのナゴヤ付近にある地下の迷宮ダンジョン。

地下鉄道をモチーフにしてあるのか、線路が敷かれていたりする。ちなみに、今回はロゼの剣の素材集め。

ロゼの知り合いの鍛冶師にいい剣を作るやつがいるらしく、そいつに造ってもらうためにこんなところまで来ている。

・・・でも、今ロゼが持つてるその剣も、正直な話かなりのレアモノだった気がする。

「でも、魔法の補正が掛かんないのよ」

「いや、むしろそんな剣があるの!？」

「あるわよ」

あるらしい。

「何その、魔法剣士御用達みたいな武器!？」

・・・いや、そういえばモンスタードロップに時たま特定魔法においてなら数パーセントの補正がつくのなら俺も拾ったことがある。それと同じか？

まあ、いい。今はそんなことよりも重大なことがある。

「え？え？え？きゃ！？」

俺の後で、一人の少女がモンスターを見るたびにいちいち驚いていること。

・・・ココのモンスターたちは一部を除いてこっちから攻撃しない限り攻撃されることは無いんだけどな・・・。

「でも、何その・・・まるで初心者のような振る舞い？」

「い、いえ、だから、初心者なんですよお！？」

ああ、そういえばそうだったと俺は先日のことを思い出した。

俺達が閉じ込められて既に二年。

初心者なるモノが存在していれば確実に天然記念物者、いや、最早化石だ。というか、いるわけが無い。

まあ、この子はその例外。自分のお店をゲットするために日夜モンスターと戦い続け、資金を手に入れようとしている。

『生産組』。要するに、『GWO』内にて生産スキルを中心に熟練度をあげ、店を構えたりしてる人たちのこと。

ただし、つい最近になって生産スキルをカンストさせてしまい、伝も無く、そして店を持ってないという様な人が続出。というわけで、そういった人たちは手っ取り早くお金をためるためにモンスターを狩り始めた。

このゲームの通貨『ネル』にして確か・・・数千万ネルとか必要だったかな？

そして、PKして相手を倒すと、倒した相手の所持金の半分と、
たまに装備アイテムをドロップするというのがある。

PKを専門にして生計を立てているようなやつにとっては、初心
者同然のこいつらはいいいカモだ。

そう、頭の中で情報をまとめる。

そして、俺は今回の目的の素材集めについての詳細を特に何も聞
いてないことに気付いた。

「なあ、そういや、素材ってどんなの使うつもりなんだ？」

「あら？言っただけじゃなかったかしら？」

「……ミサ、聞いてた？」

「い、いえ、私はついてきただけなので……」

そうだよな。

……やっぱ、魔法補正つく剣なんだし、特殊な金属系素材か？
でも、この辺に金属採集場所なんかあったっけ？

「なあ、どこで金属を採るんだ？」

「金属じゃないわよ？」

「え？……じゃあ、ロゼさんは何を？」

「『不死龍』の魔宝魂よ」

「よし、ミサ、帰ろう」

「え？は、はい！？」

「ちよつと待ちなさい」

俺は襟首をぐわしと掴まれて逃げられなくなる。

「お前、アホか！？不死龍アンデット・ドラゴンなんて、このPTで手に負えるような代物じゃないぞ！？それに、こんなところにいるなんて聞いたことが無い！」

不死龍アンデット・ドラゴン。簡単に言う俺達では手に負えないボスモンスター。正確にはそいつが低確率でドロップする魔宝魂ソウル・オブと言う武器や防具の素材を、そいつを倒して手に入れること。いや、魔宝魂ソウル・オブ自体はどのモンスターからもドロップする。ただ、ボスモンスターやレアモンスターになるほどドロップ率が減り、強力な武器の素材となりえる。それに、噂じゃその倒したモンスターの特性みたいなのもつくことがあるらしい。

だが、今回狩ろうとしているのは龍種でありながら不死属性を持つというえげつないモンスターだ。攻撃自体はわかりやすく、次に何をしてくるのかわかる。だが、問題はその不死属性アンデットのほうだ。コイツには、物理攻撃がほぼ効かないといっても過言ではない。だから、魔法攻撃を中心としたPTで挑むのが普通だ。

かといって、魔法使いだけで行っても死ぬ。こいつの攻撃力自体が普通に強すぎるからだ。高レベルの魔法使いでも一撃貫えばHPバーがレッドになるのは確実と言う鬼畜さだ。だから、コイツを討伐するためには防御特化の戦士系と魔法使い、回復役がいる。

そして、今回の俺達のPTはと言うと……。
盗賊シフ的なスキルしかない俺、魔法スキルは回復のみの剣士口ゼ、ザ・初心者ザ・初心者のミサ。

……絶対勝てない。

ミサはよくわからないのかきよんとしている。

「そのためにアンタを連れてきたのよ。簡単に言うはずっと、タゲられてなさい」

「アホか！龍系は咆哮ブラウ持ってたぞ！？俺がタゲられてても一瞬で死ねる！」

俺は紙装甲ペーパーだ！

この中でヤツの攻撃を喰らえば真つ先に死ぬこと確定！

「せめて、何でカイを呼んでこなかった！？」

「だって、カイは都合が悪いって言ってたから」

「俺はいいのかよ！？俺は知り合いの約束をお前のせいでドタキヤンするハメになったんだぞ！？」

後日どんなことをされるか……。

いや、不死龍討伐アンデッドドラゴン討伐の後に俺はラスボスを倒しに行かなくちゃ行けなくなるかもしれない。本当に……。

「……相手に悪いことをしたわね」

「俺にもだよ！？つか、最低でも俺達よりもっと強いヤツが一人いる……」

「でも、急にそんな……フレンド登録した人達に今すぐきてって頼んでも……」

「そうよ。潔く死になさい」

「イヤだ！・・・しょうがない」

俺は後ろを振り向くと曲がり角に向かって歩いていく。

二人は俺の行動に首をかしげているが俺はそれを無視した。

そして、俺が目当ての角を曲がると、そこにはでっかいワンコを引き連れたDS女様が。

「・・・こんにちは。・・・偶然ですね」

「んな偶然があつてたまるかこの野郎」

イスとタマだった。

「・・・何でわかった？」

「Pスキル『気配察知』だよ。それに、ボスマンスターの表示にプレイヤーの表示が近くにあつたからな。たぶん、お前だと思ったんだ」

Pスキルとは、パッシブスキルのこと。

簡単に言うと、常時発動中のスキルだ。俺が何でわかったのかについて、このPスキル『気配察知』のおかげだ。

これはダンジョン・フィールドといった戦闘可能区域でのみ俺の近くに半透明のウィンドウが表示され、ボスマンスター、モンスター、プレイヤーを表示してくれる。ちなみにユニークモンスターはボス扱いになつてる。

まあ、このスキルはリーダーみたいなものだと思ってくれればいいと思う。

「・・・廃人」

「黙れ。ユニークモンスターをタイムするような廃人に言われたくない」

「・・・どういうことですか？」

「ああ・・・。Pスキルは熟練度上げるのが面倒なのよ。だからPスキルを鍛えてる物好きはよく廃人プレイヤーなんて言われてるの。でも、私から言わせたら『ガーディアン守護神』のトップも十分廃人プレイヤーだけど」

スキルは、反復して行うことによつて熟練度がたまる。

普通のスキルはモンスターを倒すついでにやればいいが、Pスキルはそうも行かないものが多いうえ、どんなに熟練度をためてもステータスポイントが入らない。例えば俺のPスキル『気配察知』は、絶えず周りをキョロキョロと目線を動かしていないといけならしい。これの熟練度をためるのに俺は首を痛めかけたことがある。だが、その代わりにPスキルのもたらす効果はすばらしい。今の俺は『気配察知』の熟練度をかなり上げてあるからか、モンスターの位置はもちろん、畏やなんかもわかる。こいつのおかげで今も危険なモンスターが近くにいないことが・・・。

「・・・あれ？」

「・・・どうした？」

「いや、俺の目がおかしいのかさ、近くにタマ以外のボスモンスターの表示が・・・」

「来たか!？」

何故か好戦的な表情を浮かべ始めた口ゼさん。

「・・・何故だろう、ものすごく嫌な予感がする。すると、いきなり天井から何かが降ってきた。」

それは、毒々しい色の腐った肉を纏い、ところどころ骨の見えた醜悪としかいい用の無い姿。それが四本の足でコンクリ風の大地を踏みしめて俺達を見据える。

「・・・そうか。『気配察知』は天井も有効なのかー」

どうも、天井をトカゲか何かよろしくココまで這ってきたらしい。お疲れ様です。

「ア、テンション・下・キレ不死龍・・・」

「・・・面倒なのが」

「しゃー!やるわよー!」

なんか一人だけテンションがおかしいけどいいだろう。今回はカイ並に優秀な人物がいる。

「よし、イース・・・タマとあの腐ったドラゴンを倒してください」

「・・・メンドイ」

イース様はテンションがダダ下がりのようだ。

タマも心なしか何で俺がこんな下等生物を的な目で見ている。

「お前のペットになる以外なら（ロゼが）お前の言うこと聞くから」

「・・・わかった！」

いきなり元気になった。

よし、後は頼んだぞロゼ。俺の代わりに散ってくれ。
後することは・・・。

「ミサ。俺達は安全なところにいよう」

「・・・すみません、あの、モンスターを倒したらどのくらいになりますかね？」

・・・何故だろう？答えようによってはココにも好戦的になりそうな人がいる気がする。

いや、ミサに限ってあんなゴリラ女みたいな思考は持っていないはずだ。

「確か、ソウル・オブ魔宝魂以外を全部売り払っても数百万ネルにはなった気がするけど・・・」

「殺やりましょう！」

「お前、バカ！？」

「後、百ネルもあれば私のお店が持てる！！そして素材の発注も余裕でできる！」

ダメだ、コイツも金の亡者だ……。でも、こいつらは知らないんだ。このモンスターがドンだけやばいのか。

「私の剣の錆になんなさい!!」

回復魔法の使える剣士。

「……タマ……!!」

DS女とその下僕^{スベト}。

「私のために倒れてください!」

駆け出しの金の亡者。

そして、俺というSPD極振りの盗賊^{シーフ}的職業な人。

「不死龍^{アンデットドラゴン}狩るようなPTじゃない……」

そう言いつつ、俺は不死龍^{アンデットドラゴン}の前に躍り出る。

すると、いきなり不死龍は大きく口を開けた。

「んなバカな!? まだそこまでのダメージはいつてないはずだ!」
「?」

「え? どういうこと!?!」

「咆哮^{プレス}だ!?!」

俺はそう叫んだと同時に、不死龍の射線上から離れた。
すると、毒々しい緑色の霧がものすごい勢いで吐き出される。
不死龍の咆哮スキル、猛毒の咆哮。ダメージがでかいうえに高確
率で毒状態になり、追加でダメージを受けるといふざけた技だ。
しかも、この技、一定時間フィールドに残り、そこへうつかり入
るとダメージを受ける。

「その霧に絶対触れるな！」

そういつと俺はまたも単身で不死龍の目の前に。そして前足で攻
撃をされそうになり、俺のスピードで不死龍を回り込むように移動
して攻撃を回避し、こちらが一撃を加える。すると、本当に数ミリ
ほどだけHPバーが減少した。

コイツの攻撃は前足、咆哮、尻尾のどれかだ。それさえ気をつけ
ていればなんとでもなる。

でも、問題がもう一つだけあるんだよな。ちらりと不死龍のHP
バーを見ると、そこにはHPバーが全快の不死龍。

「……やっぱ、回復するか……」

そう、コイツはなんと常時回復スキルを持っている。

確か、二十秒間に数パーセントだったはず。

でも、今回の俺達のPTにはコイツのダメージを削れるような人
がいない。

「……なあ、やっぱ逃げようよ？俺達じゃ無理」

「不可能を可能にするのが人間ってものなのよ……！」

「いや、でも現実では無理だから」

「……………タマだけじゃ、火力不足」

「お金、お金！」

ダメだ。現状でまともなヤツが不意だけどイスしかない。

そして、俺は不死龍アンデッド・ドラゴンから意識を外していたためにヤツの攻撃の夕イミングを見逃していた。

気付いたときにはヤツの尻尾が俺を捉えた。

そして、俺は盛大に吹き飛ばされた。

「ちょ！？……余所見なんかしてるから」

ロゼが呆れた声で言うが今の俺はそれどころじゃない。

おかしい。

何故か、体がものすごく痛い。

これは何回もいうがゲームだ。

もちろん、痛みといったものはほとんど無い。例え、ダメージを受けたとしてもそれはピリピリとした静電気の時のような痛みを感じるだけだ。だから、こんな風に体を真っ二つにされるような痛みはありえない。

「ま、まさか、バグモンスター？」

「ミッドさん？どうしたんですか？」

俺に気を取られて、ミサが振り向く。

そして、それを狙ったかのように不死龍アンデッド・ドラゴンの口が大きく開く。

「ダメだ、全員、逃げる！」

「は？」

俺は痛む体に鞭打って思い切り走ろうとする。

すると、いきなり俺の見る世界がスローになる。

それに構わず俺はゆっくりと動く世界を駆け抜け、目の前にある不死龍アンデット・ドラゴンの顎へとダガーの斬撃を放つ。

俺の攻撃により、攻撃準備を行っていた不死龍アンデット・ドラゴンのスキルはモーシヨンキャンセルされ、スキルは不発に終わる。

それと同時に俺の見る世界はごく普通のスピードを取り戻した。そして、俺を見て驚きの表情で見る三人。

「……ミッドさん、何をしたんですか？」

「Pスキル『獣アニマル・フォースの力』。たぶん、動物が元のキャラは最初から習得してるヤツだ。HPバー残量がレッドで発動する」

Pスキル『獣アニマル・フォースの力』。これはまあ、火事場の馬鹿力敵なスキル。HPバーがレッドに到達すると確率で発動し、数秒間能力が上昇する。

これには熟練度は無く、本当にたまにしか発動しない。今回はかなり運がよかった。

「とりあえず、全員逃げろ！状況が変わった！」

「ちょ、いきなりどうしたのよ？」

「アレはバグモンスターって俺達は呼んでる！よくわからないけど、アレはたぶんこのゲームのバグ塊なんだと思う！」

『バグ』。虫の意味を持つコンピュータのエラーの一種。

それは、このゲームにもあるようで、俺は不本意だけど、本当に不本意だけどアレの存在を認識している。

でも、『ガイディアン守護神』もそうだろう。

俺がバグモンスターといった瞬間、イスが驚きの表情を見せた。始終ポーカーフェイスの少女がそんな顔を見せるのは何だかほほえましい。・・・いや、今はそれどころじゃない。

「アレに出会うとかなりまずい。個体によって違うけど普通のモンスターより強いことが多いし、最悪で攻撃されたときに痛みを感じる」

「はあ？でも、これはゲームよ？」

「だからバグなんだよ。アレはこのゲームのエラーなんだ」

「で、でも、そういうのは運営が・・・」

「だから、俺達はココに囚われているんだ。GMコールを試したりもしたけど外界とのコンタクトは不可。そしてエラーのお知らせもできないどころか直してももらえない。でも、一つだけ運のいいことがある。・・・こいつらは、倒せる。だから・・・今から裏技を使う」

あんなのを放っておけば多くの人が被害を被る。

これはゲームなんだ。これを知らない人はそのまま楽しくプレイしていればいい。でも、コイツはそんな事お構い無しに破壊の限りを尽くすからな。ここで倒しておかないとゲームを楽しむなんてできなくなる。

「裏技？・・・アンタ、ハッキングでもするの？」

「違うよ。こいつ、物理攻撃は効きにくい。でも、クリティカルはその限りではないんだ」

「・・・でも、クリティカルは確立の話」

「いや、俺が狙うのはこいつの急所だ」

クリティカルヒット。

俗に言う致命的な一撃。このゲームでももちろんある。基本的にクリティカル発生率はステータスのDEXに依存される。

だが、それ以外にも強制的にクリティカルを発生させる方法がある。それが、モンスターそれぞれの急所、要するに弱点を攻撃することだ。

「でも、私はコイツの弱点なんか知らないわよ？」

「大丈夫だ。不本意だけど・・・本ツ当に不本意だけど俺が知ってる」

「・・・すみません、ミッドさんって何者ですか？」

「ただの猫妖精だよ」
ケットシー

そういうと、何故かミサが驚愕の表情を浮かべる。

・・・俺、何か変なコト言った？

まあ、いい。今はコイツを倒すことから始めよう。

そして、俺は走る。

勝負はすぐに決める。

誰よりも速く、どんなものよりも速く……。

俺は体制を低くして駆け抜け、コイツの弱点である尻尾の付け根ウイーク・ポイントに行き、ただ手に持ったダガーを振るう。

そして、俺はスキルを発動させた。

俺がスキルの構えを取ると、システムのアシストが働き、体が勝手に動く。

そして、目にも留まらぬ動きでダガーが四回振るわれる。

「な、なにそのスキル!？」

「は、速い……!」

「……それが、タマ二号の、力」

驚愕の表情を隠さない人たちに若干の優越感を感じつつ俺は答える。

「リスタ・ソニック。俺の、最強にして最速のスキル」

リスタ・ソニック。

これはチュートリアルで覚えることのできるスキル。

ただ、あまりにも威力が低いのですぐに熟練度を上げるのを諦めてしまうというスキル。

ただ、コイツは俺にしてみればものすごく強いスキルだ。

だって、本当に目にも留まらないスピードで己の武器を振るう技なんだから。たぶん、後の三人からしてみれば俺は何もしていないのに、いきなり不死龍アンデッド・ドラゴンのHPバーが大きく減ったようにしか見えなかっただろう。

そして、俺の攻撃で力尽きるようにして不死の龍はどごと倒れた。

「・・・はあ、久しぶりにスキルとか使った」

「久しぶりって・・・。まさか、アンタ・・・私を助けたときに使ったスキルって」

「・・・コストさせた、リスタ・ソニック？」

俺はなんか言ってる三人のところに戻る。

「リスタ・ソニックは熟練度八〇〇ぐらいでやっと性能に変化が出るんだ。で・・・」

俺が言葉を続けようとしたときだった。

後からいきなり何かの咆哮が聞こえた。

慌てて振り返ると、そこには倒したはずの不死龍^{アンデット・ドラゴン}。

しまった・・・。コイツ、低確率でHPバー十パーセントぐらい

で復活することがあるんだった・・・！それが、コイツが不死龍^{アンデット・ドラゴン}つ

て呼ばれている理由なのに！！

今から攻撃しようにも俺の体が思考に追いついていない。

やられる・・・！

俺は、思わず目を閉じた。

クエスト4・猫妖精の剣技（後書き）

用語集

地下ダンジョン・『ナゴヤ』の地下にあるダンジョン。中級プレイヤー向け

ソウル・オーブ 魔宝魂・モンスターが低確率でドロップするアイテム等の素材。モンスターの等級が上がる毎にドロップ率が減る。

アンデット・フェルムン 不死龍・ダンジョンのボスを任されることが多いモンスター。普通に強い。

Pスキル・バッシュ 常時発動型スキルのこと。熟練度を上げるのが面倒なうえ、ステータスポイントも入らない。しかし、極めたPスキルの恩恵はすさまじい。

バグモンスター・『GWO』内に存在するバグの一種？詳細は不明

クエスト5・踊り子襲来

Player・ミッド

俺達に向かつて咆哮プレスの構えを取る不死龍アンデット・ドラゴン。ダメだ。間に合わない。思考が体に追いついてない。

できれば、こんな思い他のヤツにはさせたくなかったのにな・・・。

「いつも言ってるじゃん。不死龍アンデット・ドラゴンはオーバーキルしたほうがいいって」

そんな言葉が聞こえたと同時に、いきなり不死龍アンデット・ドラゴンのHPバー残量が消失。すると、今度こそ倒れ、ドットへと変換されてそこから消えた。

代わりに別の人影があった。

その人はマントを被り、フードを目深に被っていた。そして、頭にとがったところがあり、おそらく猫妖精キャットシーであることがうかがい知れる。

「あ、貴方は・・・!」

「ん？・・・何？」

「・・・まさか、ミサが言ったのって!」

「・・・マジかよ」

「はい!あの時、助けてくれた人です!」

そういうと、マントの人物は何かを考える仕草をすると、ぼんと手を打つ。

「ああ、つい最近助けたPK集団に襲われかけてた子だ。・・・わざわざ探してくれてたの?悪いね」

「・・・以外にフレンドリーですね」

「まあ、そんなことはさておき・・・」

そういうと、マントの人は俺のほうを見る。

・・・やっぱりか。なら、することは決まっている。

「ダメだよ。逃げたら」

「いやあああああああ!?俺はまだ死にたくない!」

「大丈夫大丈夫。死んでもどうせ『ナゴヤ』で生き返るでしょ」

「許して!今回は口ゼに無理矢理連れ出されたんだ!」

「でも、今回はちゃんと連絡入れたよね?しかも三日前ぐらいに」

「アイツを怒らせるとものすごく怖いんだよ!? ホントに! だって、ポコポコにされても回復魔法で俺のHPバー回復してもっかいポコるんだよ!? もうイヤだ!」

あつげにとられている女子の方々には申し訳ないが俺は今、生命の危機に瀕している!

「……ミッドさん、知り合いだったんですか?」

「やっぱ、ミッド、その人……」

「そうだよ! だから助けて!」

俺が肯定した瞬間に、ロゼはダッシュで逃げ出した。
この野郎!? 俺をおいてくか!?

「イースちゃん! 逃がさないで!」

「!?!? わかった」

「イースさん!? お願い! 見逃して! ミッドあげるから!」

あの、クソ野郎! 俺をドンだけ売れば気がすむんだ!?

「……今回、それは難しい、かも?」

「あのお……どうなっているんですか?」

ただ一人、蚊帳の外状態なミサがつぶやくが誰も答えてくれなか

った。

突然だけど、このゲームにある特殊なシステムについて説明しよう。

このゲームには、ごく普通のスキルと、Pスキルがある。

Pスキルは確かに上げにくいのに、スキルの習得条件がめんどくさいが、これを簡単にする方法が一つだけある。

すなわち、『弟子入り』と呼ばれるもの。例えば、自分が覚えたスキルを知り合いが知っていて、かつ熟練度が70パーセント以上たまっていれば、そのスキルを一時的に『弟子』となることによつて覚えることができる。だが、もちろんそれだけだと師弟を解除すれば元通りになる。

そこで、スキルを教える側、つまり『師匠』と『弟子』で何回かクエストをこなすと覚えることができる。熟練度も師匠の熟練度の十数パーセント分を貰える。それに、『師匠』になつた側もスキル熟練度の上昇率が上がるため、結構いいシステムだと思っている。

でも、『師弟を組む』ということはお互いの手の内を明かしあうのと同じなため、実際問題としてこのシステムを使う人はあまりいないというのが現状。

「この人が、ミッドさんの『師匠』!？」

「・・・はい。本当に、不本意ですが」

「さて、次はどこに行こうか?・・・うん、アンデット・トラコン不死龍がたくさん出てくるところにしよう」

「すみません！本当に勘弁してください！」

そういうこと。何の因果か、俺はこの人の『弟子』だ。

「で、いい加減にマント外したほうがいいのでは？」

「ああ、そうだね」

そういうと、マントを何のためらいもなくひょいと外す。
そこには、猫の耳をつけた人間。

「……やっぱり、貴女」

「……あれ？猫妖精キャットシーじゃない？」

「違う違う。これは変装用のネコミミのアクセサリの装飾品。一応『守護神』
なもんだし、PKの方々に目をつけられると面倒だなーって思って」

「『ガーディアン守護神』、ですか？」

「ああ。この人は『スピカ』。……可愛い名前に反してやること
となすこと極悪だ」

「さて、せっかく愛しのミッド君に会いに来たのにな」

「黙れ、変態女」

「……女？」

「ん？そつだけど？」

「……すみません、一人称は？」

「『俺』」

「……」

「……そついうこと。俺もまさかと思って今日聞こうと思ってたんだけどな」

「……ええ〜」

「ですよ〜。」

いくらなんでもって思いますよ〜。

それに、これじゃどんなに探しても見つからないわけだよ。

コイツは俺の『師匠』の『スピカ』。

なんと、コイツも『守護神』の一人。

二つ名は『八足の駿馬』。あまりにも速過ぎるためについた。

まあ、名前からわかるとおり北欧神話領の『守護神』だ。

だから、『神の鎖』のイースとは顔見知りのはずだ。しかも、こ

っちの方が一応は先輩だし。

「というわけでイースちゃんもお久さ〜」

「……久しぶりです。……タマ二号は、先輩の『弟子』だったんですね。……どおりで」

「ん？タマ二号？」

俺は師匠にコイツからストーカー被害を受けていることをすぐに報告。

「というわけで何とかしてください」

「わかったよ。．．．イスちゃん、ミッド君が欲しければこの俺の屍を越えて行け！！愛する弟子をどこの馬の骨とも知れない泥棒猫、じゃなくて犬にやれるか！」

「違う！？そういうつもりで言ったわけじゃない！？しかも知り合いだし！？」

「．．．つぶ。わかった。．．．いつか、先輩とは、決着をつけたいと思っていましたから。．．．でも、勝ったら．．．タマ二号は貰う．．．！」

「ふん！それは勝ってから言うがよい！！」

そういうと、何故かワケのわからないバトルが発生した。

師匠が素早くメニューを開いてイスに決闘（PVP）の申し込みをすると、イスは迷わずOKする。そして、なんかやり始めたいや、端から見てても普通にハイレベルな戦いんだけど、理由がねえ．．．。

「．．．ねえ、何でこうなったわけ？」

「．．．さあ？」

「あ、あのお．．．私、スピカさんにお礼を言いたいですけど．．．」

「遅い！そんなのじゃ、ミッド君をお嫁にあげられないね！」

「……でも、一撃はこっちが強い」

いや、嫁じゃないし。

しかも、本人の了承無しに景品にするな。

「……帰るか」

「……そうね」

「え？でも、お二人だけ……」

「大丈夫、殺しても死なない人達だから」

そういうと、決闘を始めた二人を残して俺達は『ナゴヤ』に帰った。

何だかものすごく疲れた気がする。

（翌日）

「それは……、災難だったな」

「ホントに。もう、カオスとしか言いようがなかった」

いつもの広場のベンチで俺とカイが話してた。

ロゼは魔宝魂^{ソウル・オーブ}忘れた!?!とか言っただけでもモンスターの情報を探
しに行ってるらしい。・・・次回は連れて行かされないようにしよ
う。ものすごく面倒だ。

「でも、俺もひよつとしたらって思ったけどさ・・・まさか、な」

「俺もビックリだよ。・・・まあ、師匠は普段バグモンスターを狩
ってるからな」

俺の師匠であるスピカは北欧神話領における遊撃兵みたいなもの
だと聞いた気がする。

そして、師匠は自由気ままにいろいろな神話領に行っただけで適当に
ダンジョンをソロで制覇し、困っている人がいれば助けるという完
壁な『正義の味方』だ。

まあ、周りから偽善者だとか言われていたりもするけど、俺は別
に師匠がそうだとは思わない。だって、人を助けて見返りとか一回
も求めないし、困ってそうだと思えばすぐに走って現場に急行。

下手な『^{ガーディアン}守護神』の人よりも守護神らしいと思う。

「そっか。ミッド君は俺に惚れちゃったか」

「何でも簡単に空気をぶっ壊しますかね、師匠?」

しかも、惚れたとか一言も言っていない。

「もう!二人のときは『スピカたん』って呼んでって言うてるで
しょ」

俺は一度もそんな特殊なルールを聞いたことは無い。

つか、聞いても無視する。

「……スピカさん、俺もいますか？」

「ん？おお？……そうだ！カイ君じゃあないか！」

「……師匠、忘れてましたね？」

「大きくなつたね」

「いやいや、ゲームなんですから、大きくなるわけないでしょ？」

「前まではこんなだったのにね」

そういうと師匠は自分の腰あたりで手を持っていく。

いや、アンタ、それほど昔からカイと知り合いだったの？

「いや、普通にゲームで初めてですよね？」

「ノリが悪いなあ……」

アンタについていける人は絶対にいない。

「で、何で師匠が？」

「もちろん、なんか変なモンスターがいるって噂聞いたからだけ
どっ？」

やっぱりか、と俺は思った。

突然だけど説明タイム！

実は、このゲームではネームカラーによってどこの神話領に所属

しているのかがわかる。

例えば、俺の師匠は北欧神話領に所属していて、ネームカラーは緑だ。これは、領地争奪戦の時に仲間を誤って攻撃しないようにするための措置らしい。ちなみに、色分けはこんな感じ。

北欧神話・・・緑

ケルト神話・・・茶

ギリシャ神話・・・白

エジプト神話・・・黄

日本神話・・・青

封神演技・・・オレンジ

無所属・・・灰

さらに、犯罪者プレイヤーやモンスターは赤色だ。

そして、ゲームの目的は領地の争奪戦。それゆえにか領地同士の干渉はあまり好まれない。だから、暗黙の了解であり他領地には極力入らないようにしている。無所属領は例外だけど。まあ、ダンジョンであつたら挨拶ぐらいはするよ？マナーだし。

でも、師匠は北欧神話領の人間でありながらもいろいろな領地に行ってる。理由は簡単。俺達が出遭ってしまったバグ・モンスター。そいつの駆除を率先してやっているからだ。

今回も、無所属領にあのバグ・モンスターがいたから俺と一緒に駆除しようとも思っただらう。まあ、運悪くあんなつたわけだけだ。

「やっぱりですか」

カイは一応俺と師匠の事情を知っているからか、顔を曇らせる。

「大丈夫大丈夫。今回はどうも痛みのバグだけみたいだったから」

そう、あつげらんかんとて言う。だけど、この人はもっとやばい
のと戦ったことがあるらしいな……。

俺達が暗い顔をしていると師匠は明るい声を出す。

「もう！こんな俺みたいな美少女がいるんだからさあ〜。もっと、
元気出していこうぜ！」

「……まあ、やたらと男らしい気もしますけど」

「何を言うか。……それで、本題だけどいい？」

「……」

俺とカイは半ば予想していた。

つか、そうじゃなかったら普通にどっかで待ち合わせて会おうな
んて言わない。

だって、この人は確かに俺の師匠だけど、それ以前に北欧神話領
の『ガーディアン守護神』のメンバーの一人だ。

「まあ、予想しているとは思うけど、こっちに来ない？」

どこに？とは聞かない。いや、わかってるからな。

こっちとは、北欧神話領のこと。そして、俺の『ガーディアン守護神』のメン
バー入り。

「正直な話、俺はあまり……。まあ、どうしてもと言うのなら
……」

「そっか。いいよいいよ。だって、ココにはカイ君もロゼちゃん

もいるしね。・・・確かに、『ガーディアン守護神』になっちゃったら北海道に引きこもらないといけなくなるしね」

師匠は笑いながら冗談めかして言う。

確かに、それもある。だが、それ以上に・・・。

「だって、俺は『音速の剣士』ですよ？たぶん、このゲームで最弱と言われる攻略組のプレイヤー。そんなのが『ガーディアン守護神』入りしたら全プレイヤーから袋にされますって」

「ミッド、俺達はお前が言うほど弱くないことは知ってるぞ？」

カイがそういう。

何を言いますか。自身がかなりのハイレベルプレイヤーの癖に。

「俺にできるのは走ることと、リスタ・ソニック それだけ」

「・・・はあ、わかったよ。でも、俺は別にお前が行ったからって疎遠になつたりしないぞ？」

「・・・いや、ロゼが怖い」

「・・・がんばれ」

励まされた。

何故か励まされた。

「ほいほい。男の子のあつーい友情はわかった。でも、こっちも準備はできてるからね」

そういつと、師匠は一つの指輪を取り出す。
それは、俺が見たことのある装飾品アクセサリで……。

「いつでも、この『かそくそーち』は渡せるよ」

「そうそう、『かそくそーち』……って、違うわ！何勝手にリネームしてるの!?!」

「……うわあ。レア装備が見る影もない」

「そう？カツコイイと思うのに……」

いや、『かそくそーち』とか最早ネタでしかない。

ネタであるのかどうかも怪しい。というか、どんな悪ふざけだ。

「ま、気が変わったらメールでも送って」

「はいはい。俺も変なモンスターの噂聞いたらこっちは何とか対処しておきますから」

そういつと、師匠は歩いていった。

広場に残ったのは俺とカイ。

しゃべる言葉が見つからず、沈黙が支配する。

時間の関係上、今はほとんどの人がダンジョンに向かっているからな。

「なあ、別に俺達のことなら気にしなくてもいいんだぞ？」

「いや、俺が『守護神ガーディアン』？ありえないって。ただ、それだけだよ。それに、俺は臆病な剣士様だからな」

そういつと、俺も自分の棲家になっている宿屋に向かって歩いて
った。

クエスト5・踊り子襲来（後書き）

用語集

グレイブニル 神の鎖・北欧神話に登場する神器の一種。フェンリル 魔氷狼を繋ぎとめた。

スレイブニル 八足の駿馬・北欧神話に出てくる架空の獣。八本足の馬のような生物。超速い。

師弟・Pスキルを教えあう、あるいは極めるのを助けるシステム。あまり利用する人はいない。

クエスト6・破壊僧の迷宮攻略

「はあ！」

無所属領のとある森。そこには数人のプレイヤーがいた。

目の前にはモンスター。見た目は人間のようだが、高度なAIが組み立ており、まるでプレイヤーと戦っているのかと錯覚してしまう。

ただ、問題があるとすれば……。

「何で、こんなトコにこんなやつがいるんだよ！」

「知るか！むしろこつちが教えて欲しいわ！」

「け、喧嘩はよくない……」

「そうですね！今は目の前のヤツに！」

モンスターを睨むようにしてみる。すると、そのモンスターのうえに名前が出てくる。

『夜叉』。俗に言う悪鬼のことだ。このモンスターは無所属領にしか出てこないモンスターだ。というかボス級のモンスター。普通はこんな森の隅っこではなく、ダンジョンの最奥にてふんぞり返っているモンスターである。

「誰かが連れてきたのか？」

「いや、そもそも、この森に出るって聞いたことが無い」

「つて、ほ、本当にまずいよ!?HPがもうない!」

「マジかよ。さっきゲットしたアイテムとかどうなるの・・・?」

「・・・やり直したろうな」

「死ぬ気で倒す!!」

その言葉で一部がやる気を取り戻す。

ただ、相手は高レベルダンジョンのボス。こっちはいいところ、中堅のプレイヤー。勝てるわけが無い。

「ちっ!とにかく!スキを見て逃げるぞ!」

そして、それは以外にも早くやってきた。

相手が何かの構えを取る。つまり、スキルの発動。

すぐに戦士系のプレイヤー二人が『夜叉』に攻撃を行う。すると、

スキルのモーションがキャンセルされ、スキルは不発に終わる。

そうして、ほんの少しだけ硬直する。

「いまだ!逃げるぞ!」

その言葉に、全員が従った。

「・・・ただ、一人を除いて。」

「おい!何してんだよ!」

「いや、むしろ一気に倒そうぜ!そうすればコイツのドロップアイテムでがっばり稼げるかもよ!」

そういつと、そのプレイヤーははまだ硬直状態から抜け出ていない『夜叉』に突撃していく。

「無理だ！バカ！」

「もういいじゃん、あんなやつ。・・・ほっとこうぜ」

その言葉にそうだそうだと声上がり、結局全員がそのプレイヤーを見捨てて行った。

「・・・ハッ！俺が、コイツをぶっ飛ばしてあいつらを見返してやる！」

そのプレイヤーは一人、『夜叉』に攻撃していく。

だが既に硬直は解けていたのか、『夜叉』はプレイヤーに怒涛の攻撃を仕掛ける。

そして、プレイヤーのHPバーはどんどん減っていった。

「つく！」

こんなはずじゃなかった。自分は、現実ではただの冴えないごく普通の少年。だが、ゲームでなら誰にも負けれないと言う自信があった。それゆえに、VRゲームも自分ならすぐに頂点に立てると確信していた。

だが、現実はそんなに甘くなかった。

この世界ではコントローラはない。自分そのものがコントローラーと言い換えてもいい。それゆえに、そんなに運動の得意ではなかったそのプレイヤーではただの一プレイヤーでしかなかった。

周りの人間が自分を見下しているように見えてしょうがない。・・・だから、コイツをぶっ飛ばして見返す。

だが、現実は厳しい。硬直が解けたモンスターはすぐにプレイヤーを倒さんと怒涛の攻撃を始め、HPバーが見る見るうちに削られていく。

既に、逃げる逃げないと言う状況は過ぎてしまった。逃げられない。

そして、それは偶然だった。相手の攻撃に焦りを覚え、がむしやりに剣を振るう。すると、相手の動きも止まった。

状況が理解できず、自分の剣を見てみると、そこには相手の胸の辺りを貫く自分の剣があった。これが示すことはただ一つ。

「や、やった。勝った・・・勝ったぞ！」

クリティカル・ヒット
致命的な一撃。今回はそれが発生し、偶然勝てたらしい。

だが、モンスターのHPがゼロにも関わらず、何故かモンスターがドットとなって消えない。どういうことかと疑問に思いつつモンスターをよく見ようとすると、すると、いきなりモンスターの原型が崩れ液状化する。そして、その液体がまるで生きているかのようにプレイヤーに襲い掛かった。

突然のことに反応ができない。思わず、目をぎゅつと閉じる。・・・だが、何も起きない。代わりに、聞きなれたシステム音が響く。

恐る恐る目を開けると、さっきの場所だ。ただ、目の前に「Go t a n e w s k i l l e r」と言う文字が表示されていた。

つまり、新スキルの習得。すぐにメニューを開き、スキルのタブをクリックすると、そこには横に「new」とかかれたスキルがある。

Pスキル『阿修羅』。効果はどうもステータスにいくらか補正がつけられし。

とりあえず、ジャンプしてみる。すると、軽くジャンプしただけで森の木々より上に出た。一瞬、何が起きたかわからず、困惑する。

そして、重力にしたがつて落ちる。無様に地面にしりから落ちるが、今のこのプレイヤーにそんな些細なことはどうでもよかった。

「……は、ははっ、はははははー！」

力が手に入った。

これで、誰にも見下させない。

俺が最強になる。俺が……。

静かな森に、一人の哄笑が響いた。

Player・ミッド

「……で、何か用？」

「決まってるでしょ。さっさと行くわよ」

「行ってらっしゃい」

「アンタも来るのよー！」

いつもの如く俺はロゼにどっかに引つ張られていかれそうになっている。

いや、だがココでまけたらダメだ。人生諦めなければなんともなる！

「いやだ！俺は今日は裁縫スキルを磨くって決めてたんだ！」

「そんな女々しいことしてないでさっさと来るー！」

「・・・いつも、こんななんですか？」

「まあ、大体？・・・ミッド、そろそろ諦める最終的にはお前が折れるんだし」

癪だけど、その可能性がかなり高い。

最終的にはSTRに物を言わせて俺を引っ張ってくに決まってる。俺はため息をつく。今日は面倒なことじゃなかったらいいなと思いつつロゼの頼みを断る。

「しょうがないわね。イスさんに突き出すわよ？」

「さあ！今日も元気に行こう！」

「最初からそうしてるよ」

「イスさんって・・・」

ああ。今日も空が青いですね・・・。

「で、今回はどこにいくんだ？」

「しょうがないから、倒せるボスモンスターにしとくわ」

「いや、それが普通だから」

「……い、一体、何を狩ろうとしていたんですか？」

「ん〜……『イザナミ』とか『クロノス』とか『ファフニール』にしようかなって？」

「全部、^{ゴッド・クラス}神級じゃねえか!？」

モンスターにはいろいろと等級がある。

その中でも、最上級に位置するモンスター達をこのゲームでは『^{ゴッド・クラス}神級』と呼んでいる。

というか、『イザナミ』、『クロノス』については実際に神様だ。

『イザナミ』は日本神話に出てくる『イザナギ』の嫁さんで、『クロノス』はギリシヤ神話の『ゼウス』達の親父的な存在だ。

もちろん、これは『^{ガーディアン}守護神』の神の名前を二つ名に持っているやつ等が複数人でパーティを組んで行くレベルのものだ。

まあ、今までに出会った『^{ガーディアン}守護神』がふざけすぎて、実感があまりないかもしれないけど。

「だって、今回は頼りになるカイがいるから大丈夫かなあ……
って」

「俺でも無理だよ!？」

「ええ〜……」

何故かジト目でカイを見るロゼ。

「……いや、お前も一人で^{アンデッド・ドラゴン}不死龍を倒すとか無理だろ?それと同じだよ。」

「ミッドもスキルを使わせたらそれなりに強いから大丈夫かなって思ったんだけど・・・」

「無理。俺は基本的にスキル使いたくねえ」

「・・・何で？」

「別にいいじゃん。気分の問題だし、それにコストさせたって言っても、リスタ・ソニックはそんなに強いスキルじゃないし」

「それで強くないって・・・。ミッドさん、実はそれなりに強いのに・・・」

なんだろうっ？

ミサの眩きが俺の心にグサグサ刺さる気がする。

「・・・でも、気になることがあるのよね」

「気になること？・・・ミッドのことですか？」

「うん。・・・アンタ、それで本当に全部？」

「・・・いきなり、コイツは何を言い出すんだ？」

「ロゼさん、それってどういふことですか？」

「だって・・・うん・・・」

「何だ、はつきりしないなあ？」

「どう言葉にすればいいのかわからないのよ。あえて言うなら・・・女の勘？」

「・・・そんな、女子しか持ち得ない特殊スキルを持ち出してきても・・・。」

「まあ、なんにしてもあれが今の俺に出せる全力だった」

「今の、なあ・・・」

何故かカイがニヤニヤと俺に気色の悪い笑みを向けてくる。

「・・・ダガーで三枚におろしてやろうか？」

「つと、着いたわよ」

着いたところは前回とは違い、薄暗い洞窟の前。

ココは、ナゴヤのすぐ近くにあるダンジョンだ。

確か、『暗闇の洞窟』とかそんな感じの名前のところ。でも、何でここに？ココは初心者用ダンジョンだぞ？

「・・・一気にグレードがダウンしたな」

「お前等、前はどこに行ってたんだ？」

「『地下鉄ダンジョン』だけど？」

「・・・おい、初心者連れてどこに行ってたんだよ」

「はい？」

「いや、うつかりしてたんだって」

実は、あの『地下鉄ダンジョン』は中級でも結構苦戦するダンジョンだったりする。理由としてはあそこは幽霊ゴーストや邪精霊カース・エレメントと言った物理攻撃の効きにくいモンスター。そして、複雑な迷路。よくあるのがMPが尽きて帰ろうと思ったら道に迷って死ぬっていうパターン。こっちから何もしなきゃあっちは攻撃してこないんだけど、攻撃した瞬間に周囲のモンスターはこっちに一齐攻撃を仕掛けてくる。まあ、前はイースがタマを使って蹴散らしてくれていたのかまったく来なかつたけどな。

「で、何でロゼはココに？ココって初心者用ダンジョンだろ？ミサのためか？・・・でも、それだとお前の剣の素材でいいのが手に入らないんじゃないのか？」

「え？違うわよ。つい最近、ココで奥に続く道が見つかったんだって。ひよっとしたら、レアなモンスターがまだいるかもしれないでしょ？」

・・・なんとというか、不吉だ。

要するに、隠しダンジョンかなんかだろ？そういう所の敵って、かなり強くな？

「・・・なあ、カイ。隠しダンジョンってどのくらい強い？」

「・・・いや、俺も初めてだからわからない」

「じゃさ、ここ以外に聞いたことは？」

「微塵も」

なるほど、未知の空間に突撃するわけか。

しかも、おそらくはココがつい最近になってやっと見つかった隠しダンジョン。

………初心者ダンジョンの隠しだから大丈夫だよな？

「いやあああああああ！？」

「死ぬ！死ぬ！無理！」

「た、助けてください！」

今、オレ達の目の前を涙目になりながらプレイヤーが爆走していった。

「……なあ、ロゼ。考え直さない？」

「アンタ、バカ？敵が強い！まだレアアイテムが！……と言っただけで行くわよ！」

そういうと、ロゼは少しずつ前に進んでいく。

さっきのロゼの話だと、ダンジョンの奥にあるっばいから二つら辺の敵は大丈夫だろうけど……。

「ココよ」

「近づ！入り口に近づ！」

入って三秒。入り口近くのいかにもな彫像の前。

いや、たしかにこんなところに不自然に一個しかないから何かあるんじゃないかといわれていたけど……。

「でも、コレ何しても意味がなかったんだよな？」

それこそ、殴る蹴るの暴行紛いのことから。お供え物的な感じにモンスター素材を置いていたり、回復アイテムを置いていたり、変化が無いかココで張り込んだり。

で、結局何もなかったって話だったはずなんだけど……？

「ええ。でも、今は関係ないわ……ミッド、こっちに来なさい」

ちよいちよいとロゼが俺を手招きする。

なんだろうと思いつつも俺はロゼの近くに。

すると、ロゼは俺の右手を両手で包み込むようにして握る。

何故か、ミサがきゃつと可愛らしい悲鳴をあげ、そしてロゼは……。

「どうおりゃあああああああああ！！」

「ごはあ！？」

あまりに女子らしくない雄叫びを上げ、ハンマー投げよろしく、俺を思い切り彫像に向かってぶん投げる。

ものすごい音がしたかと思うと、俺が何かを突き抜ける感覚。

ああ、なるほど。コレが、自分の魂の抜ける感覚か。短い人生……今や猫生となってしまうたが、悔いは……あるけど、まあいいか。

「み、ミッドさん!？」

「……」

「コレでおっけー。……さっさと起きろ、ダメネコ」

「誰がダメネコだ!つか、何、人でハンマー投げしちゃってくてんの!?マジで、ガチで死んだと思ったよ!？」

つか、ミサとカイがドン引きしてるぞ!？」

「大丈夫よ。コレはゲームだから死なないから」

「うわあ、お前、ココから出たらまず最初にお前相手に裁判起こしてやる!」

「面白いわね。逆 裁判のネットゲがあるの?」

「違い!暴行罪で訴えるんだよ!？」

「だから、ゲームでしょ?」

「よし、まずはゲームから離れような、そのゲーム脳じゃ難しいかもしれないけどな!」

「……つか、マジでこんなところに隠しダンジョンがあったんだな」

そう言われて俺は周りを見る。

そこは、ついさっきまでとは違い、石造りの壁に床、天井。まる

で、古代遺跡の中にいるみたいだ。
ついさっきまでのただの洞窟とは大違い。

「……あれ？俺達、何でいつの間にこんなダンジョンに？」

「ん」

カイが指をさす。

その方向を見ると、そこには土の壁。つか、ものすごく見覚えがある。

「……まさか、あれが洞窟のダンジョン？」

「ああ。で、ロゼがお前をハンマー代わりに彫像をぶち壊して」
「コへの道造ったんだ」

なるほど。あの彫像は一定以上の攻撃力があれば破壊できる、破壊可能オブジェクトだったわけか。で、俺はあの彫像を壊すためのハンマー代わりにされたと。

……納得できるか！

俺はあたりをキョロキョロと見渡すロゼに詰め寄る。

「何で俺がハンマー代わりにされなきゃダメなんだよ！」

「……ああ、だって、あそこは打撃系攻撃じゃないとダメみたいなのよ」

「じゃ、殴ればいいじゃん!？」

「だって、拳が痛くなるじゃない」

「だからって、俺にダメージを与えるな！」

鬼だった。

いや、なんか極悪非道な生物的な何かだな、コイツは。

「まあ、さっさと行って、アイテム採るわよー！」

やたらと元気なロゼが先頭を歩き出し、俺達のダンジョン攻略の幕が開けた。

クエスト7・猫妖精達の迷宮脱出？

Player ミッド

「っ！・・・さすがに、強いぞ！」

「HPは大丈夫！？やばかったらすぐに言って！」

「ロゼ！俺のHPが結構やばい！」

「ミッドは野垂れ死ね」

「何で！？」

「いやあー！？来ないでー！？」

・・・まあ、こんな感じで俺達はダンジョンの攻略に明け暮れていた。

『暗闇の洞窟』のEXダンジョン『常闇の聖殿』。

俺達が石像のところから歩いてすぐのところになんな看板があった。

なんか、名前からしてやばそうなダンジョンだ。

このゲームで『神聖』や『常闇』なんて、確実にやばいと言う俺の経験談。少なくとも、俺やロゼの中堅が数人で来るような所じゃない。絶対に十人はいないとダメだ。

たぶん、カイみたいなレベルのヤツじゃないと十人以下なんて無理だろうと思う。今も四方八方から動く石像が俺達に襲い掛かる。

そして、件のカイさんの方かというと、一人で二人以上の働きを見せている。

「さすがはカイだな」

「まあ、なつと!」

カイは俺に軽く返しながらも、四方から迫ってくる敵を俺達に寄せ付けない。

「カ、カイさん、すごいですね。それに、装備も、ものすごくレアそうです」

「まあ、確かにアレはかなりのヤツだからな」

カイの武器を一目でレアだと看破したミサに感心しながらもカイを見る。

ちなみに、当のカイさんというと、戦線の一番前で身の丈ほどもある三叉矛トライデントを操っている。

カイの持つそれは、海を思わせるような波打つ装飾が施されており、一目で希少レア以上の装備であることが伺える。

まあ、それだけカイが高レベルのプレイヤーだってコトだけだな。

「でも、ロゼの装備もかなりいいやつだぞ?」

「・・・じゃあ、何で急に剣を?」

「・・・さあ?」

実はロゼのヤツは、元々どこかのギルドに所属していたらしい。アイツ自身が日本神話領の出身プレイヤーらしい。

日本神話領の特徴としては、神様がかなり多いこと。

つまり、紙級ユッド・クラスの武器がわんさかあるらしく、『守護神ガーディアン』も日本神

話領が最大を誇っているらしい。

ただ、種族が人間しかないらしく、能力値が平均化してしまつて器用貧乏感が否めないらしい。ただ、レア武器は相当に強い。簡単に言つと、日本神話領は武器に頼つたプレイをしている。

まあ、それをごく普通の何の効果も無い武器でやるってどうだと俺は思う。

……普通に、ドンだけ強いんだよと思う。

まあ、それだけ多くのスキルを持っているんだろう。……少なくとも俺以上には。

「つか、どこまで続くんだろうな、これは」

「……確かに、長い」

既に、攻略を開始してからどれくらいの時間がたったんだろう……。

いや、実際にはメニューを開けば時間はすぐにわかる。

ただ、周りが暗く、いつまでも同じような石壁の遺跡風な景色が続き、自分の中の時間がどんどん狂わされていくような感じがする。

「おし、一旦休憩しよう」

一番こうゆうダンジョンにベテランであろうカイが休憩を申し出る。

このゲームでは、座っていたり、攻撃行動等を何もしていないとき、HPとMPが自然回復する仕様になっている。

だから、休憩は重要な要素の一つでもある。つまり魔法スキルを多用するカイにロゼは俺とミサよりも重要になってくるはず。

「え〜。私はまだまだいけるわよ?」

ただ、根っからのゲーム脳なロゼは強行を提案。

・・・お前のMP、大丈夫か？結構な頻度で回復に攻撃系魔法使ってたぞ？

ちなみに、剣技スキルはMPを使用しない代わりに、必中じゃないし、スキルによっては硬直時間もある。それに、魔法と比べれば威力ははるかに低い。

「カイが言うんだぞ？ココは休憩にしろの方がいいんじゃない？それに、俺も少し疲れてきた」

「死に物狂いで働け。一日三十時間ぐらい」

ロゼに労働基準法を無視した労働を命ぜられた。

しかも、どうやっても一日じゃ足りない。と言うか、俺に過労死しろと？

「あ、あの、すみません。でも、私も自分のレベルに似合わないダンジョンに来てしまって、HPやMPが大変なことになって・・・」

「え？本当に？それなら早く言ってよ。じゃ、休憩しましょ」

ミサの鶴の一声で休憩になった。

・・・俺、納得できないんですけど？

「おい、何で俺は遠まわしの死刑宣告なんだよ」

「だって、ミッドはいなくても一緒だし」

なら、呼ぶなよ!？」

「にしても、本当に長いな」

カイはこの先も続く、暗い遺跡風のダンジョンの奥を見ていう。
俺もカイに釣られてこの先のダンジョンを見てみる。

そこには、薄暗く、先が見通せない通路があった。

そして、俺は何気なく『気配察知』のレーダーみたいなウィンドウを見ると……。

「……おい、何でここにいる?」

「ん?どうした、ミッド?」

「……いきなり何?私達の目的を忘れたの?」

「違う!何で、あの、ストーカーが、ここに、いるんだよ!?!」

俺は怒りのあまり、振り向きざまに投擲ナイフをこの先の通路に投げる。

すると、キンと言う軽い金属質な音が響く。

カイはすぐに立ち上がっていつでも戦えるように三叉矛トライデントを構える。

ロゼとミサはさっきから困惑した表情を浮かべるだけだ。

「誰だ。そこにいるのは……!」

「カイ、お前の必殺技であの変態女を葬れ」

「・・・変態じゃ、ない」

通路の先から出てきたのは『グレイブニル神の鎖』こと、北欧神話領『ガーディアン守護神』所属のイースと、そのペットの『フェンリル魔氷狼』のタマ。

「・・・なんだ、イースさんか」

そういうと、カイは構えたトライデント三叉矛を仕舞ってしまふ。

「カイ、今すぐヤツを屠ろう。そうすれば、世界がものすごく平和になる。特に俺の」

切実にそう思う。

「・・・何で、そんなに私のことを嫌うの？」

「・・・ファーストコンタクトが最悪だったから？」

俺は正直な気持ちをとりあえず伝えておく。

「いったい、轆かれてどういう風に好感情を持ってと？残念なことに俺はそんなに特殊な性癖は持っていない。」

「・・・そんな・・・。たくさんの方は、『イース様に踏んでもらえるのなら・・・！』って言って私の隊に入ってくれるのに・・・。」

「おい、何変な宗教団体作ろうとしてるんだ!？」

「どうも、『^{ガーディアン}守護神』は変態が多いらしい。と言っか、このゲームの治安をそんなやつ等に任せてもいいのだからっか？」

「……こんなに、想っているのに……」

「話脈絡が無い。それに、変態は、い・や・だ！」

「……そんな……」

何故か、イースが酷く傷ついた顔をする。

「……おい、お前等、何その、『お前、女の子いじめるとかサイテー』みたいな目で。」

「コイツの本性はな……」

「……ただ、調教したいだけなのに……」

「だからイヤなんだよ!？」

「こんなにも、残念なんだぞ!？」

「ものすごく切なそうな声で言われても困る。」

「しかも、完全に空気がメロドラマそりいっな感じだ。たぶん、セリフさえ違っていたらいろいろと違ったと思う。」

「俺の価値観とか、世界観とか、人生観が。」

「でも、何でイースさんがここにいますか?何かあつ……」

「若干目上の人(?)と言っわけでか、ロゼの口調がかしこまったものになる。」

「そこをイースはロゼの言葉を手で制すると、ロゼの前に行き、向

かい合う。

「……イスでいい。……別に、『ガーディアン守護神』だからって、敬語じゃなくてもいい」

「あ、はい……じゃなくて、わかったわ」

そこで、今度は視線をミサに向ける。

「……アナタも」

「え？私、ですか？……でも、私はコレが普通なので……」

「……わかった」

そういうと、イスは俺達に背を向け、ダンジョンの奥に進もうとする。

「まあ、ちょっと待てよ」

俺はさりげなく逃げようとしたイスの肩をがしつと掴む。

「……いやん。……初体験は、ベッドで……」

「いきなり下ネタいれるな！で、何でお前がここにいるんだよ！俺のストーリーキングでもしてんのか！？」

本当に、コイツは何がしたいのかわからない。

無表情で危険な単語を連発しやがって……！

「……………」
「……残念だ
けど、今回は違う」

「何で間が長い！？それに残念じゃない!？」

「じゃ、イースは何しに来た？まさか、ここのレアアイテムか、
ユニークモンスターを捕獲タイムでもしに来たのか？」

「ダメよ!？いくらイースでも、それはダメ！ココのレアアイテム
ムは私がゲットして、剣造るんだから！」

カイの推測を真に受けたロゼがまくし立てるように言うが、イ
ースはいつものように無表情で答える。

「……………違う。今回は別の目的」

「別の目的、ですか？」

イースはうなずくと状況を説明する。

「……………今、このダンジョンにはとある集団がいる」

「とある集団？PK達か？」

「でも、何でPKがこんなところに？それに、ここってもうクリ
アされてたの……………!？」

ロゼが何故か地面に両手両膝をついて、ものすごく落胆している。
『オー、アール、ゼット……………』とか言ってるのは無視しよう。

「……先輩のことです」

「お前もな！」

ダメだこいつ等、何とかしないと。

……いや、既に末期だから手の施しようが無いか。

「って、スピカさん。その、テロ組織がどうとかって？」

そう、俺が聞きたかったのはそれだ。

だって、この人達ふざけまくって話しになんないし！

いつものように全身を覆うマントに身を包んだ師匠をどうにかして引き離し、話を聞けるようにする。

「せっかく、ミッド君成分的なものを補充しようと思ったのに……まあ、いいや。俺が『戦争と死の神』オーティンから聞いた話だと、どうも『世界樹の守護栗鼠霊』ラタトスクのやつ等が報告しにきたんらしいんだけど、つい最近ココで一人のやたらと強いプレイヤーが出てきて、そいつがある組織を立てようとしているらしい」

『戦争と死の神』オーティン。北欧神話領、最強にして最高責任者。神器『ケンゲニル神の投槍』を所持するヤツだ。コレがまたえげつないぐらいに強い。『世界樹の守護栗鼠霊』ラタトスク。そのまんまの意味だ。世界樹に宿るとコケトランルされているリスで、守護霊的な存在らしい。だが、このゲームにおいてのこいつ等の存在は全然違う。いや、ある一点においてはその通りなんだけど……。

諜報活動を主にした、いろいろと後ろ暗い集団だ。だが、ここにはいるヤツは相当な、それこそ神をも殺せるレベルなまでに強い。

「あ、あの、さっきからミッドさんは何の話を？」

「・・・いや、私もついて行けない」

「まあ、だろうな。俺でさえもほんの少ししかわからないからな。ちなみにわかったのはスピカさんは相変わらずだなんてトコ」

後の三人は放っておこう。説明するのが面倒だし。

「それなら、その情報は正しいんだろうけどさ・・・どっちにしろ、出張る必要はあるの?」

「・・・やつらの目的はこのゲームの頂点に君臨することと、『ガーディアン守護神』の真似事」

いや、そのどこが問題?

むしろ、ゲームしてるんだから、そこを目指そうとしているのは当たり前だと?それに、比較的治安の悪い無所属領に来るんだからいいじゃん。たしか、現状では月毎に神話領が交代で見ている気がしたけど?

「うん。それだけなら、周りに一言話してもらえればそれでいいんだけどね。正直、『ガーディアン守護神』名乗っていても、こっちは勝手にしてるだけだから、やるなと言えないし」

「・・・問題は、多くのPKを配下に行っていること」

「たぶん、力でねじ伏せようとしてるね」

「「「「?!?」」」」

さも、当たり前のように言う師匠。
でも、そんな事ができるわけが無い。

「しかも、中心人物が尋常じゃない強さらしくて……」

「……『ラクトスク世界樹の守護栗鼠霊』の報告では、PK集団数十人を一人でやっただらしい。しかも、プレイヤーはまったく聞いたことが無い、無名のプレイヤー」

その言葉に、俺達はただただ、驚くことしかできない。

「ありえない。二つ名持ちでもないヤツが、そんなこと……!」

「うーん……。運よくレアアイテムを手に入れたとか？封神演技領だったら、特殊な武器が多いって聞いたことがあるし」

封神演技領は、キャラの性能がそこまで高くない。

選べる種族も、『半仙』『仙人』の二種類。

しかも、スキルをまったく覚えないうって言う特殊な性質。

ただ、パオベエ宝貝と呼ばれる武器がえらく強い。

普通、武器には神器級の武器以外でスキルがついているものは滅多にない。それに、この手の武器はスキルのレベルが上がらない。たぶん、パオベエ強力すぎるからだろう。

だが、パオベエ宝貝には、低レベル武器でもスキルがついている。しかも、武器を装備したときにつくスキルのレベルも上がるからな。

それゆえに、一つの武器を最後まで使い続けるヤツが多く、威力もかなり強い。

要するに、大器晩成型。そういうキャラが異常に多い。

「でも、武器はがんばれば手に入るような下級のレア。防具も、

アクセもね。あれぐらいの装備、みんな持つてるって程度」

「じゃあ、ごく普通の装備で？」

「んな、ふざけた話しが？」

「……ココでとんでもないドーピングアイテムを見つけたわね」

お前はもう、黙ってる。

いい加減に、レアアイテムのことは考えるな。今は、それよりも重要、というか、重大なことが起こっているのかもしれないんだぞ？

「まあ、それでイースちゃんと俺が自分の部隊の精鋭を率いてココに来ただけだよ……」

「……偵察と謎の究明」

確かに、そんなわけのわかんないプレイヤー相手だったら、用心しすぎて悪いことなんてない。それに、情報は時に剣となり、身を守る盾になるって言うし。

「で、他のメンバーは？すぐこの先で休んでる」

「……じゃあ、何でスピカさん達は来た道に戻ってきたんですか？」

「……タマが、仲間の気配を感じ取った」

「仲間？……どういことだ？」

いや、俺に聞かれても……。

『魔氷狼^{フェンリル}』には相当特殊なスキルとか、性能を持っているらしい。

「……簡単、タマ二号を見つけた」

「仲間じゃない!？」

「……じゃあ、予定？」

「予定もない!」

イスは俺をいじりたいが為に来た道に戻ってきたらしい。

「……でも、そんなバランスの悪い、少人数PTでよくココまで来れた……」

まあ、こつちにはカイ先生がついてるからな。

カイがいなかったら、絶対にココまで来れてない。

それほどまでに重要な人、じゃなくて魚人だ。

「じゃあ、そんなに危険なやつ等がいるなら、俺達はどうすればいいですか？」

「うん。俺としてはミッド君いたら普段の百倍がんばれるんだけど、正直、PK狩りするのは見てても気持ちいいものじゃないし……今日のところは、帰った方がいいと思うよ?」

「おっけー、師匠。だつてさ、ロゼ。今日はおとなしく帰つとこうぜ。それに、何か間違いがあつてPKペナ喰らつたら面倒だし」

俺がそういつと、心なしかミサの顔が若干青くなった気がした。
・・・まあ、つい最近襲われてたからな。

「・・・そうね。しょうがないか・・・。帰りましょう」

かなり気落ちした様子でロゼは俺の言葉に従ってくれた。

・・・普段から、コレぐらい大人しかったらかわいいの・・・。

「・・・浮気は、許さない」

「何で！？何で俺がタマの前足を喰らいそうで、お前の鞭を喰らいそうなんだ!?!」

「モテる男は辛いな、ミッド」

カイに文句を言おうとしたとき、急に洞窟が騒がしくなる。
そして、通路の先にチカチカと光が見える。
アレは・・・。

「戦闘・・・っ!」

「・・・バレた・・・!」

そういつと、『ガイディアン守護神』の二人は何の迷いもなく駆け出す。

「お、お二人とも・・・!」

「私達も行くわよ!」

駆け出そうとする二人をカイが手でとどめる。

「ちょっと、カイ。何するの!？」

「そうですよ!早く加勢しに行かないと!」

「ダメだ。カイならともかく、俺達が行っても足手まといだ」

「ああ。相手はPKだ。逆に言えば、対人戦闘のプロでもあるそんなところにモンスターしかやったことのない俺達が行っても邪魔になるだけだ」

そういうと、カイはぶつぶつと何かをいい、スキルを発動させる。光り輝く魔法陣のようなモノが現れたかと思うと、そこから二頭の翼の生えた馬、『ペガサス』が現れる。

その光景にロゼとミサは驚いた表情を見せる。

「お前等はコレに乗って逃げろ。適当にほつといっても時間がたつと消えるからな」

そういうと、カイは師匠達の後を追って走り出した。

まあ、コレなら万が一にでも師匠達が負けることはないだろう。俺はロゼ達に向き直ると言う。

「じゃ、俺達は避難しようぜ」

「でも、ミッドさん。馬、二頭だけですよ?」

「てか、何でカイはペガサスの召喚スキルを持つてるの・・・?」

「ま、それは後でカイにでも聞けば？それに、俺は馬に乗って走るよりも速いからな」

「……それは……すごいのか……悲しいのか……」

何故かミサにもものすごく微妙な顔を向けられた。

クエスト7・猫妖精達の迷宮脱出？（後書き）

用語集

オーディン 戦争と死の神・北欧神話の最高神。投げれば必ず敵にあたり、自分の下に戻ってくると言つ槍・『グングニル』を所持する。また、『スレイフニル』は彼の愛馬である。

ラタトスク 世界樹の守護栗鼠霊・ユゲドラシル 世界樹に住むとされているリスの精霊。世界樹を守護しているとされている。

バオベエ 宝貝・封神演技で登場する特殊な武器。様々な種類がある。

PKK・プレイヤー・キラー・キルの略。要するに、PKプレイヤーをキルすること。所詮はPK。

クエスト8・踊り子は風の戦乙女へ

Player - ミッド

「もうすぐ外だぞ！」

俺は二頭のペガサスに併走しながら二人に声をかける。

・・・ちよつと薄暗くて走りにくかったけど、特に問題はない。

「でも、本当に余裕でついてこれるんですね・・・」

「まあ、それしか取り得が無いし」

「・・・」

心が結構傷ついた気がしたけど、気にしないでおこつ。

・・・別に、泣いてないぞ？

すると、突然前方から何かが放たれる。

それは俺が何かをいう暇もなくミサとロゼのペガサスに着弾し、爆ぜる。

ペガサスが消滅し、その余波でミサとロゼが投げ出される。

「ロゼ！ミサ！」

「大丈夫よ！」

「は、はい！」

ロゼはすぐに立ち上がると、腰に吊ってある剣帯から剣を抜き、構える。

ミサは若干あたふたとしている。
俺も愛用のダガーを取り出すと、逆手に持ち、前を見据える。

「誰だ！俺達はPKじゃないぞ！！」

「……」

俺の声に対する返事は、魔法スキルでの攻撃。
それを俺は転がりながら回避。

そして、前方にいるはずの相手に向かって声を張り上げる。

「何とか言ったらどうだ！」

「いい加減にしないよ！こっちは、今から避難しようとしている
だけだっというのに！！！」

依然、沈黙を保ったままの襲撃者。

……どうする？

相手の姿が見えない……。

「姿を見せたらどうだ！……………なんつっ、て
っ！」

こっそりと取り出した投擲ナイフを左手で投げる。
すると、くぐもった声が聞こえる。

そして……。

「反撃のスキは与えない！！！」

ナイフを投擲しつつ、駆け出す。

実は、こうするとものすごく面白いことが発生する。

簡単に言くと、ボクが投擲ナイフを投げた後に全力で走ると、たまに追いつけることがある。

今回は若干遅れたけど、ほぼ同時。

相手が見えた瞬間に急所にダガーを叩き込む。

すると、相手は致命的な一撃によって、HPバーが一気に数ドット残すだけになった。

そして、相手に見せ付けるようにしてダガーを突きつける。

キャラはおそらく鳥人族^{バーディア}。エジプト神話系のキャラで、耳の後辺りに羽のような飾りがあるのが特徴。魔法攻撃力がやたらと高い。

ちらりとネームを見ると、見事なまでに真っ赤だった。

「な、何でわかった!? ひ、卑怯だぞ!」

「アンタが言うか。こここそ隠れて攻撃してきたくせに。・・・
・・・で、何で急に攻撃してきた?」

若干声にドスを利かせ、目の前のプレイヤーを脅す。

PKプレイヤーは、もしもPKKされると、それぞれの神話領の『地獄』に当たるところに転送される。まあ、簡単に言くと牢屋行き。そこでとても面倒くさい、ある一定のクエストや作業をこなさないとい生出られないらしい。

そして、現在のこのゲームでは文字通り一生牢屋入りになるから、PKの方々は必死だ。

「んなもん、やられる前にやるからに決まってるからだろ!」

「やられる前に?・・・まさか、お前がああの過激な『守護神』^{ガーディアン}をやるつとしてる組織の?それで、俺達を『守護神』^{ガーディアン}と勘違いして?」

「ミッド！複数の声が聞こえてくる！！」

ロゼに言われて耳を澄ますと、確かに洞窟の入り口のほうから声が聞こえる。

まさか、他に出入り口が！？

目の前のプレイヤーが援軍に己の勝利を感じたのか、口をあけようとする。

「呼ばせるかよ」

俺はダガーで切りつけ、相手のHPバーを削りきる。

ヤツは、口をパクパクさせてドットへと変換され、『地獄逝き』になった。

「な、何がどうなって！？」

「・・・やばい。たぶん、相手は師匠達を挟撃して一網打尽にしようとしてるんだと思う」

「本当に！？それなら、スピカさんに教えに行かないと！」

「そ、そうですね！」

「・・・まあ、俺達が敵じゃないって言うってわかってもらえようなやつらでもなさそうだし。・・・それなら、師匠達の傍にいた方が安全か」

そして、俺達は師匠達と合流するために、またダンジョンを進み始めた。

Player - カイ

「スピカさん！」

俺がミッド達と別れてすぐにスピカさん達を見つけることに成功だが、奥のほうでは戦闘しているであろう、スキル発動の効果音や剣戟の音が聞こえてくる。

「お？カイ君？逃げなかったの？」

「まあ、これでも一応は『ガーディアン守護神』の一人なんで」

「・・・貴方、『ガーディアン守護神』だったの？」

そう、言っていなかったけど俺はコレでも『ガーディアン守護神』のメンバーだ。まあ、そうでもなかったらミサの事情に詳しくないし、ココまで強い必要もない。

「はい。・・・別に、隠してたわけじゃないですよ？ミッドも、口ゼも知ってることですし。・・・あ、でも、ミサには何も言っていなかった」

「・・・そう」

イスさんはそう言うと、もう興味はないと言わんばかりにこちらから視線を外し、タマを使って相手を攻撃する。

コレが、ミッドだったらものすごく食いついてくる気がするんだけどな・・・。

「まあ、カイ君がいればこっちは百人力。と言っわけ、ちやちやっど蹴散らしてきて」

「そんな、当たり前のように……。俺はそこまで強くないですよ？それこそ、兄貴が最強、じゃなくて最凶だと思います」

まあ、確かに一般プレイヤーよりはるかに強いのはわかっているつもりだ。

ただ、どうしても兄貴が最凶すぎて感覚がおかしい。

「……あの根暗か」

「……根暗？」

「まあ、確かにアレは最凶、と言っか卑怯……」

「……先輩、会ったことがあるんですか？」

あいまいな笑みを浮かべているスピカさんをよそに、俺は魔法スキルを発動させるために詠唱を開始する。

このゲームにおいて、魔法スキルには二つの展開方法がある。

一つが魔法陣。これは、自分が使いたい魔法スキルを唱えるときさま発動し、相手に攻撃することができる。ただ、威力が低くなる。そして、魔法スキルを唱えまくれば連続して発動するため、威力ではなく、数に頼ったものになる。

もう一つが詠唱。コレはスキルによって決められた言葉を言い、その後で魔法スキルを発動させる方法。

時間がかかるが、魔法陣よりも強力な威力だ。要するに、数よりもその威力を重点に置いたものだ。

「おし！みんな！がんばって避けてね！」

スピカさんが非情に無責任なことを言って、味方に注意を送る。今はPTを組む時間もないし、それ以外に言い方法が無いから仕方ないっちゃ、ないんだけど……。

イスさんは怪訝な顔をスピカさんに向けると口を開ける。

「……何ですか？……彼の魔法スキルはそんなに？」

「やばいよ……。……全員、後ろに下がれ〜！！」

他の人達はどういうわけかこんな無茶苦茶なスピカさんの命令を文句一つ言わずに実行。

と言うか、迅速すぎる。

……たぶん、普段から滅茶苦茶なことしてるからだろうなと俺は予想をつける。

だって、よくわかっていないイスさんらしき部隊の人も引つ張ってきてるんだ。そうとしか思えない。

俺は入れ違いに前に駆け出し、目の前に敵しかいないことを確認する。

「パリランキ・アンデクセン ！」

俺はそう叫びながら地面に三叉矛トライポイントの石突をドンと地面につける。

すると、たたきつけた箇所から水がごうごうと音を轟かせながら相手に殺到する。

まさに、大津波。そうとしか表現できない。

そんなモノが、こんな狭い通路で放たれたら絶対に避けられない。相手は何かを叫んでいたが、水の瀑布に包まれ、押し流される。

スキルが終了したその後には、何も残っていなかった。

「さて、スピカさん！終わりましたよ！」

「おっけーおっけー。さすが、ありがとね。」

周りで呆然としている人たちを置き去りに、スピカさんはいつものようにお気楽な声を俺にかけてくれる。

「・・・貴方、何者？」

イスさんが、ここにいる人達を代表して尋ねてくる。

「俺は、ただの『音速の剣士』の友人一号ですかね？」

「たぶん、そうじゃない？」

そんな適当な返事をして、俺達は先へと進んだ。

Player・ミッド

「・・・ここらへん、だよな？」

あれから数分後。

ラッキーなことに、まだモンスターが湧き出していない通路を進み、何とかさつきまで俺達が休憩していたところまで戻ってこれた。

「まあ、やっぱりと言うか、全然人がいないわね。」

「皆さん、先に進んでしまったのでしょうか？」

「たぶん、ね」

俺はそういうと、気楽に先へと進む。
すると、女子二人からもすごい講義の声が来た。

「ちょっと！ココのモンスターがかなり強いのに、そんな気楽に進んでいいの!？」

「そうですね!？下手をすれば、PKに会うかもしれないんですよ!？」

「大丈夫だって。たぶん、カイとか師匠ならヨユーで相手をつぶしながら進んでる。むしろ、さっさと進まないと、後ろから怖いおにーさん達がやってくるぞ?」

俺はそういうと、ごく普通にダンジョンを突き進む。

後の二人も、戦々恐々としながらも俺についてくる。

そして、しばらく歩いてみるけど、まったく言っていないほどにモンスター達と会わない。

「何でよ?」

「たぶん、カイ辺りとかが魔法スキルで一掃したんじゃない?あいつの魔法スキルはえげつないからな」

カイの覚えている魔法スキルはほとんどが広範囲殲滅型のヤツ。
それを、こんな狭いところでくらくらうとか悪夢でしかない。

カイのことをよく知っているロゼはものすごく微妙な顔になる。

「・・・なんていうか、ご愁傷様ね」

「・・・そうだな」

「あの、カイさんのスキルって、そんなに？」

「ああ。大抵のやつは尻尾巻いて逃げる」

ミサがカイさんってすごいんですね！と感心する声をBGMに俺は『気配察知』を駆使しながら周りの警戒をする。

「でも、面倒なことになったよな・・・」

「確かに。今回は悪かったわね」

「珍しいな、ロゼが謝るとか」

「でも、今回は偶然ですよ？別に、ロゼさんのせいとかじゃないですよ」

「でも、なんか、楽しくないじゃない？」

「まあ、たまにはこういうこともあるって」

まあ、いつもこいつがいろいろなクエストを見つけてきては俺達を誘ってくれるからな。そこで俺達はドンチャン騒ぎしながらも楽しくプレイして、また別の日には引っ張り出されて・・・そんな感じだよっている。

「また今度、なんか楽しいクエストとか、ダンジョンに行けばいいじゃん」

「……そうね。じゃ、さつさとカイ達に片付けてもらいますか」

「……ものすごく、他力本願ですね」

「だって、俺達がしゃばっても、足手まといだぞ?」

「それは……そうですね……」

まあ、確かに自分が何もできないっていう状況はものすごく歯がゆい。

でも、足手まといになるってというのは、味方にもかなり迷惑がかかる。だから、俺達はおとなくしていた方がいいと思う。

「まあ、回復とかはやっておけばいいだろ? ミサも、ロゼも両方とも回復の手段は持つてるわけだし」

「まあ、できることをしていきましょってわけね」

「は、はい! がんばります!」

さつきまで暗い顔をしていたミサが少しだけ元気になる。

じゃあ、がんばるか。

そして、しばらくの間、俺達の間からは言葉が一旦なくなる。

俺達が薄暗い通路を歩き続けて、まもなく、かすかに音が聞こえてくる。

たぶん、スキルの発声音や攻撃時に発生する剣戟の音だ。

「もうすぐ、だな」

「そうね。早く行って、スピカさんに教えなさい！」

「そうですね！私達にできることをがんばります！」

俺達がそう言って駆け出すと、光が見えてくる。

もしかして、ココが最深部か？そう思った矢先、いきなり何かがあるものすごい勢いで飛んでくる。

そして、通路の壁に叩きつけられる。

「し、師匠！？」

「スピカさん！？」

「ど、どうしたんですか！？」

壁に叩きつけられたのは師匠だった。

ただ、様子がおかしい。

何故か、苦しそうにのた打ち回っている。

俺達はそこに駆け寄り、俺はロゼに回復を頼む。

「何で、ここに・・・？」

「師匠！まさか、バグモンスターでもいたのか！？」

「バグモンスターって、あれ？」

「確か、通常ではありえないことをするモンスターですよね？」

「違、う・・・」

違う？

でも、コレは明らかに痛がっている。

これはゲームだ。もちろん、PKに攻撃されようが、モンスターに攻撃されようが、タンスの角で小指をぶつけようが痛みはない。

でも、それがおかしくなっているのがバグモンスター。

コイツはどういうわけか、攻撃されると痛みを感じたり、通常ではありえない強さを発揮したりとわけがわからないとしかいいようのないことが起こる。

俺も、それ以外でこんなコトが起こるなんて、聞いたことが無い・・・！

「でも、師匠は痛がってるじゃないですか！」

「プレイ、ヤー……。たぶん、主犯、格……」

「プレイヤーからの攻撃で、あのバグモンスター、だっけ？それから攻撃されたみたいになってるの!？」

「ミッドさん、これって、よくあることなんですか!？」

「いや、俺も初めてだ……」

つか、コレが、万が一にも、プレイヤーが引き起こしたものでって言うんなら……。

「……許さない。二人とも、師匠を頼む」

俺は二人の制止の声を無視して、光の先へと飛び込んだ。

Player - スピカ

「あんの、バカ。・・・でも、どうすんのよ？後から敵が来てるつてのに・・・！」

「ロゼちゃん、それ、本当？」

「はい。さつき、入り口近くで襲われました。たぶん、途中でモンスターが何かに出会って時間がかかっているみたいですけど・・・」

なるほど。

それなら、痛いつて泣いてる場合じゃないか・・・。

俺は、痛みを無視して立ち上がる。

「大丈夫、なんですか？」

「まあ、俺は慣れてるから。でも、他の人がね・・・。まあ、回復魔法スキルで直るものでもないし」

むしろ、まずいのは・・・ミッド君だ。

相手は、やたらと強い。ゲームの中では改造^{チート}なんてできないし・・・。

何でだろう？

でも、一つだけ言えることがある。今のあの子じゃ、絶対に勝てない。それなら・・・。

俺はメニューを開き、そこからアイテムを取り出す。

すると、カード化されたアイテムが出てくる。それを、ロゼちゃんに押し付けるように渡す。

「ねえ、お願い。コレ、ミッド君に渡してきて。俺は、どうも」

「コであれの相手をしなくちゃいけないみたい」

「何を……」

俺にはわかってる。

既に、範囲内に入ってる。

「すぐに、敵が来る」

そういうと、さっきまで聞こえなかった足音が聞こえてくる。思ったよりも早い……。

もっと、真面目に上げとくんだった。

「何で、ミッドさんみたいなの……？」

「いいから！俺は強いから、あんなのいっばいいても大丈夫！」

まあ、ついさっき負けた人間が言うセリフじゃあないけど。

「でも、スピカさんでも勝てないプレイヤーに、ミッドが勝てるわけ……」

「ミッド君はね、俺の『弟子』であると同時に、『師匠』なんだ。大丈夫、それがあれば、きつと」

「でも、これは、ゲームですよ？何で、そこまで……」

そう、これはミサちゃんが言うように、たか……がゲームだ。でも……。

「これはさ、ミッド君が言ってるんだけどね。今の俺達にとっては、これも『現実^{リアル}』なんだ。それに・・・ゲームは楽しいものでしょ?」

だから、あの子はよく言ってた。

『ゲームは楽しむものだからね。・・・まあ、それが危なくなるっていうんなら、俺はそれを全力で阻止するよ。・・・ただの猫妖^{ケット}精^{シイ}だけだ』

そうやって、笑いながらいった。

「大丈夫、ミッド君は強いよ」

「見つけたぜえー」

そして、ついに来た。

ぞろぞろと、多くのプレイヤーが、PKプレイヤー達が。こつこつと赤だと、いつそ清々しさを感じる。

「行って！ココに君達がいても足手まといだ！」

「・・・わかりました」

「ロゼさん!?!」

「大丈夫、この人は嘘はつかないから！」

そついつとロゼちゃんはミサちゃんの腕を掴んで奥へと行った。

「・・・さて、一応聞くよ?」

「何だ？命乞いか？それとも、さっきの女二人は見逃せって話しか？」

「いや、今の俺、余裕が無いんだよね」

「だろうな、コレだけの人数、一人でやろうってんだからな！」

その言葉に、相手はげらげらと笑う。

「だから残念なことに、本気しか出せない。退くなら今のうちだよ。」

俺がそついった瞬間、相手の笑い声が止まる。

そして、視線だけで殺さんとばかりに睨みつけてくる。

「・・・調子に乗ってんじゃ、ねえよ！！」

一番先頭にいたプレイヤーが巨大な剣を振り下ろしてくる。

「貰った！」

でも、遅い・・・！

「な、んで？」

次の瞬間、相手が切ったのは俺が着ていたマント。

この装備、レアなんだけど、なんか露出が多いからイヤなんだよね・・・。。。

俺が着ているのは翡翠色の鎧。重要な部分だけを守り、機動力に特化している。でも、年頃の乙女がへそ出して、結構足も腕も出し

て………どっ?

地味に恥ずかしい思いをしながら、愛用の騎士剣を構える。

「お前、まさか……!」

「元スレイブニル八足の駿馬」。そして……現シルフ・ヴァルキュリア風の戦乙女。北欧神話
領ガイディア守護神、グリーン・ユグドラシルの疾風騎士隊長スピ
カ!……残念だけど、君達は「地獄逝き」だよ」

クエスト8・踊り子は風の戦乙女へ（後書き）

用語集

地獄逝き・PK達がPKKされると送られる場所。そこでいくつもの贖罪クエストをこなさないと出ることができない。

カード・アイテム、武器をカード化することによって、持ち運び、トレードを楽にしている。使用時はカードを握りつぶすことで私用できる。アイテムならばその場で即座に使え、装備ならスムーズに装備を変更できる。

シルフ・ヴァルキユリア
風の戦乙女・オーディン直属の精鋭部隊。神話にも登場する四人の戦乙女がモチーフになっている。もちろん、スピカ以外に後三人いる。

クエスト9・海魚の力(前書き)

やっと、来ました・・・。

あの子が、本気を出します。

まあ、多くの方はわかってたと思いますがWWW

クエスト9・海魚の力

Player・ミッド

通路の先、そこはさっきよりも明るく、ほんの少し広い通路だった。

師匠、ドンだけぶっ飛ばされてきたんだよ!?

「援軍か!」

「やれ!」

『気配察知』で敵がどこにいるかはわかっている。でも、既に地図が敵のマーカーでいっぱいだ。と言っか……。

「お前等、雑魚の相手をしてるほど暇じゃない!」

俺は一気にトップスピードまで持っていく。

相手の攻撃を避け、そして敵や味方の体を避け、どんどん先に進む。

そして、ついに人の波が途切れる。

「ミッド!?!何で、ココに!?!」

「……タマ二号?」

目の前に現れたのは、多くの敵に四苦八苦しながらもどうにか戦っているカイとイース。

「師匠をやったのは、どいつだ？」

「師匠？・・・お前、『ガーディアン守護神』か？」

俺にそんな声をかけてきたのは、後のほうでこの光景を、何かの試合のように観戦しているプレイヤー。

「さっき、誰かがぶっ飛ばしただろ！しかも、痛みにつめいてた
！！」

「・・・ああ、さっき俺がぶっ飛ばしたヤツが」

案の定、答えたの観戦してたやつだ。
それを確認すると、俺は全力で走る。

たぶん、今の俺ならタマでさえ軽く置いてきぼりにできる。そう
思った。

そして、ヤツの急所めがけてダガーを叩きつける。

「ッ!？」

「速いな」

だが、相手は何事もなかったかのように受け止める。
俺は急いでバックステップを踏み、距離をとる。

「おいおい、まさかコイツ、『音速の剣士』か？」

「あの、このゲーム最弱って噂の？」

周りからチラチラと俺の悪評が聞こえる。

「……………ほんの少し、心にダメージが。」

「たぶん、さっきのは『風の戦乙女』シルフ・ヴァルキユリア だろ？そんなヤツの弟子が音速の剣士』？馬鹿じゃねえの？」

その言葉に周りが笑い出す。

「……………すみません、師匠。俺、何も言い返せません。」

でも、俺は周りの声を無視して今度は手数による攻撃を仕掛ける。縦横無尽に攻撃を仕掛けるが、相手はそれをいとも簡単に全て受け止める。

「マジかよ。ミッドの攻撃を全部正面から受けきるとか……………」

「……………異常」

俺は一旦カイとイスのところに行く。

そして、俺達は背中合わせになりながら声を掛け合う。相手も攻撃のスキを伺っているのかにらみ合ったままだ。

「最悪なことに、一つ問題がある」

「何だ？これ以上増えると、俺過労死するかもよ？」

「残念だったなコレはカイ向けの仕事だ」

「マジかよ」

俺は二人に後ろからも敵が来ていることを話す。

それに驚きつつも、敵から目をそらさないのはさすがだ。

「カイ、呼べるか？」

「……まあ、こんだけ広けりゃ行けるだろう」

「……何の話？」

俺はその言葉には答えずに、さっきのように敵の中心に飛び込む。ただ、今回の目的は攪乱だ。それと、騒々しい音を立てて、カイの魔法スキルの発動をごまかすための。

すると、すぐにカイは『ペガサス』を呼び出し、それにさっとまたがる。

そして、『ペガサス』は翼をはためかせて天井すれすれを飛ぶ。

「……『ペガサス』の召喚スキル!？」

「アイツ、何者だ!？」

「魔法スキルだ!」

させるか!

俺は魔法を放とうとするやつを次々と強襲。

詠唱は中断させてしまえばこちらのものだ。

でも、魔法陣のほうはうまく避けてもらっしかない。

「……タマ二号、もしかして、彼は……」

「今は説明してる暇はない。でも、たぶんアンタの思ってる通りだ」

今度は俺とイースが背中合わせになって敵を睨む。

「いいのか？味方が逃げたぞ？」

「違うな。お前等の見え透いた『挟撃』って罠を排除しに行ったんだよ」

「……お前、本当に『守護神』^{ガーディアン}の人間か？」

そう聞いてきたのは、さっきまで俺達の戦いを観戦か何かのよう
に見ていたやつ。

おそらく、リーダーか何かだろう。

「俺は、『守護神』^{ガーディアン}なんかじゃない。ただの……猫妖精^{ケットシー}だ。お
前こそ、何者だ？」

「『修羅界』のリーダー。『阿修羅』のクリフ」

『阿修羅』のクリフ。

まるで聞いたことのない名前だ。

たぶん、『阿修羅』ってのは自分で自称してるか、つい最近つけ
られるようになったんだろう。

「……気をつけて」

「わかってる。一応聞くけど、そっちの仲間は？」

「……あいつの攻撃で痛がってるうちに……」

「そうか……。参ったな……」

俺は、どつちかと言うと一対一じゃないと力が発揮できない。
大勢対俺にできることなんて、引つ掻き回すことぐらいしかない。
俺の攻撃力なんてたかが知れている。

こんなにならしたら、回復の一人ぐらいいるだろう。攻撃しても焼け
石に水なのが目に見えている。

「・・・タマが蹴散らす。・・・貴方は、下がっていて」

「いや、それなら俺はアイツを足止めしとく・・・！」

「っ・・・バカ・・・！」

俺はまた相手に突撃する。

すると、相手はそれがわかっていたかのように受ける。

俺は猛攻を仕掛ける。

だが、周りが黙っていない。

『気配察知』を駆使し、死角からの攻撃を何とか避け、反撃し、
ダメージを与えてイースのほうへ蹴っ飛ばす。

すると、タマがどこからともなく現れては相手を食い干切ってい
く。

「『フェンリル魔氷狼』はだめだ！プレイヤーのほうをやれ！」

・・・こいつ等、バカだな。

何で、気付かない。『フェンリル魔氷狼』を捕まえたこいつが、弱いなんて
ことはありえない。むしろ、ものすごく強い。しかも、イースは『
神器持ち』だ。

「・・・『グレイブニル神の鎖』・・・！」

イスがつぶやくように言う。
すると、持っていた皮製の鞭がいきなり鋼鉄の太い鎖の鞭へと変貌する。

これが、『神器』。通常ではごく一般的な武器にしか見えない。だが、武器の名前を言った途端にその力を解放するとか、ロマンとしか思えない機能を持っている。

「ゴウ・フォミユラ」

そして、『神器』のみが持つ特殊スキル、通称Gスキル^{ゴキツキル}。

イスの持つ『神の鎖』^{クレイブニル}の場合、決して効果のなくなることのない拘束という効果。まあ、簡単に言えば、コイツをくらうとその場から一步も動くことができなくなる。唯一、動けるほう方があるとすれば、イスが解除用スキルを発動させるほかにない。

最凶^{チート}とは、まさにこのことだ。
そして、一番重要なことが……。

「……乙女に、攻撃しようなんて……言語道断」

「ちょ!?!まっ!?!いやあああああ!?!」

ヤツはドSだ。

しかも、さすが『神器』と言うだけあって、かなり強い。
後は、カイがつまくやってくれていることを祈ろう。

Player・ロゼ

「まったく!面倒なことを……ミッドの癖に!」

「でも、どうするんですか！？敵、いっぱいですよ！？」

そう、既に目の前は敵でいっぱい。

この中を、ミッドは突っ切ったなんていうの？

……ふざけてるわね。

目の前にどんどん敵である、PKのレッドネームが迫ってくる。

わたしは数多く覚えているスキルを駆使し、どうにか攻撃をかわし、攻め立てる。そして、深追いはせずに、前に進むことだけに専念する。

「ミサ、大丈夫！？」

「は、はい！わたしも、DEXは高いので！！」

ミサはわたしの後に隠れて、弓を射る。

この子は、短剣と弓を中心に使った戦闘を得意としていた。

職業でいうなら『レンジャー』や『スカウト』と言ったところかな？

この子は料理スキルを極めている、つまり、器用さに関係するDEXがかなり高い。それを生かして、器用さや、クリティカルが出やすい弓と短剣を使わせればかなり強い。

ただ、スキルがそんなになく、熟練度も低いのが問題。

ミサは初期スキルの応酬で何とかわたしについてきてる。

でも、現実には厳しい。

どんなにスキルを覚えていても、こんな数十人に囲まれてちや多勢に無勢だ。

わたしとミサのHPはがりがりレジネーションと削られている。

今は、常時回復系スキルを多用してどうにかなっているというのが現状。

「・・・後でミッドをシメる」

「あの、ミッドさんに会えなかったら、それも難しいんじゃない？」

それは極力考えないようにしていたのに・・・。

そうして、四苦八苦しながら前に進んでいると、前のほうからギ
わめきが聞こえてきた。

「な、何だ、あれ？」

「あんなスキル、存在するのか・・・！？」

「『ペガサス』・・・？」

「アイツを攻撃しろ！魔法スキルと弓だ！」

まさかと思い、上を見る。

そこには、槍を携え、『ペガサス』に跨る、魚人キャラのプレイ
ヤー。

「カイ、さん？」

そう、カイだ。

カイはこちらに気付いたのか、驚きの表情を浮かべる。
すると、口元がぼそぼそと動く。

・・・嫌な予感がする。

「ミサ！わたしに抱きついて！」

「はい！？何で急にそんなことを！？」

「いいから、さっさと来い!!」

わたしはミサを掴んで寄せると、早口で詠唱。
そして、魔法スキルを発動させる。

「堅忍不拔の陣！」

わたしが使ったのは防御用魔法スキル。

たぶん、わたしの勘が正しければ、カイは『海』系の魔法スキル
を使おうとしているはず。

そして、カイの魔法スキルが発動する。

カイはその身の丈ほどもある三叉矛トライデントを振る。すると、その軌跡か
ら次々と水の大槍が射出されて次々に敵がそれに貫かれては倒れて
いく。

わたしは心の中でどうにかもってくれと祈りながら体を小さくす
る。

そして、静かになるとそこにはわたし達以外、誰も立っていないか
った。

「お前等、何でこんなところに？」

「何がこんなところに、よ！危うくアンタの魔法スキルで死ぬと
ころだったじゃない!？」

「……あれ？PTってまだ解除してなかったんじゃない？」

「……え？」

「急いでメニューを開ける。」

すると、そこにはPTリーダーがわたしで、他に三人の仲間がいると表示が。

ついでに詳細をみると、そこにはカイの文字があった。

「……」

「まあ、ミッドと言いついでココに？スピカさんのところにいた方が安全じゃなかったか？」

「いや、それが……。スピカさんにコレをミッドに渡せってお使いクエストを……」

わたしはスピカさんから受け取ったカードを見せる。
すると、カイは若干驚いたような表情になる。

「コレ、アイツが受け取るかな……」

「何、コレ？」

「いや、それは元々ミッドが持ってたレアアイテムなんだけど……」

「あ、あの！」

ミサがわたしとカイの会話に口を挟む。

……今、少し重要な話をしたのに。

「どうした？」

「あの、敵の方が……」

周りを見てみると、いつの間にか敵に包囲されていた。
「……いや、ついさっきも包囲されてたけどね。」

「ああ、それなら大丈夫よ」

「な、何ですか！？い、今にも攻撃してきそうですよ！？」

「大丈夫、大丈夫。こっちにはカイがいるから」

「……おい、えらく他力本願だな」

「と言っわけでカイ、本気で行きなさい」

「……まあ、確かにコレは本気出さないと。行くぞ、ネフチ海王星の三叉矛ユーン・トライデント！」

カイがそう言った瞬間、カイの持つ三叉矛が変化。

三叉矛の色が鋼の色から、海を思わせるような青に変化し、三叉矛のまっすぐな刃の部分が波打つような形状になる。

『神器・海王星ネフチユーン・トライデントの三叉矛』。それが、カイの武器の名前。

「ろ、ロゼ、さん！あ、あれ、神器！？」

「……そういえば、ミサに言ってなかったわね。カイは『ガーディ守護神アソ』の一人で二つ名持ち。しかも、ユット・ネーム神名」

「ギリシャ神話領の、三叉矛を持った、神名持ちって……！」

そう、あまりにも有名すぎる神様。

絶対に一度ぐらいは聞いたことがあるはずだ。
空と、海と、冥界を統べる神の二柱、海を統べる神。

「そう、カイはギリシャ神話領の『海と馬の神』ポセイドンよ」

クエスト9・海魚の力（後書き）

用語集

阿修羅・仏教にて登場する、八本の腕に三つの顔を持つ守護神。『正義』や『火』を司るとされている。だが、帝釈天に娘を奪われ、戦いを挑んだことにより悪鬼神とされてしまう。

ポセイドン
海と馬の神・ギリシャ神話に登場する、ハデスの弟で、ゼウスの兄。海その他に馬を司る。三叉矛はポセイダンの象徴とされている。

ペガサス
天馬・翼の生えた馬。本書ではカイが召喚できるペット扱いのモンスター。

クエスト10・阿修羅VS猫妖精

Player - ロゼ

カイの広範囲殲滅型魔法スキルがどんどん放たれる度に通路から誰もいなくなる。

そして、最終的に残っていたのは私達三人と、範囲外にいた敵。どうも、味方のほとんどは既にやられていたみたい。

「おし、とりあえず一段落。・・・で、次は誰だ？」

カイがそう言って周りを見渡すと、じりつと後ずさるPK達。

たぶん、本能的にわかつているんだろう。カイが、自分たちでは太刀打ちできないほどに強いのが。そして、PK達にとって最悪なことが『地獄逝き』。たぶん、まともにカイとぶつかればそれは免れない。

「・・・ッ！弓矢を持っているヤツが攻撃しろ！魔法スキルさえ使わせなきゃ」

相手は、本当にどうしようもなかった。

。 気付きなさいよ、それが神器って事に。それに、カイはまだ・・・。

「・・・ アポファシ・トゥ・ポシドウーナ」

Gスキルを使っていないって事に。

ギリシャ語で、『海王星の裁き』。カイが槍を掲げると、その上空に水の塊ができる。

それはどんどん大きくなっていき、直径十メートルはある水塊に

なる。

「「「「」」」」」

「……まあ、この先はどうするかわかるでしょ？」

「じゃ、ばいばい」

カイはそう言いながら槍をぶんと振り下ろす。

水塊もその動きに合わせて、流星の如く敵の集団めがけて突撃。それでほとんどのPK達のHPが削り切れてしまった。

カイは周りを見渡して一つ頷くと、私達の方を向く。

「……どうしようかな？」

「何が？」

「いや、後から敵が来てるんだろ？」

「そ、そうです！スピカさんが！」

「……なら、大丈夫か」

ミサの言葉を聞いた瞬間にカイはもと来た道を戻ろうとする。私もそれについて行く。

「ちょ、ちょっと！？いいんですか！？」

「いいも何も……なあ？」

「そうね」

あの人^が雑魚に負ける？
ありえない。

「あの人、『^{オーディン}戦争と死の神』^{直属の}『^{エレメント・フォース}四色の戦乙女』の一人だからな……」

「……あれ？スピカさん、『^{スレイブニル}八足の駿馬』じゃありませんでしたっけ？」

「ああ。それは『元』だ」

「ちょっと、それは私も初耳よ？」

「……そうだったっけ？」

そう言つと、カイはうつかりしてたとか言つて笑い出した。

「それに、知ってるか？『^{スレイブニル}八足の駿馬』って、八本足なんだぞ？」

「……アンタ、何が言いたいの？」

「スピカさんだけじゃ、手と足を合わせても四本の足しかないんだよ」

「……はあ？」

本当に、何が言いたいの？

「お？まだここにいたの？」

聞き覚えのある声に後を振り向くと、そこには際どい鎧を身にまとったスピカさん。

カイもそんなスピカさんの姿を見て視線を空中にさまよわせる。

「ああ・・・やっぱ、この鎧は目のやりどころが難しいよね」

そう言いながらあっはっはと笑うスピカさん。

「でも、大丈夫だったんですね！？」

「思ったよりも少なかったしね」

「でも、それ、少し・・・」

確かに、イメージとしては戦乙女。でも、いくらなんでもやりすぎだと思う。

翡翠色を貴重とした鎧で、全体的にピッタリとしたつくりなのか、スピカさんの体のラインがコレでもかと言うぐらいに出ている。更に、二の腕あたりや太腿の半ば、お腹のへそのあたりが大胆に出してあって、男の子なら思わず見てしまっただろうということが私でもわかる。

まあ、スタイルが良いからむしろ羨ましいけど・・・。。。。後で牛乳を飲もう。

「・・・ロゼちゃん、何で俺の胸を見るかな？」

「いえ、べっつに」

「……私、自信がなくなっていました」

「……どちらかと言うと幼児体系というか、スットンというか、ぺったんこというか……ミサがものすごく落ち込み始めた。」

「あ、あの、さ……。ミッドに、カード渡しに行くんだろ？」

「あ、そうだった！」

「よし、出てくる敵は俺とカイ君で倒す。君達のはぐれないようについて来て！」

そう言うと、カイとスピカさんが走り出す。私とミサはそれに遅れないようについていった。

Player - イース

「……私は、目の前にいる大勢の敵を相手に、タマと『グレイブニル神の鎖』を使って戦っている。」

でも、私一人だけじゃない。

近くでは、いつまでもキンキンと連続して金属音が鳴っている。

それは、あの『阿修羅』のクリフと名乗っているプレイヤーとタマ二号が互いに激しい剣戟を交わしているからだった。

二人のスピードはほぼ互角。

でも、タマ二号はSTRが低すぎ、攻撃力が無い。

そのためにかタマ二号のHPがほんの少しずつ削られている。

「まさか、俺のスピードについてこれるヤツがいるとはな！」

「こっちも、スピードだけには自身があるんでね！」

でも、タマ二号の顔は焦っているように見えなくもない。

そして、タマ二号はまたも力任せに吹き飛ばされ、私の近くに降り立つ。もう、これで何回めだろう？

「タマ二号……」

「俺はタマ二号じゃないからな」

「……でも、タマ二号じゃ、無理」

「俺のは時間稼ぎだ。後でカイが何とかする。それに、いくらなんでもショートメールぐらいは送っただろう？」

ショートメール。

フレンド登録したものの同士でのみ使える機能。フレンドにメールを送ることができるというシンプルなもの。

私は、このことをすぐに『オーデイン戦争と死の神』に送った。

「……でも、時間がかかりすぎる」

「だから、俺が時間を稼ぐって言うてるだろ」

タマ二号はそう言うと、アイテムカードを取り出し、握りつぶす。すると、減っていたHPバーがみるみる回復していく。

全快になったのを確認して、またクリフに向かってその小さな剣ダガーを振るう。

「しぶとい・・・！」

「残念だ。それが『音速の剣士』なんでね！」

また始まる激しい剣戟の音。

私は『ガーディアン守護神』なのに、プレイヤーの一人も守れない・・・。

あの時のように。

・・・また、繰り返した。

せつかく、今度はそれだけの力を手に入れたのに・・・。

「くらえ！」

そこで、タマ二号が隙を見つけたのか一気に相手に迫る。

捨て身の攻撃。

カウンター反撃を受ければまず無理な状況。

そこで、タマ二号が構え、唯一覚えているスキルを発動させる。

発動したスキルは高速で振るわれ、相手の首辺りに四回の攻撃が行われたことがわかるエフェクトが残される。

「なっ!?!」

「残念だったな」

完全な致命的一撃。クリティカル・ヒット

でも、相手のHPバーはやっと五分の一を削りきったところ。

それだけだ。考えられることは、タマ二号の攻撃力が低すぎること。でも、それにしたっておかしい。このゲームは完全スキル制。ステータスのウェイトはかなり低い。

だから、いくら攻撃力が低いタマ二号でもHPバーの半分ぐらいは絶対に行くはず。

そこから考え出されることは……。

「何だよ、その異常に高いステータスは……!」

タマ二号は相手との距離をとりながら相手に怒鳴るようにして聞く。

でも、あんな異常なステータス。どこの『守護神』ガーディアンを探してもいない。いたとしても、どこかのステータスが著しく低くなるはず。

「……Pスキル『阿修羅』」

「Pスキル？」

相手はぼそりとつぶやくように言う。

自分の絶対的優位を感じ取ったのか、最初の頃よりも饒舌になっている。

「俺はつい最近、ココの近くのダンジョンのフィールドで『夜叉』に会った」

「んな、バカな!? 『夜叉』は神殿系のダンジョンの奥でふんぞり返ってるボスクラスモンスターだぞ!？」

「いたもんはいたんだ。で、俺は『夜叉』を一人で倒し、倒した時にこのPスキル『阿修羅』を手に入れた」

モンスターを倒してスキルを手に入れる。これは、ドロップスキルといわれるものだ。

モンスターを倒していると、超低確率で手に入るものだ。

「でも、ドロップスキルでそんなに強くなるはずが無い！しかも、つい最近だろ！？熟練度を上げたとしてもそこまでになるわけが・・・！それに、たぶんだけど、『夜叉』を倒して『阿修羅』なんてスキルが手に入るわけが無い！」

「そんなもん、俺が知ったこつちゃない！！」

そう言うと、今度はクリフが猛然と攻めかかってきた。タマ二号はその攻撃をギリギリでかわす。でも、さつきと違って攻撃をする暇がなさそうだ。

「・・・タマ、二号・・・！」

「来るな！危ない！」

タマ二号は左で何かを投げる。

すると、私の後ろで誰かが息を呑む声が聞こえる。後を振り向くと、そこには不意打ちをしようとしていたPKプレイヤーがいた。

私は驚きつつも鎖の鞭をぶんとふるい、敵を倒す。

「いつまで、そんな芸当ができるかなあ！！」

「なんの、ことだよー！」

「さつきから、お前はそこの女を守っていたんだろ？最弱の『音速の剣士』が、最強に限りなく近い場所に存在する『グレイブニル神の鎖』を、な！」

「・・・え？」

私が、守られていた？

タマ、二号に？

でも、思い当たる節がある。だって、タマ二号は相手の、クリフの攻撃は一度も受けていない。全部、紙一重で避けていた。でも、それにも関わらずダメージを受けていた。

「まさか、他のプレイヤーからの攻撃を……？」

いつも、私が背中を向けているところに降り立っていた。そういう、こと……？

「それが、どうしたんだよ！」

「なら、こつすればどうなる！」

相手が今までは違う動きを見せる。

すると、剣が炎に包まれる。

阿修羅は戦神であると同時に、火や、太陽の神とされている。

つまり……スキルの発動。剣が炎で包まれ、それを振りぬくと、炎の斬撃が放たれる。

そして、その先は……。

「くらえ！」

私。

「タマ！」

私はこのゲームの相棒を呼ぶ。

けど戦っている位置が遠すぎる。

私の、ミス。

なすすべが無い……。

そして、一つの影が私の前に立つ。

その人も何かの構えを取り、スキルを発動させる。

もう、見慣れてしまった、北欧神話領の初期スキル、リスタ・ソニック。

タマ二号は、私に向かってくる炎を切り裂き、私を攻撃から守る。でも、タマ二号のHPバーを見ると、すでに半分以上が消えてしまっている。

「ッ……、何だよ、これ、火傷、したみたいだなあ！」

「どういうわけか、俺の攻撃には痛みが伴うらしい」

「それをわかってて、相手に攻撃してんのかよ！」

タマ二号はクリフに叫ぶ。

だが、クリフはなんとも思わないのか、タマ二号の言葉を鼻で笑う。

「たかが、ゲームだろ？別に、死ぬことはないんだしいんじやね？まあ、別に俺には関係のない話だからなあ！」

そう言うのと、またスキルを発動させるのか、今までは違う動きを見せる。

それで、タマ二号をPKするつもりだ。

「……ダメ！」

「危ない！」

前に出て行こうとしたところを、タマ二号に止められる。痛みにうめいているタマ二号は何と避けるけど、どこかかすったのか、HPがまた一気に減り、レッドまでいく。もう、一撃を受ければ確実にPKされる。

「しぶとい、コレでトドメだ！」

相手は最早スキルに頼る必要が無いと思ったのか、剣を叩きつけて終わらせようとしているみたいだった。

私はそのスピードについて行けない。

タマも、遠くで戦っている。

万事、窮す。そう、思った。

すると、次に目に入った光景は、何故かココの入り口近くだった。

「カーイー！！！」

「くらえ！！！」

直後、ついさっきまで私達のいた部屋には大きな水塊が落ちてきた。た。

それにより、部屋の中を埋め尽くしていたPKが壊滅的な打撃を受ける。

でも、本命のクリフは今だダメージがほとんどなさそうだ。

「どっ、やって・・・？」

「ハッ！奥の手は隠しとくものなんだって！こっちも、Pスキルぐらいあるっての！」

その言葉で思い出す。
タマ二号には、Pスキル『アニマル・フォース獣の力』がある。
たぶん、今回もそれが確率で発生したんだろう。
抱えられるようにして運ばれた私はタマ二号に優しく地面に下ろされる。

「何を、言っている！お前、見えてないとも思っているのか！
」？

「・・・マジか、アレがわかるとか、ドンだけだよ」

「ちょー！？ミッド、アンタ大丈夫！？」

「いや、全身大火傷ってこんな感じなんだ・・・」

「ろ、ロゼさん！？ミッドさんがピンチです！？」

「ロゼ！俺があいつらの相手をしてるから、その間にミッドを何とかしとけ！」

タマ二号の友人の女の子二人、ロゼとミサが大慌てで回復魔法を使ってHPを回復させる。

そしてカイ、おそらくは『ポセイドン海と馬の神』が代わりに戦う。

・・・でも、コレにはほとんど意味が無いはず。

それでも、タマ二号はHPが回復したのを確認するとまた立ち上がる。

そして、また敵に向かっていこうとしたタマ二号の袖を掴む。

「・・・ダメ」

「でも、アイツに対抗できそうなの、俺だけだし」

そう、それも現状。

今、現時点で相手の攻撃をかわし、反撃を与えることができてい
るのはタマ二号だけだ。

「はいはい、そんなミッド君に師匠からのプレゼンツッ！」

「……」

先輩の言葉に何故かタマ二号が嫌そうな顔をする。

先輩はロゼに早く渡してと言うと、ロゼはほんの少し挙動不審に
なりつつも一枚のカードを渡す。

そこには、装飾品をカードオブジェクト化したために、カードの
上に『ACCESSORIES』と書かれている。

それを確認すると、タマ二号はため息をつきたくなるような表情
で言う。

「今回は、ありがとございます」

そう言うと、タマ二号はロゼからカードを受け取る。

「あれ？素直に受け取ってくれるんだ」

「いや、あのバカ、むかつくんで」

「……そんな理由で」

呆れながらもどこか嬉しそうに先輩は笑う。

「じゃ、がんばってね。ただの猫妖精君^{ケットシー}」

「はいはい」

そう言いつと、タマニ号はカードを握りつぶした。

クエスト10・阿修羅VS猫妖精（後書き）

用語集

魔法スキル・MPを消費して使うことのできるスキル。詠唱と魔法陣の二つの発動方法があり、神話領によって言語が違う。

Gスキル・神器を持つものが使える特殊なスキル。だから神名持ち
はチートと呼ばれる。

阿修羅・仏教の守護神。火や太陽を司る戦いの神。ただし、娘を奪
われたため、それに怒り狂った阿修羅は悪神となってしまう。

クエスト11・スレイプニル（前書き）

どうも、ここまで読んでくださってありがとうございます。

第二章も予定しておりますが、いつになるかわかりませんのでご了承ください。

では、一章の最終話をどうぞ。

クエスト11・スレイブニル

Player - ミッド

俺はカードを受け取ると、それを装備するために握りつぶす。

するとカードが光の粒子になり、それが俺の右の人差し指に集まり、指輪の形になる。

これは、師匠がふざけて『かそくそーち』とリネームしてしまったアレだ。

俺は更にアイテムインベントリを開き、そこからいくつかの装備をカード化。

出てきたそれをまとめて全部握りつぶして装備する。

「・・・だから、何であれだけそんなところに行くんだよ!？」

俺は軽くジャンプしてそれを取ると、帽子を被る。

「じゃ、一丁やりますか！」

そして、俺は駆け出した。

相手を、狩るために。

Player - イース

タマ二号は更に他の装備も付け替えるのか、アイテムインベントリを開いていくつかのカードを取り出す。そして、それを全部取り出して握りつぶした。

カードは光の粒子になり、タマ二号の体に纏わりつく。背中には騎士がつけるようなマント、そして足には長靴のような靴。その姿

はまるで……。

「『長靴を履いた猫』?」

「うん。そうそう、やっぱ、ミッド君はこっちの姿の方がいいよ」

先輩は今にもタマ二号に飛び掛りそうだ。

タマ二号は、上を見ると悪態をつき、ジャンプして羽根つきの帽子を取り、目深に被る。

すると、タマ二号は走りの構えを取る。

そして、姿が消えた。

一瞬、何が起こったのかわからなかった。

でも、次の瞬間には、カイの死角から迫っていたプレイヤーが消失し、代わりにタマ二号の姿が。

「お?お前のその格好、久しぶりだな!」

「まあ、する気もなかったし」

「なら、売れよ」

「……いや、俺は猫が好きだからさ」

「趣味かよ!」

すると、またタマ二号の姿が掻き消える。

次の瞬間にはまたPKプレイヤーが消える。その繰り返し。明らかに、タマ二号が何かしているのは明白だった。

「ま、さか、お前……！」

「『スレイブニル八足の駿馬』！？」

「エリア・ウオー領地争奪戦で、『オーデイン戦争と死の神』の前を切り開く、あの！？」

「……先輩、どういうことですか？」

「そうか、イースちゃんはわりと最近になって入ったから知らないんだね」

「……私は、一年ぐらい前に入りました」

「いやあ、ウチじゃだいぶ新人だよ、それは。何せ、ミッド君と私は『オーデイン戦争と死の神』がいた最初の頃からいるからね」

「……すみません、それ、どういう意味ですか？」

「聞きようによつては、あのダメネコが元は『ガーディアン守護神』だったって聞こえるんですけど？」

私にもそう聞こえる。

「だって、『オーデイン戦争と死の神』の愛馬は『スレイブニル八足の駿馬』。これは有名な話。でも、残念な事に『オーデイン戦争と死の神』には『スレイブニル八足の駿馬』の召喚スキルが無い」

「それが、どうしたんですか？」

「だから、『スレイブニル八足の駿馬』を作ったんだよ」

「作つ、た？」

意味がわからない。

「そ。それに、『八足の駿馬』は八本足の馬。俺の手と足を合わせても四本。じゃあ、残りの四本はどこにあるのかな？・・・あるいは、誰だと思っ？」

先輩は、ものすごく楽しそうにそう言う。

「そして、当時最強を誇っていた二人の『八足の駿馬』が敵を切り崩し、『戦争と死の神』の道を造る。つまり、このゲームでの『八足の駿馬』、つまり俺達の役割は領地争奪戦での切り込み隊長的な役目だったんだよ。じゃあ、そんな多くの敵相手に生き残るために、俺達は何をしたと思う？」

普通に考えれば、タンクとしての役割。

要するにDEFを強化したはず。でも、ココで重要なのは『八足の駿馬』。

『戦争と死の神』の愛馬はどんなものよりも早く、空をも駆けたという逸話を持つ。

つまり・・・。

「SPDの強化。誰も追いつけないスピードで敵をかく乱。それに、諸事情で『戦争と死の神』のスキルも避けなくちゃいけなかったからね」

「・・・なるほど、納得できました。特に最後の部分」

「要するに、ミッドが二人目の『八足の駿馬』スレイブニルだって言うの!?!
あの、ヘタレが!?!」

「……まあ、にわかには信じられないかもだけど。でも、一つだけ言つとくと、ミッド君は俺よりも『八足の駿馬』スレイブニルらしいよ」

そう言つと、ニコニコと微笑みながら言つ先輩。

「でも、ミッドには リスタ・ソニック 以外のスキルが無いんですよ?」

「そ、そういえば……。確かに、敵の霍乱には向いているかも知れませんが、倒すことはできないんじゃない?」

「それも大丈夫。……と言うか、みんな、聞いてないの?」

……何を?と、私達の頭の上にハテナマークが浮かぶ。

「ミッド君、 リスタ・ソニック を見せた相手になら言つのにな……。おかしいな?ま、とにかく、ミッド君には取つて置きのスキルがもう一つある」

「取つて置き?」

「Gスキル」

先輩は一言だけ、そういつ。
でも……。

「ミッドさん、神器持っているんですか?」

「ううん。持ってないよ。それに、ミッド君のGスキルも私と『^{オーデイン}戦争と死の神』がそう言ってるだけだし。だから、本当はGスキルじゃないのかも」

さつきから言ってる意味がわからない。

「まあ、わかるよ。それに・・・どうせすぐに決着はつく」

そういう先輩の目線の先、そこにはクリフと『長靴を履いた猫』、つまりはタマ二号の姿があった。

Player・ミッド

久しぶりだ、この感覚。

自分だけが時間を外れた感覚。

周りの景色がスローになって、俺だけがその中を普通に駆け巡る。それができるのもこいつのおかげだ。

『かそくそーち』、正式な名前が『スレイプニルの指輪』。これは、俺が師匠と後の『^{オーデイン}戦争と死の神』で一緒にモンスターを狩っていたときにゲットしたアイテムだ。

俺は自分のスキル、リスタ・ソニックをもう少しでカンストするってところで、二人にはその手伝いを頼んでいた。そして、その当時俺はあるスキルを取得していた。

そして、それは起こった。本当に偶然だった。

俺達がダンジョンの森を探索していると、突然目の前から八本足の馬が現れた。

俺は神話がわりと好きで、そいつのことも一目見ただけでわかった。

『八足の駿馬』、俺はそのモンスターに魅せられてしまった。

まあ、初めて会った、実際に神話に出てくるのがこいつだったって言うのもある。

その時、俺は必死にコイツを攻撃しないでくれと二人に頼み込んだ。

なんか、せつかく初めての遭遇に、狩ってハイ終了はないだろうと思っただけなんだけど。

すると、その時『八足の駿馬』は俺の頭をぼんと叩く。

俺は驚いて『八足の駿馬』を見ると、そいつが光ってアイテムになった。それが『スレイブニルの指輪』。

こうして、コイツは俺のものになった。

コイツの効果は至極簡単。SPDを二倍にし、Pスキル『思考加速』を付与するというもの。『思考加速』は今の俺のように一時的に体感速度を変更させるスキル。もはや、スピードを追求するためにする装備だ。

だが、俺にとっては・・・最強の装備だ。

俺はクリフの後ろから強襲。

どういふ反射神経をしているのか、相手は紙一重で避ける。

「ふざけてるな」

「どつちが、だ・・・！」

「どうする？降参するなら今のうちだ。残念な事に、今の俺には本気しか出せない」

「何が、本気だ。『音速の剣士』の癖に！」

「ま、そんなただの猫妖精ケットシーにアンタは負けるんだよ！」

HPバーはいつの間にか回復されている。
たぶん、俺が急いで後ろに戻った時に『アレ』を見て回復したんだろつ。

まずは、一撃！

俺はスキルを発動させる。

リスタ・ソニック！

俺のダガーが四回連続で攻撃。全部を首に叩き込み、相手のHPをまた五分の一ほど削る。それを見た相手は思い切り剣を振って俺を牽制。だが、そんな大振りな攻撃は俺には無意味だ。

俺はタイミングを見計らって更に踏み込む。俺は再びスキルを叩き込もうとする。

それにクリフはぎょっとした表情になり、すぐに後ろに跳ぶ。

その直後に俺のスキルが発動。さっきまで首のあった位置に攻撃のエフェクトがちる。

「何だ、クールタイムが無いのか!？」

「初期スキルで、コイツにはほとんどクールタイムが無いんだよ」

三秒。それが リスタ・ソニック のクールタイム。

俺にとって終わった瞬間にコレを使うのは慣れている。このスキルしか使っていないからな。

「なら、コレでどうだ!」

そう言うと、相手の武器が光り、次の瞬間には剣が二つ。

このゲームにある双剣か。

「なるほど、阿修羅は六つの腕に三つの顔を持つ。阿修羅の基本スキルが『換装』ってわけだ」

「この双剣スキルなら、お前にだって・・・！」

「奇遇だな」

そう言うと、俺は一枚のカードを取り出す。

そしてそれを握りつぶす。

そこに現れたのは、メリケンサックのようなものに、刃がついた武器。

『カタール』。正確にはジャマダハルと言う武器らしい。これが両手用の武器で、俺のメインウエポン。

「俺も、二刀流なんだ」

「・・・舐めているのか、スキルもなしに、俺を倒すって・・・！」

「知ってるか？ リスタ・ソニック、コレが俺の使う噂の初期スキル。で、この初期スキルは汎用型接近戦専用スキルなんだ」

「な、何がいたい・・・！」

「簡単に言うと、リスタ・ソニックは近接武器なら大抵使える！」

そして、俺はクリフに突撃。

クリフは慣れていないのか、四苦八苦しなから剣を振るつ。

俺はそんな隙だらけの攻撃にスキルを叩き込む。

リスタ・ソニックが発動し、高速八回攻撃が相手に炸裂。相手のHPがまたぐんと減る。

「どう、いうことだ!？」

「単純計算。武器の数が二つになった、だから攻撃も二倍」

相手のダメージは五分の二と少しを削った。

それに相手は急いで回復アイテムのカードを握りつぶす。

すると、HPバーが五分の一と少しだけ回復した。

のこりHPが五分の三と少し。

「く、くらえ!」

相手が何かのスキルを発動。

剣が紅蓮の炎に包まれ、俺に怒涛の連続攻撃を仕掛ける。

俺はそれを体をひねり、かわす。

「どうだ!手も、足も出ないだろ!」

「・・・」

「声も、出せないぐらいに余裕が無いのか!」

「・・・これは、たかがゲームだ」

「そ、それがどうした!」

「でもな、今はこのゲームから俺たちは出れない。ある意味では、

ココは俺たちにとつてもう一つの『現実』^{リアル}何だよ!それが、俺は関

係ない?何いってんだよ、ゲームは楽しむものなんだよ。お前みた

いなのに、この世界を^{ゲーム}ぶっ壊されてたまるかよ!」

そして、俺はすべての攻撃を避けきる。
相手は俺のHPバーがまったく減ってない事に驚き、距離をとる
うとする。

「させるか！」

俺は、相手に更に接近。
ゼロ距離ならぬ、最早マイナスの位置。

「お前には、俺の最強のスキルで、沈めてやる……」

「リスタ・ソニック じゃ、俺のHPは削りきれないぞ！」

そんなの、俺が一番よくわかっている。

このスキルは特殊だ。別に、Gスキルでもないのに、スキル名を
答えなくちゃいけない。

「……スレイプニル！」

リスタ・ソニック の派生スキル、EXスキル スレイプニル
。

汎用型近接戦闘専用スキル。これは俺が リスタ・ソニック を
熟練度を八〇〇まで上げてやっと出てきた。このスキルの特徴は、
威力は自分のSPDに依存されるということ。

スキルのアシストに身を任せ、俺の体が相手の体を蹴り上げる。
相手の体が宙に舞い、そして俺の追撃、いや、本番が始まる。
相手が空中から落ちてくるその瞬間、俺の体が動く。

閃光のような速さで落下中の相手に肉薄し、すれ違いざまに斬り
つける。

そしてターンして、またすれ違いざまに斬る。

それを延々と繰り返していく。しかも、このスキルは リスタ・ソニック の影響を受けているのか、攻撃回数も二倍になっている。合計、十六回。高速の十六連続攻撃スキル。

たぶん、俺がこのゲームで一番攻撃回数が多いスキルを持っていると思う。

そして、相手は驚愕の表情を張り付かせたまま、ドットに変換され、『地獄逝き』になった。

「はあ、なんか、平和つていいよな」

「だな」

俺とカイはいつものようにナゴヤの広場ベンチで日向ぼっこの中。

あのPK集団事件から数日。

いろいろとあったけど今は平和を取り戻した。

いや、イースが『オーティン戦争と死の神』に連絡して、しかも俺の名前出したもんだから速攻で逃げた。

だって、面倒なことじゃじゃん？

ハイパーブースト的なものを入れた、というか取り戻した俺に追いつけるヤツは誰もいなかった。

「でも、結局それはもらったんだな」

カイは俺の右の人差し指で光る指輪を見て言う。

「・・・まあ、元々は俺のだし？」

「・・・そうか、久しぶりにお前とできると思ったのになあ」

「イヤだよ。カイの相手は面倒すぎる」

なまじ、カイの攻撃を避けるということができないのが俺だけに。カイは俺の返答に笑う。

勝手にしてる。

絶対に今度 リスタ・ソニック で三枚におろしてから スレイプル で八つ裂きにしてやる。

「あ、あんた達こんなところにいたの？」

「だって、ロゼが集合場所も書かずにショートメール送ったから
だろ？」

「う・・・」

「まあ、返信しなかった俺達も悪いって。じゃ、行くか」

「おう。で、どこにあるんだ？」

「こっちよ」

俺達は先頭をあるくロゼについて行く。

そして、それは広場からそう遠くない場所にあった。
いや、むしろかなり目立っている。

・・・こんな良いところがあったのか。

俺達はその建物に入っていくと、そこにはつい最近で見慣れている姿。

「あ、皆さんーいらっしやいませー！」

「おう！で、景気はどう、ミサ？」

ミサが、エプロンを装備して建物の中に立っていた。

そう、今回の一件で『守護神』ガーディアンから報酬をくれたらしい。

それでおそらくは『戦争と死の神』オーディンが適当にあの腹黒『伊邪那美』イザナミにでも言っただらう。あの腹黒女は『伊邪那岐』イザナギを籠絡すれば簡単に説得できる。

「で、俺に恩を売ったつもりか」

「どうしたの？」

「いや、なんでもない。で、俺達はまだ聞いてないんだけどさ、
ココって何屋？」

「あ、はい。喫茶店にしました！」

そう言うと、ミサはカードを取り出して俺達に見せる。

『ITEM』と上に書かれ、真ん中あたりに『看板』と書かれている。

「私、皆さんが来てから出そうと思ってー！」

「よし、店の名前もわからないんじゃ、ココにこれないしな」

そう言つと、俺達は一旦外に出る。
そこでミサは両手で包み込むようにしてカードを握りつぶす。
すると、カードから光が放たれ、店の上に大きな板のようなもの
ができる。
そして、光が収まると、そこには『喫茶・ひだまり』と書かれて
いた。

「ん、いいんじゃないか？」

「のんびりできそうで、いいと思つわ」

「俺も、こつこつのは好きだな」

「ありがとうございます！」

「お？やってるね〜」

後から声をかけられてみると、そこには師匠とイス、そして
タマ。

俺はイスの姿を見た瞬間に逃げようとするが、横にいたロゼに
襟元を掴まれて逃げられなくなる。

「ロゼ、言いたいことはわかる、でも、俺の命とかその他もろも
ろの貞操とかも危険にさらされているんだ、マジで、俺どうすれば
いい……!?!?」

「……死ねば良いと思つわ」

死刑か。

……いや、それって意味無くない？

やっぱり、ココはミサに悪いけど逃げるしかと考えていると、俺はイースに手を掴まれた。

「俺の人生、オワタ!？」

「お願い、話を聞いて」

「できれば、俺の人生以外に」

「……何のこと？」

「……あれ？」

「……私、貴方を調教するのやめる」

「……いや、しないでよ」

「……だから、しない」

「……あれ？」

「……何で？」

「……必要が、なくなったから」

「……師匠、どういう意味でしょうか？俺には嫌な予感しかしないです」

「……いや、俺もわかんない。一応、『オーティン戦争と死の神』はしづしづだけど放置の方向にしてくれるって」

「お前、風邪でも引いてないか？」

俺は若干心配になり、イースの額に手を当てる。
・・・平熱、か？

相変わらず、ポーカーフェイスを崩さない。

「・・・でも、追いかける」

「何故に!？」

そこは、それもやめる雰囲気じゃないのか!？
俺は心の中で盛大に突っ込む。

「・・・お願い、一つ聞いてもらおう」

「・・・ちなみに、何？」

「・・・秘密？」

こええ!？

何されんの!？

言えないようなこと!？

「・・・でも、今日はいい」

そう言うと、イースはミサの方を向き、今日のお勧めは?と店のことを聞き始める。

ミサはイースに丁寧に対応しながらも結構フレンドリーな感じでお話してくれる。

まあ、他人行儀にされても俺達は困るだけだし。

「じゃ、皆さんこちらにどうぞー！」

そう言われて俺達はミサの喫茶店に入ってしまった。

後に、ミサの気さくな、それでいて健気な働きで『喫茶・ひだまり』は有名になっていった。

クエスト11・スレイブニル（後書き）

用語集

双剣・二振りの剣の装備。あくまで両手武器扱いで、剣を二本装備するのではない。

カタル・剣の持つ所、柄の部分がつばに垂直で、手に持つと拳の先に刃がくる。

正式な名前は『ジャマダハル』

EXスキル・ある条件下でしか習得することのできないスキル。Gスキルほどではないが、強力なものが多い。

クエスト12・神々の会合

Player - オーデイン

「では、そう言う事でよろしいですか？」

むかつく。

あたしは目の前の男を見てそう思った。

目の前にはニヤニヤ笑う女。

周りには呆れているのか疲れている表情の神名持ち達^{ゴッドネーム}。

ココは日本神話領の『^{ガーディアン}守護神』本部。今日は月に一回の各神話領の定期連絡会の日だ。

主にバグモンスターの発生やこの頃問題になっている事柄の対策をしている。

もちろん、領地争奪戦に関わることもココでしている。

「どうかしましたか？まさか、オーデインともあるう貴女が自身が無いとでも？」

ああ、今すぐコイツを地獄に送りたい。

思わず『^{ゲンゲール}神の投槍』をこの馬鹿に投げたくなくなるけど何とかガマンする。

うん、あたしはオトナだ。

「え、ええ、もちろんですよ。それに、それが領地争奪戦の規則^{エリア・ウォー}ルール
ですし」

たぶん、あたしの笑みは引きつったものになっていただろう。

後のほうにいる、『^{ロキ}悪戯の魔神』と『^{トール}轟雷の神』がはらはらしてみているだろうと言うことが安易に想像できる。

「では、そういうことで」

そう言うと、目の前の女、ケルト神話領裏のボスと言われる『魔^{モリ}女』が悠悠と日本神話領の会議室を出て行く。

すると、周りにいた人達が声をかけてくれた。

でも、あたしは大丈夫ですと一言だけ言って、早々に退室させてもらう。

そして、『悪戯^{ロキ}の魔神』と『轟雷^{トール}の神』の二人が声をかけてくる。

「……どうするんですか？」

「もう、既に後が無いぞ？」

そう、後が無い。

あたし達の神話領は数週間前に『悪戯^{ロキ}の魔神』の『神の鎖』^{グレイブニル}とあたし直属の『疾風騎士団』がとある事件で壊滅的な打撃を受ける。

精神的なショックが大きかったのか、復帰している人があまりいない。

更に、そこで二週間に一度の領地争奪戦^{エリア・ウォー}でこちらの領地が減らされてしまった。

「確実に、次で仕留められる。そうすると、貴女が……」

「大丈夫だ！俺の雷であのむかつく馬鹿を吹き飛ばす！」

「黙れ脳筋」

後の二人がコントを始めた。

いつものことだけど、今は正直な話、とてもうざい。

「ちょ!?!」

「こんなところでスキルはだめだ!!」

「・・・あれ?」

気づけば無意識にスキルを発動しようとしていた。
・・・危ない危ない。
でも、勝てるとしたら・・・。

「やっぱ、コレ使うしかないんだよね」

「やめてください。それを使えば相手はおるか、こちらも壊滅します」

「それを唯一可能にできるスピカに休暇を出したのも、貴女ですよ?」

そう、コレを何とかできそうなのが、元『八足の駿馬』で、あたしの親友のスピカだけ。

でも、頭の中にもう一人だけ浮かび上がる。

「・・・こうなったら、四の五の言ってられないか」

「ん?何かいい案でも思いついたか?」

「うん。『八足の駿馬』を使う」

「いや、だから『八足の駿馬』はアンタが自分で休暇を出したん

「だろ？」

『轟雷トールの神』が入ったとき、既にあの馬鹿はいなかった。だから、本当の『八足の駿馬スレイブニル』を知らないのも無理はないだろう。

「……まさか、あの猫を？」

「……猫？」

「と、言うわけでアンタ、さっさと連れてきて」

きよとんと首をかしげる『轟雷トールの神』には悪いけど話を進める。今はそれぐらい緊急事態だ。

「何故私なのですか!？」

「だって、アンタのところの『神の鎖グレイブニル』が仲いいみたいじゃない?」

「それを言うなら貴女のところのスピカに頼めばいいじゃないですか!」

「だって、あの子に休暇だしちゃったし」

『悪戯ロキの魔神』の癖にその実真面目なことで有名な彼に任せ、あたしは自分の神話領のホーム、『サツポロ』に戻っていった。

「いや、今日もいい天気だな」

後から追いかけていなければ、いつものように俺はDS女とそのペットに追いかけまわされていた。

既に日常的な光景と鳴ってしまい、今では『最強と最速（笑）どっちが勝つか!？』と言うような賭けが公式化されている。

俺は馬じゃないぞ!？

いや、忘れ去られた二つ名は馬だけだ。

「……待て、タマ二号」

「誰が待つか!」

俺は壁を蹴って壁を駆け上がる。

これは俺の持つレア防具『ケットシー・ブーツ長靴』についているレアスキルのおかげだ。

この防具には キヤット・ポ猫足 と言うスキルがついていて、どんなに足場が悪いところでも普通に歩け、更に高いところから落ちても確実に地面に降り立ってノーダメージで済ますと言うすばらしいものだ。走ることしかできない俺の唯一の武器と言ってもいいかもしれない。

「……今日は話がある」

「で、ついでに俺も捕まえてワケのわからん願いも聞いてもらおうと?本当にありがとございました」

「……バカ」

そう言つと、俺達はいつものように追いかけてつこを繰り広げる。そしてしばらくすると、うまく撒けたのか、後から追いかけてくる気配がなくなる。

おし、と思つて後を振り向いて見るとそこには誰もいない。

「おし、さすが俺」

「ああ、さすがだな」

「おう、何しろ、コレであの変態女の言つ、こと……」

あれ？ここに俺以外のヤツっているのか？

そう思つて回りを見渡し、Pスキルの『気配察知』を手動で操作してみるがどこにもいない。

「……そうか、ボイスチャットか」

「そんなものが無いことぐらい、お前はよく知っているだろう？」

その言葉と同時に俺の目の前の空間がゆがみ、そこから中性的な顔立ちの男が表れる。

何で男だつてわかつたか？

残念ながら俺の知り合いだったんだよ。

「……『悪戯ロキの魔神』か」

「ああ、久しぶりだなミッド。いや、こついつた方がいいか？

『八足スレイブニルの駿馬』」

また、面倒なことになりそうだ。

Player - ロゼ

「・・・遅いわね、あのダメネコ」

「そんな、可愛いそうなこと言わないで上げてくださいよ」

そんな私の言葉に苦笑しながら答えてくれたのは種族がエルフの少女。

つい最近この無所属領の男共の注目を集めつつある『喫茶ひだまり』の店主、ミサだ。

ミサがこのお店を手に入れてから、私達はこのお店によく集合してはお茶を楽しんだり、一緒にクエストやダンジョンに挑んだりしている。

今日、実はこのお店の定休日。だからミサと一緒に行くって約束をしていたんだけど・・・。

「遅いわね」

「確かに。たぶん、イースさん辺りに追いかけているんじゃないですか？」

「でも、遅すぎない？」

アイツなら、例えイースに追いかけていても十分以内に来る。でも、今日は既に三十分以上待たされている。

「カイもないし、ホントどうしたのか・・・」

すると、後からちりんちりと涼しげな音が響く。
「この扉につけられている来客の鈴の音だ。
ミッドのバカに文句を言っただけと振り向く。

「ミッド、何して、ん……の、よ？」

勢いがどんどんなくなってしまった。

「……だって、普通じゃありえないくらいに疲れている表情を
していたから。」

「ゴメン、今日は、俺、ダメかも……」

「み、ミッドさん！？ど、どうしたんですか！？」

「ストーカー二号に掴まりかけた」

「それは災難だったな」

「……あれ？」

ココに私達以外のお客っていたっけ？

いつの間にか私の隣には中性的な顔立ちの人がいる。

ぱつと見では男か女の区別がつかないけど、顔立ちはかなり整っ
ている。

でも、ミッドは何故か余計にげんなりする。

「……その、チート、何とかしろよ」

「何、ちよつとした悪戯だ。あ、注文はいいか？」

「え？あ、はい？」

ミサは中性的な顔立ちの人から注文を取るとすぐに調理スキルを使う。

そしてコーヒーを一杯淹れる。

「どつぞ。お口にあうといいんですけど・・・」

「・・・いや、おいしいよ」

「何、さりげなくこの場に溶け込んでいるだよ・・・」

そう言いながらミッドも私と同じカウンターの席につく。

「ねえ、ミッド・・・」

「コイツは『ファントム』。名前からしてわかるように男だ」

「よろしく」

その人、つまりファントムが私に一言挨拶をする。

「あ、どうも、このお店の店主のミサです」

「このダメネコの仲間のロゼよ」

「そうか、この『ダメネコ』ね」

「黙れ。つか、何でお前がここにいる？オーディンの差し金か？」

「オーディンとは・・・。お前と古い仲なんだろう？名前で呼べ

ばいいじゃないか」

「うるさい。俺は『グリーン・ユグドラシル』には戻らない」

さっきからやたらとミッドは噛み付くようにしてファントムに言う。

いい加減にしなさいと言おうとすると、またも鈴の音が聞こえる。扉を見ると、そこにはイースがいた。

ただ、いつものポーカーフェイスを驚愕の表情に染めていたけど。

「イース？どうしたの？」

「・・・何で、リーダーが？」

「やっぱり、リーダーってお前だったのか」

「そうに決まってるだろ？『フェンリル魔氷狼』は『ロキ悪戯の魔神』から生まれた三体の魔物の一体だぞ？」

「それを俺が知らないとも思っていたのか？」

「いや、平和ボケしたお前はどうか心配になったからな」

この二人、さっきから何を言ってるの？

と言うより、これじゃ、まるでこの人が・・・。

「あの、まるで貴方が『ロキ悪戯の魔神』だって言う風に聞こえるんですけど？」

「・・・いや、そうだが？」

「「.....」」

あっさりと事実を明かすファントム。いえ、『悪戯の神』^{ロキ}。そして、これが北欧神話領のナンバースリーと私達の出会いだつた。

Player・ミッド

「で、何でココまで来たんだよ」

「いや、本当はイースに言伝を頼んだんだが・・・まあ、何だ、イースを貶めるわけじゃないぞ？だが、イースでは少し無理があると思っただけだから」

「で、ココ最近の俺の行動パターンを見越し、その『悪戯の魔神』^{ロキ}の名前に恥じないくらいのトリックスター振りを見せてくれたってわけだ」

『悪戯の魔神』^{ロキ}、北欧神話にて登場する神。

悪戯が大好きで『トリックスター』と名高い。後にオーディンに追放され、『神々の黄昏』^{ラグナロク}を起こす張本人だ。

ただ、コレは絶対に起こさないな。ものすごく真面目ロキ（笑）と揶揄されるようなやつだし。

ちなみに、フェンリルの他にもヨルムンガンドとヘルという魔物も生み出している。

「理解が早くて助かる」

「こっちは全然助からないけどな」

俺はファントムとイースの二人を前にして言う。
たぶん、用件はあれだろう。

「俺はいやだぞ?」

「・・・そこを頼む」

端から見てたら最強に数えられるプレイヤーの一人が最弱のプレイヤーに頭を下げると言う不思議空間が出来上がっているようにしか見えないだろう。

でも、俺も一応は北欧神話領守護神ガーディアンの創設に関わる人物だったりする。と言うか、あのバカに巻き込まれただけでも言えるけどな。

とにかくそんなわけで地位的には結構高いと思う。それに、俺は元スレイプニル『八足の駿馬』だ。と言うことは限りなく『戦争と死の神』オーディンに近い存在ともいえる。

「ミッド、アンタはロキに対して上に出れるとかどういうヤツなのよ?」

「元スレイプニルだけど?それに、俺はあそこじゃラタトスクもやってたしな」

「ラタトスク?」

「覚えてないか?」

「ラタトスクは、『グリーン・ユグドラシル』の諜報部隊、まあ、言ってしまうえばスパイのようなものだ。敵と俺達に対しての、な」

「……あの、意味がわかりませんよ?」

「自分達にスパイしてどうすんのよ……」

ロゼとミサが困惑した表情で言う。

まあ、そうだろうな。

俺は説明する気がまったくないからファントムに丸投げする。
それを察したのか進んで説明。

「まあ、敵の情報を集めるのはもちろん。裏切り者の粛清もこいつ等がまとめてやっている」

「簡単に言うと、対人戦闘のプロ。PKKだな」

PKKは、PKをキルするプレイヤーのこと。

まあ、所詮はただのPKだ。

「で、あのバカは俺がEXスキルのスレイプニル 使えばどんな敵も楽勝だとか言いやがって、俺にPKとかPKKをさせてたんだよ!?!」

その後の贖罪クエストにどれだけ泣かされてきたことか……!
いや、PKKは赤くならないけど。

「……まさか、ミッドが『ガーディアン守護神』やめた理由って」

「たぶん、贖罪クエストが面倒になってきたんだろうな」

「……どこまで行ってもミッドさんはミッドさんなんですな」

「だが、今回はどうしてもお前の力が必要だ！」

態度を一転。

今までの静かな立ち振る舞いに熱が入ってきた。

コイツは真面目なロキと言われるぐらいだ。いつも冷静。しかし、敵を陥れるときは地のどん底までと言うえげつない信条を持っているが、ココまで熱くなることは滅多にない。

「……なあ、別に俺じゃなくても師匠を使えばいいだろう？」

領地^{エリア・ウオー}争奪戦なら、師匠たち率いる『^{エレメント・フォース}四色の戦乙女』の方が絶対に強い。

「……実は、オーディンを投入しなけりやまずい」

「……マジか」

それほどまでに、追い詰められているのか……。

「……どういふ状況だ？」

「ああ、実は俺達、『グリーン・ユグドラシル』はケルト神話領『ブラウン・フォレスト』に、『サッポロ』のすぐ近くまで進行されている」

そう言って俺に地図を見せてくる。

すると、既に三分の一ほどが茶色、つまり『ブラウン・フォレスト』に領地を取られている。

「いろいろとアウトじゃねえか!？」

「だから、オーディンを投入するって言っただろ?」

頭を抱え込む俺を二人の女子は不思議そうに眺めている。
そして、二人も地図を覗き込む。

「……これ、下手したら北欧神話領がなくなりませんか？」

「ああ、ついでにオーディンの貞操もな」

「おい、ちょっと待て、今無視できない単語が出てきたぞ?」

何で、領地争奪戦エリア・ウォーでアイツの貞操が危機に陥る?

「『モリガン』が『グリーン・ユグドラシル』を存続させる代わりにオーディンの身柄を要求した」

「あの、変態があああああああ!?!?!」

俺はお前なんか『クー・フリーン』といちゃついていたればいいんだよ!と頭の中で罵りつつファントムの襟首を掴む。

「それを先に言えよ!?!さっさと行くぞ!」

「……お前がそんなになるからオーディンに言うなって言われてただけだな」

「あっさり言ってるくせにんなコト言っな!」

俺はメニューを開き、何かいるものはないかと考える。

「アイテムはこっちで用意する。だから、できれば早く来て欲しい」

「わかった！なら行くぞ！」

そう言って俺とファントムは席を立ち、『サッポロ』に向かおうとする。

「ちょっと、待ちなさい！」

「何だよ、俺は忙しくなるんだけど!？」

「さっきからアンタは何を言ってるのよ？もう、ワケがわかんないんですけど?」

ロゼが俺にそついう傍ら、ミサもロゼの後でうんづんとうなずいている。

「・・・正直、説明がめんどくさい・・・!」

「なあ、こいつらもまとめて連れていっちゃダメか？」

「・・・まあ、お前の仲間なら大丈夫だろう。・・・たぶん」

こうして、俺達は北海道、北欧神話領守護神『グリーン・ユグドラシル』に行くことになった。

クエスト12・神々の会合（後書き）

用語集

悪戯ロキの魔神・非常に狡猾で、悪戯が大好きな神。『轟雷トールの神』と仲間がいいとされている。

神々ラグナロクの黄昏・追放されたロキが起こした戦争。熾烈を極めたとされている。

クエスト13・猫妖精とオーデン

Player - ミッド

このゲームにおいて、長距離の移動は全て駅で行える。

まあ、要するに現実の移動とそんなに変わらない。

ほんの少し遠くのダンジョンに行きたければバスを使って、県をまたぐようなら電車を使う。

そしてもっと遠くに行くなら新幹線。

あまりに普通すぎて面白くない。さすがに外観はこの世界のイメージを崩さないようにそれっぽいフォルムだけだな……。

あくまでバスとか言ってるのは見た目が似てるっただけだ。正式名称があった気がするけど忘れた。

「……後、十分ぐらいでつく。降りる準備をしておけ」

「わかってるって」

「ねえねえ、北欧神話領ってどんなところなのよ？」

「私も楽しみです！」

ついできた女子二人はわくわくと言う言葉を顔に貼り付けて俺に聞いてくる。

「見た方が早いんだけどな……」

「まあ、簡単に言えばド田舎か？」

まあそうだな。

ナゴヤは雑然としたと言うか、なんかゴチャゴチャしてるのに対してサツポロは周りを見渡せば木ばかりだしな。

二人はどんなところだろうと言い合いながら終止ニコニコしていた。

そして、俺達はサツポロに到着。

駅から出ると、目の前に広がるのは緑で一杯の街。

建物や道路、いろいろなところに木々が生えていて、幻想的な雰囲気醸し出している。

そして、一番目を引くものが・・・。

「なにあれ、大きいわね」

「そ、そうですね」

遠くに見える大きな木。

「あれが、サツポロのど真ん中にある北欧神話領の守護神支部だ。ガイディアンまあ、予想はつくだろうけど、アレがこのゲームでの『世界樹』だ。ユゲドラシル」

ココの守護神支部は『世界樹』ユゲドラシルの中にある。

木の根元に入り口があり、そこから中に入ることができる。

「あれ、実は最初ダンジョンだったんだよな」

「え？そんなの？」

「そうそう。で、俺達が攻略すると、あの中からモンスターがいなくなつて、普通に住めるようになった。で、オーディンが誕生」

「そして、日本神話領のやつ等がそれをかぎつけて北欧神話領の

守護神を結成し、オーデインがその代表になったと言うわけさ」

元々、守護神を最初に名乗り始めたのは日本神話領の『八百万の神々』って言うギルド。

そいつらがココを暮らしやすいようにいろいろとしたらしい。

まあ、もちろんそれに反発するやつがいたが、そこは既に神名を持っていた腹黒『伊邪那美』と現代に蘇った侍もどきの『伊邪那岐』が説得して解決した。

「んなことはいいから、さっさと入ろう」

そんな話をしていると、いつの間にか『ユグドラシル』の前に到着。俺は懐かしいなと言う思いに浸りつつも中に入っていく。中に入っていくと、そこにはロビーがある。

木の中なのに普通に会社とかのビルにありそうだ。俺は勝手知ったるといった表情で奥に進もうとする。

「あ、すみません！困ります！」

そついうと俺は肩を掴まれた。

何だと思いつつ後を振り返ると結構可愛い女の子がいた。

・・・受付嬢か。いつの間にかそんなもんまで作りやがって。

「何？」

「いえ、ココは守護神の『グリーン・ユグドラシル』です」

「・・・知ってるけど？」

「では、ご用件のほうをお願いします」

「……用があるのはそっちだと思っただけだな？」

「……貴方、何を言ってるんですか？」

何故か受付嬢が俺を可愛そうなものを見る目で見てきた。

……俺は本当のことしか言っていないぞ！？

俺はとりあえず誤解を解くためにもファントムを探すが……。

「へ〜。中ってこんな風なんですね」

「ああ。結構綺麗だろ？」

「確かに、木の中とは思えないです」

女子二人といちゃついていた。

……後で三枚におろした後に八つ裂きだ。

「……オーデインに伝える。『スレイブニル八足の駿馬』が戻ってきたってな」

「あの、頭大丈夫ですか？」

「頼むから信じてくれよ！？」

俺が逆の立場でも無理だと思いつつもどうにかして頼んでみる。
すると、俺の後ろから誰かがやってくる気配がする。

「どうかしたのか？」

「あ、トールさん！」

トール？

そりやまた、北欧神話領で雷の神様と同じ名前のキャラに会うとは思わなかった。

そう思いつつ振り替える。

そこには小柄な少年がいた。

おそらく、こいつがトールとか言うヤツなんだろう。

でも、何で敬語？明らかにこいつの方が年下っぽいぞ？

「聞いてください！この変な人が自分が『スレイプニル』だって言うんですよ！」スレイプニル』はもう無くなった役職なのに・・・

「

「ちょっと待て、今なんて言った!？」

さっき、聞き捨てならない単語が聞こえたぞ!？」

「ですから、元『スレイプニル』の方は、今『風の戦乙女』と役職シルフ・ヴァルキユリアが変更になって、実質『スレイプニル』と言う役職はかなり前からなくなっていますよ?」

「あの馬鹿二人は何してんだ!？」

「さっきからなんですか!？しかも、馬鹿二人って!？まさか、オーディンさんとシルフさんのことを言ってるんですか!？」

受付のヤツが騒ぐが俺の耳にはそんな事は入っていなかった。

『スレイプニル』が無い？

あいつら、俺に『スレイプニル』をやらせるためにずっと欠番に

していたのか？

「俺はもうやる気がねえってのに・・・」

「お前、ココの創設者に関わる神名持ちレベルの二人を馬鹿呼ばわりとはいい度胸だな」

残念なことに俺もその一人だ。

しかも、ポジション的にはオーデインのすぐ下。

「お前みたいな無名プレイヤーに言われてもな・・・」

俺が正直な感想を言うと、ちびっ子と受付の顔が引きつる。

「・・・お前、俺を知らないのか？」

「・・・知らない」

「そ、そんなことでよくココを突破しようと思いましたがね？」

・・・何だか、俺も嫌な予感がしてきた。

でも、俺の時は『轟雷トールの神』なんていなかったよな？

いや、こんだけ時間がたったんだし、まさか、そろったのか？

「・・・なあ、聞いてもいいか？」

「・・・いいけど？」

「お前、キャラネームは？」

「ライトだ」

「あれ？でもさっきツールって・・・」

「俺は、ココの神名持ちの一人、『トル轟雷の神』だ」

「・・・ついにそろったのかよ」

「お前、さっきから何をわけのわからないことを言ってる!？」

俺はファントムに助けを頼もうとさっきまでファントムのいたところを見る。

だが、既にいない。

どこに行ったのかと周りを見てみると・・・。

「コレに触れて行き先を言えば大丈夫だから」

「はい」

「わかりました」

そう言っって二人の女子と転移結晶と呼ばれるものでオーデインのところに行く姿が見えた。

いい性格してやがる、あの・・・。

「馬鹿ロキがああああああああ!？」

「いい加減にしろ!先輩まで馬鹿にしゃがって・・・!」

「やっば、そうなんだな!??お前、絶対あのファントムと呼ばれ

てココに来ただろ!？」

「な、何でそれを!？」

やっぱりか、そうかそうか……。俺はゆらりと転移結晶の法へ向かう。

「ヤツを、三枚におろしてから八つ裂きにする……。!」

「させるか、馬鹿!」

後から俺を止めようとライトが走ってくる。それを俺は回避。ライトの後に立つ。

「悪いね。今の俺、機嫌が悪いんだ。邪魔するなら、喜んでPVを受けられるけど?」

周りに居合わせたやつ等がものすごく驚いた表情になる。それはライトも同じで、ライトは俺がいつの間にか後ろに来たことに驚いたのか、慌てて後ろを向く。

「……。お前、何者だ?」

「ただの、ケットシー猫妖精だ」

Player - オーディン

「……?」

あたしは自分でもわからないけど、何故かしていた書類仕事の手を止めた。

そして、それと同時に部屋をノックする音。

あたしは一言だけどろぞろと言う。すると、そこからは無所属領に
いるはずのロキがいた。

「あら?ミッドはどうしたの?」

「いますよ。下に」

「……何で連れてこなかったの、って聞きたいところだけどラ
イトもないわね」

この二人はいつもよくいる。

特にライトは先輩先輩とこいつの後ろをついていって
なら、おそらくは……。

「アンタ、いい性格してるわ……トム?」

「だから、トムって呼ぶのはやめろよ。ミッドはまだしてないぞ
」?

「いいじゃない。どうせあたし達しか使わないんだし」

そういつとあたしは椅子から立ち、部屋の外へ行く。

その後にもトムもついてくる。

「どこに行く?……って、聞くまでも無いか」

「もちろん、アンタがけしかけたPVPを見に行くに決まってるじゃない」

そういうと、あたしとトムは転移結晶に触れ、一番下のフロアに転移した。

Player・ミッド

「どうする、『轟雷トールの神』？お前が勝てば俺はココを出て行く。でもな、勝ったらあの真面目ロキって言うクソ野郎を狩りに行く」

「・・・お前に先輩がどこうできるとは思わないけどいいぜ」

そういうとライトは俺にPVPを申し込む。

俺はすぐにOKボタンにタッチしてそれを受ける。

すると、広いロビーの一部から人がいなくなり、決闘可能エリアの外に弾き出される。

決闘可能なエリアは大体半径十メートルほどの円だ。まあ、時と場合によっては設定で変更もできるけどな。

「俺が、お前みたいな無名プレイヤーに負けるわけが無い」

「人のセリフをパクんなよ」

ライトはカードを取り出すと、それを握りつぶす。

すると、カードはライトの右手の中に集まり、大きくなる。そして、それは槌の形を取り始める。

「……それが、神器『ミヨルニル』か？」

現れたのは、ライトほどの身長もある大きな槌。

持ち運びに困るからカードにして持っているんだろう。

「よく知ってるな。『ツール・ハンマー』の方がわりと多いのにな」

「御託はいいから、Gスキルでも何でもやってこい」

「お前に、Gスキルなんて使う必要は無いね。お前こそ、最初から本気で来ないと、一瞬で勝負がつくぜ？」

「そうだな、俺は弱いから、最初から本気で行くか」

俺もまたカードを取り出す。

既に『ケットシー・ブーツ長靴』は履いている。後はマントと帽子、カタールを装備するだけだ。

「……まるで、『長靴を履いた猫』だな」

「そつちから来いよ。ま、どつちにしろお前の攻撃は当たらないけどな」

「言ってる！」

そして、ライトが踏み込み、攻撃を仕掛けてくる。

俺は『スレイプニルの指輪』の力をオンにする。

「……『時よ、止まれ』」

指輪のPスキルの力を起動する場合、このフレーズを言う必要がある。

まあ装備してる時、ずっと景色がゆっくり動いたりしていたら気持ち悪いしな。そのための配慮だろうと思う。

ゆっくりとした動きになったライトの槌による攻撃を全て紙一重で避ける。

いつの間にか大勢のプレイヤーが俺達の周りにいて、ライトを応援している。

完全にアウエーな空気だ。

「何だ、避けるので精一杯か!？」

ライトは自分の優位を感じているのか、ずいぶんと余裕そうだ。

・・・ここで天狗の鼻を折っておくのも悪くは無いだろうと思いつつ攻撃を避ける。

だが、こうしてずっと避けているのも芸が無い。

まあ、スキルを使ってやるか。

俺は リスタ・ソニック を使う。

光速で八連続の攻撃が放たれる。たぶん周りにはいつの間にかライトのHPバーが消失したようにしか見えなかっただろう。

ライトもそれに気づいて驚愕の表情を浮かべる。

「・・・何をした？」

「さあな? まあ、わかることと言えば、無名プレイヤーに神名持ちの『轟雷トールの神』のHPバーがいつの間にか削られてたってコトか?」

俺はそんな軽口を叩いておく。

これで相手が乗ってくれば楽なんだっただけで、どうも相手は以外に冷静な人物だったらしい。

俺の動きに警戒をし始めた。

「……そつちから来ないなら、俺から行くぞ？」

俺はその言葉を置き去りにでもするみたいに駆ける。

次の瞬間にはライトの目の前。

瞬間移動したみたいにしが見えない俺に対し、驚愕の表情を向ける。

「……スレイ」

「はい、終了！」

俺は聞きなれた声にスキルの発動を止める。

声の方向を見ると、そこには一人の少女がいた。

「やっと、出てきたか。このアホオーディン。わざわざこっちから気たのに、この歓迎の仕方はないんじゃないかねえの？」

周りのギャラリィが『お前、オーディンになんてコトを！？』とか言ってるけど俺は無視した。

だが、オーディンはそれを手をさっと上げるだけで沈める。

「やっと来てくれたわね、あたしのスレイプニル」

「誰があたしのスレイプニルだ、オーディン。……いや、アスカ」

これが、俺と久しぶりに会ったオーディンことアスカの最低な再

会
だ
っ
た。
。

クエスト13・猫妖精とオーデイン（後書き）

用語集

^{トール}轟雷の神・雷、農耕を司る神。神器『ミヨルニル』を所持し、豪胆な神であったとされる。

クエスト14・猫妖精たちの参戦

Player - ミッド

目の前には左目に眼帯、頭の横からちょこんと出ている髪、ツイサイドアップとでも言うのかな、そんな感じの幼さの残る少女。

だが、俺に向けて少女らしからぬ不適な笑みを浮かべている。

「な、んで、お前がオーデインのプレイヤーネームを？」

ライトは俺がアスカのネームを知っていたことに驚いている。

「知り合いだからに決まってるだろ・・・」

そういうと、俺はPVPの中止を選択し、この事態を引き起こした張本人がいなかさっと調べる。

・・・だが、おそらくは。

「そこだあああああああ！！」

何かしらの手ごたえ。まあ、予想通り。

こいつはいつも条件反射的に、俺から見てアスカの右隣に立つ癖がある。

たぶん、こいつが眼帯のアクセサリをしているからだろうと思う。

死角を埋めるためにあいつはココによく立つ。まあ、それは俺やスピカも一緒だったけどな。

周りのヤツ等はいきなり現れたロキに驚きの表情を浮かべる。

いや、正確にはこいつの位置を性格に当てた俺か？周りが何故ロキの場所を・・・！とかそんな感じで驚いている。

「一撃じゃ無理か……!?!」

「ちょ、ミッド君!? 師匠になんてコトをしてるのかな?」

……目の前に現れたのは師匠。

「あれ? ……とでも言うと思ったか、コノヤロー!」

「……いいじゃないか、ちょっとした戯れだ」

師匠の声がファントム、もう面倒だからトムでいいか。

とにかく、さっきまで普通に師匠の声だったのにトムの声で言われる。

コレがロキの特殊性。

ロキは『悪戯の神』。だが、スキルがまさにそれを表している。

まず、ロキの固有スキルの『かくれんぼ』と『なりすまし』。まあ、名前からしてわかるように『かくれんぼ』は敵から見つからなくなるスキル。例え俺みたいに『気配察知』のスキルとかを使っても反応しないって言うえげつない効果を持ち、さらに『なりすまし』は一度触れて、登録すれば何回でもその人に成りすますることができ。しかも、PT組んでキャラデータを見てもまんまその人。装備も何もかもを真似するから見分けがつかない。さすがにスキルまでコピーはできないけどな。

「大体、お前は甘いんだよ。師匠が大勢の前でその装備出るわけが無いだろ」

師匠の装備は少しばかり目のやり場に困るもの。

本人もそれを気にしているようで、大体この姿を見たヤツ等は師

匠が恥ずかしさのあまり瞬殺されている。

「俺も、まだまだ修行不足だな……。だがなミッド、この言葉を覚えておけ」

このバカトムは何を言うかと俺はカタールにギリギリと力を込める。

「『罫は二重に張れ』ってことだ」

「既に、二つ突破したぞ！」

「それともう一つ。『策士の言葉は信じるな』」

俺がどういふことか聞きだそうとしたらユグドラシルのエントランスの入り口の扉がバンと音を立てて開け放たれる。

俺は嫌な予感がしつつも後を見ると……。

「……し、しょう?。」

「……ミッド君」

俺はまさかロキが化けているんじゃないかと思う。

だが、現実はその張本人を俺が切り捨てようとしている。

……じゃあ、本物?

「……ミッド君」

「……な、何でしょう、お師匠様?」

「・・・大馬鹿ヤロー!!」

俺は何故か師匠のストレートをモロに受けた。
それは、妙に腰の入ったプロのような一撃だった。

どうも師匠が怒ったのは、自分がどんなに誘っても戻らなかった
くせに、ロキに言われてほいほいついて行ったのが気に食わなかつ
たらしい。

俺は断じてココに戻ってないことを伝えて、誤解を解いた。

「ほづほづ、そういうことが」

「そういうこと。まあ、コレで完全に『八足の駿馬』^{スレイプニル}が集まった
わけなんだけど・・・」

俺はちらりと『轟雷の神』^{トール}を見る。

そこには、ちびっこい少年がむすっとした表情で俺を見ている。
どうも、俺が『スレイプニル』^{スレイプニル}なのをどうしても信じられないら
しい。まあ、確かに守護神^{ガーディアアン}抜けたヤツが今更戻ってくるとか、面白
くはないか。

「で、ココには新顔の『トール』も含めて久しぶりに全員が集ま
ったわけだ」

「そうそう。いやあ、ホントに久しぶりね」

そういうのは、褐色の肌をし、更には眼帯をしている少々エキセントリックな少女、というか『オーディン戦争と死の神』である俺の知り合いのアスカがいた。ちなみに名前の由来は飛ぶ鳥散らす勢いの飛鳥。鳥どころか、このゲームのプレイヤー全般を散らしている。

「で、その二人は？まさか、彼女？二股とかサイテー」

「勝手に話を進めるな。こいつとコレは友人のミサと破戒僧だ」

「誰が破戒僧よ！？」

「お前以外に誰がいるんだよ！？」

「ミサに謝りなさいよ！」

「だからお前だって言ってるんだろ！？」

ギャーギャー言い出した俺達に変わって、師匠がロゼのことを紹介してくれる。

すると、何故かトムが眉間にしわを寄せるが、すぐに元に戻る。

「……でも、本当にこいつが『スレイプニル』何ですか？」

「ええ、そうよ。それに、ライトもやられそうだったでしょ？」

「アレは……その……油断していただけです」

「いや、それダメだろ？」

俺はもっともなことを言ったはずなのに、何故かライトに睨まれ

た。

・・・何で？

「まだまだ修行不足ね」。このゲームには、まだまださんの神名持ちがいるんだから。それこそ、準神名持ちでも『アーサー王』は本当に強いでしょ？」

「うっ・・・」

「どうも、こいつはあの『アーサー王』にやられたことがあるらしい。」

『アーサー王』はケルト神話領所属のプレイヤーだ。

他の神名持ちのように、ある一点において特化しているのではなく、オールマイティな強さが売りだ。ただ、剣の性能が明らかに神器レベルだつてことで普通にチート。

更に厄介なのが、この『アーサー王』率いる『ブラウン・フォレスト』所属のギルド『円卓騎士団』テンプルナイト。名前からしてわかるように、十二人からなる剣士系スキルのトッププレイヤー集団だ。

どうせ、こいつ等も前線に出てくるだろう。

「つか、『アーサー王』に負けるのはまだまだだな。あんな、『木剣・エクスカリ棒』の力を見せてやる！つてふざけてるやつだぞ？」

「いや、ヤツはついに二本目を手に入れた」

「ドンマイ」

既に『アーサー王』は最強の名をほしいままにしているらしい。

「無理でしょ！？あの回復量はハンパないですよ！？」

「まあ、俺も言いたいことはわかる」

あいつは、普通にケルト神話最強だと俺も思う。というか、Pスキルがえげつなさすぎる。

「でも、俺が思うに『飛翔ミヨルニルの雷槌』もかなり強そうだとは思っただけどな」

そう言つと、ライトは急に照れ出した。

・・・案外単純だな。

「むしろ、不意打ち以外に脳のないお前はどうかんだよ？」

「俺は昔とあまり変わってないぞ？」

つまり、参謀的ポジションか。

あるいは『ラタトスク』を率いての奇襲大作戦要員で、一番問題なのが・・・。

「何もできない、むしろすんなの大将」

「ちょっと、それどういう意味よ？」

アスカ、とある事情でGスキルを使えない神名持ち。

『神ケンケンの投槍』のGスキルは非常に強力だが、いろいろとマズい。

まあ、それを解決するために俺が呼ばれたわけだが。

そこで師匠が言う。

「どっせ、俺もミッド君とやるんでしょ？でも、それだと問題あるよ。」

「……え？なんか問題ってありましたっけ？」

「ある。俺がミッド君の全力について行けない」

「……お前、あれからもずっとSPD極振りか」

「いいだろ、別に。俺がどのステータスにポイント振ろうが……」

「まあ、そのおかげでイスさんと毎日追いかけてっここですもんね」

「このダメネコはそれ以外にないし。てか、何でそれが問題になるのよ？」

「簡単だ。俺達が今話している作戦はな、俺と師匠、そしてアスカが敵陣のど真ん中に入り込むって作戦だからな」

「「「「」」」」

「トム、何でライトもびっくりしてる？」

「教えてなかったからな」

「教えてけよ。当時、領地争奪戦^{エリア・ウォー}限定で最強を誇っていたんだから。そこで、トムは俺の心の声が聞こえたかのように説明を始める。

「一応作戦名は『オーデインの行軍』。ただし、周りのプレイヤ

「Iからは『ICBM』だとか、『核弾頭』、『サブライト・ビーム対地衛星攻撃』というのが有名だったらしいけどな」

「あの、どうして作戦名に対してそんな・・・」

「言いたいことはわかる。けど、見たら納得できる」

もう、嫌というほどに。

「もう、こいつに彼氏の一人もできないのはアレのせいだと俺は思ってる」

「アンタに言われたくないわよ。ヘタレのくせに、甲斐性もないからモテないのよ」

「うっさい。彼氏作ってから言え」

「あんたこそ」

「本当に、オーディンと仲いいんですね」

「まあね。二人は結構古い付き合いらしいし」

「あのヘタレに何で？」

「とにかく！トム、説明だ！」

「・・・お前が話の腰を折ったんだろっ」

トムはあきれながらも説明を再開する。

「作戦はいたって簡単だ。アスカがミッドに騎乗。ミッドはダッシュ。スピカが敵の露払い。殲滅。終了。簡単だろう?」

「先輩、簡単すぎてわかりません」

「でも、それ以上に説明のしようがないよな?しかも、騎乗とか言うな。ただ運ぶだけだ」

「そうだな、説明のしようがない。それに別にいいだろう?内容はそんなに変わらない」

「要するに、ミッドがリアル『スレイプニル』をするってことよね?」

「ああ……。たぶん、そんな感じ」

まあ、『スレイプニル』はオーディンの愛馬。これは要するにそれに騎乗して相手の陣に切り込む作戦だからな。

師匠はできるだけ俺とアスカに攻撃が来ないように相手を適度に倒していくこと。

「でも、今のミッド君なら必要ないと思うんだけどね」

「師匠はそう言うけど、俺もかなり久しぶりだし……」

「それに、物事にはあるゆる可能性が存在する。そう言うわけで保険は必要だ」

参謀っぽい役割のトムが一言そう言うと、師匠は何も言わない。

「じゃ、話はまとまったし・・・とりあえず、今日は遠路はるばる来てもらったわけだから休んでなさいよ。明日から本格的に作戦決めるわ」

「そう言えば、この『スレイプニル』についていた女子はどうするんですか？」

何故かライトは俺に対してもものすごく冷たい態度で接してくる。まあ、確かにこの二人はどうするんだろう？

「・・・せつかくだし、『エリア・ウォー領地争奪戦』に参加してく？」

「え？い、いいんですか！？そ、そんな、私達が入っても・・・！？」

「・・・確かに、私達にできることはほとんどないわね」

「ロゼもやっと俺のすごさがわかってきたか」

「死んでくれる？」

「サーセン、調子に乗りました・・・」

「いやいや、二人とも結構すごいよね？ミサちゃんは弓でDEX高いから普通に戦力にできるし、ロゼちゃんに関しては、数少ない回復魔法極めている子だよ？」

「本当に？しかも、回復魔法は・・・」

何回も言った気がするけど、このゲームでは回復魔法を極めているやつが少ない。

理由としては、たぶん地味だし、何より最初じゃ使う機会があまりないからだろう。そして、敵が強くなってきて回復魔法を覚えようとしても、最初に覚えるのは初心者用の回復スキル。簡単に言うとう回復がおっつかない状況に陥って、それならポジションで十分じゃんってことになるんだと思う。

「……そういや、ロゼって蘇生魔法覚えたのか？」

「ああ、あれね。あの騒ぎで覚えたわ」

「……確かに、そこまで極めているのは珍しいわね。今のところ、みんなはやつとがんばって上げ始めたから」

そうなのか。

ロゼはやたらと回復魔法の熟練度が上がっていたけど、まさかそこまでとは……。

「じゃ、二人は一時的にこっちの味方つと。大丈夫よね」

「もちろん。他の守護神ガーディアンでも、たまに無所属領のソロプレイヤーを一時的に雇うことがあるからな」

「マジで？そんな仕事してるの？」

「……知らないのか？傭兵ギルド『一匹狼』や『渡り鳥』といったところは有名だぞ？」

全然知らなかった。

俺はここを出てから本当に一人だったからな。
途中でロゼに、そしてカイに会ったけど。あ、そして最後にミサ
に会ったわ。

「・・・わたし、忘れてる」

「意図的に忘れたん・・・すみません、急用思い出しまし、った
！」

唐突に聞こえた声に俺は迷わず逃げた。

何でここにいるとも思ったが、もともと、こいつの所属ギルドみ
たいなものだった。

「・・・待て、はな」

「無理だ！」

俺は猛ダツシュでその場を離脱した。

Player・ロゼ

ミッドはこの部屋に現われたイースの声に反応して、いきなり逃
げ出した。

・・・失礼するわね。

「ごめんなさい、うちのダメネコが・・・」

「うちのダメネコ、ね・・・」

一瞬、オーディン　アスカさんは遠い目をして言う。
そして、元の調子に戻って入ってきたイースに向く。

「で、どうしたの？確か、ミッドを追い回す任務だったわよね？」

「追い回すなんて、そんな・・・」

明らかにストーカー的な発想の任務にミサが突っ込む。
でも、確かにやっていることはストーカーと変わらない。

「・・・ま、アンタも大変ね」

「タマ二号？」

「ミッドのことです。タマに続く後継者にしようとしています」
フロントムさんがアスカさんにそう説明すると納得したような顔になる。

「・・・ま、アンタも大変ね」

「・・・そんなことない」

イースは一言だけ言うと、もうここには用はないと言わんばかりにさっさと部屋を出て行く。

「・・・あの、イースさんは守護神のメンバーですよガーディアンね？」

「そうだが、それがどうした？」

「いや、上司に素っ気なさすぎじゃ?」

私がそう指摘すると、目の前の北欧神話ビッグスリーは互いの顔を見つめて、視線で何かしらのやり取り。

「」「普通?」「」

「いやいやいや!?!?」

それはおかしい。

「ちよつとスピカさん、絶対おかしいでしょ!?!?」

「ん?そつ?」

「……あの、イースさんは、私達といるときはもっと、その・
・ハジケてますよね?」

「そう!それで、ミッド相手にいつもギリギリな下ネタ使っ!」

「そうです!そしてお仕置きされるんです!」

ミサと確認が取れた。

少なくとも、これが私達が最初に出会った残念な守護神ガーディアンの姿だ。
断じて、寡黙で、颯爽とした、クールビューティーじゃない。

それを聞いて何故か驚きの表情を浮かべる三人に、スピカさんが
言っ。

「まあ、正確にはミッド君という時だけですけどね」

「……………ああ、なるほど。結構マジなんだ」

アスカさんは心当たりがあるのか、自分ひとりだけで納得してしまっ。

他の二人を見てみると、わかっているのはファントムさんだけみたいだ。

「よくわかった。イースのこと、頼む」

「……………はい？」

私とミサは、何故かファントムさんから娘の友達を頼む的なノリでそう言われた。

でも、何を頼まれたの？

それが顔に出ていたのか、ファントムさんは続けて言う。

「いや、そんなに気にしなくてもいい。ただ、普通に接してくれればな」

「はあ？」

「わかりました？」

こうして、私達の初めての遠征一日目は終了した。

クエスト15・猫妖精たちの準備

Player - ミッド

久しぶりにアスカ達と再開したその翌日、俺達はアスカにライト、そして師匠というとてもなく強力な力と一緒カミサマに近くのダンジョンに向かった。

トムはどうせ戦闘力はないからということユゲドラシルで世界樹で待機だ。

「……で、初っ端からここかよ」

「そうよ、懐かしいでしょ?」

「いや、近くに行くとは聞いてけどな……」

「あの、ここどこがダンジョンなんですか?」

「……ここ、世界樹よね?」

そう、俺達が来たのは世界樹だ。

正確にはその一番上の階層。もっと言えば、世界樹のとてつもなく太い枝の上だ。

「ここは、元々はダンジョンだったのよ」

そう、ここは元々、九つの階層を持つダンジョンだった。

昔、俺とアスカに師匠、そしてトムは四人でここに挑戦した。

そして一番上の階層で見つけたのが干からびたミイラ。ただし、首をつり、見るからに神々しい槍に心臓のあたりをぐっさりと刺されていた。

明らかにフラグな感じがしないでもなかったが、アスカがさりげなく抜いたことで見事にフラグを回収してくれた。

突然ミイラが動きだし、モンスターの名前が『墮ちた戦の神』^{ハンゲマン}と表示された。そして、唐突にクエストウィンドウが開いて勝手にクエストが受注され、見てみると内容からして明らかに『神の試練』^{タスケ}だった。

「『神の試練』？」

「ああ、簡単に言うと大体が『神器』をゲットするためのクエストだ」

「そうそう。で、アスカちゃんはもうすっごい喜んじゃって、備えもないのに全員で突撃になっちゃったんだよね」

そうなる前に俺は気付くべきだった。

オーディンはルーン文字の秘密を知るために、首をつって自分を槍で貫き、自分自身に捧げたという話がある。その時は、紐が切れたために助かったらしいから、たぶんあれは助からなかったというシチュエーションだと思う。そしてこの光景が大アルカナの『刑死』^{ハンゲ}のモデルらしい。

「さすが、オーディン……」

「そんな、ノリだけで……」

ミサとロゼ、そしてライトもこのことは聞いたことがなかったのか、あきれた表情だ。

「まあ、そう言うわけで当時すでに『ロキ』からGスキルを貰っ

てたトムと、^{マンツーマン} 一対一だけは スレイプニル で何とかなる俺が死ぬ
気で戦った」

「失礼な、俺はかわいい弟子のために一緒に頑張ったはず！」

過剰なスキンシップで抱きつこうとした師匠の顔を手でつかみ、
止める。

師匠がもごもごと『これが反抗期……!』と何やら戦慄してい
るが無視する。

「そして、特に何もしていないアスカが見事オーディンに就職。
よかったね、これで将来も安心」

「わかったから、さっさと行くわよ。とりあえず、あたし達は手
を出さないからアンタ達でがんばりなさい」

「「むしろ手伝うな」」

俺と師匠がハモったところでダンジョンに突入した。

「む、無理ですー!?!」

「し、死ぬー!?!」

「……なさけないな、お前ら」

目の前にはザコモンスター、『死せる英雄の魂』^{エインヘリアル}。これは、主に剣を使って攻撃してくる亡霊系のモンスター。

見た目は、透明人間が全身甲冑の鎧を着ている感じだが、その攻撃力はすさまじい。下手をすれば、上級でも致命的なダメージを受けかねない。

「……まあ、戦闘に関してはわかったわ」

「だから言っただけ。こいつ等はいいいところ、中堅のプレイヤー。ミサに関しては『出稼ぎ』で少しは攻撃スキルを持つてるけど、そこまでじゃない」

ロゼは攻撃よりも、補助系のスキルが多い。

だから二人だけで戦わせるのには無理があるって言ったのに……。

「……いや、回復職が少ないから扱いがあまり分かってないのか？」

「まあ、二人とも後方支援だな。そっぴやロゼ、あのすっごい範囲の広い回復は？」

「……ああ、あれね。意味ないけどするの？」

「自分のHP見て言え」

既にロゼとミサのHPバーは半分ほどだ。

それに気付かないほど戦闘に集中していたのか、ロゼは自分のHP残量を見て驚きの表情を見せる。

そして、ロゼは両手で祈るようなポーズをとって詠唱を行う。

「 神楽舞の陣 」

ロゼがスキルの名前を言ったその瞬間、ロゼを中心に光のエフェクトが弾け、周りにぶわっと広がる。

すると、見る見るうちにロゼとミサのHPが回復していく。

「あ、ありがとうございます」

「いいのよ」

「……にしても、そのスキルの範囲が明らかにでかすぎるだろ」

「って、ホントにデカすぎよ!?!」

いきなり、アスカがキレ出した。

俺達はその声に驚きつつも聞き返してみる。

「……どういうことだ?」

「あれ、明らかに『戦略用スキル』じゃない!?!」

「……そうなの?」

「シバキ倒すわよ?」

とりあえず、さっきのロゼの回復魔法スキルの範囲を思い浮かべる。

「……よく見えなかったけど、五十メートルぐらいの範囲を回復可能エリアにしていたような気がする。」

「でも、カイに比べればなあ……」

「そうよね、あの殲滅魔法スキルの鬼に比べればね・・・」

「あの、比べる対象が間違ってる気が・・・」

カイが魔法スキルを使えば、やっつけられるかどうかは別に、目に見える範囲の敵すべてにダメージが与えられると言っても過言ではない。

だから、走れば数十秒の範囲のロゼの魔法に比べたらな・・・。

「誰だよ、カイって」

「俺の友人」

「ついでに『海と馬の神』ポセイドン」

「・・・ああ、アンタと仲の良かった『ポセイドン』ね」

何故か俺とカイは仲が良かった。

理由とかも、何でそうなったのかもよく覚えていないけど。まあ、今見たいな感じではなかったけどな。

「つか、何でそんな回復スキルを極められるの？」

「・・・普通に？」

「・・・普通ね」

「あの、お二人の『普通』はアテにならないんですけど・・・？」

「だってさ、範囲回復スキルのほとんどが平面だけなんだよ」

簡単に言うと、地面に足をつけていないと回復されないという事実がある。

いや、地面じゃなくてもどっかの木にぶら下がるでも可能だけど、とにかく、空中では回復されない。

「よく、カイとロゼの三人で適当なダンジョンの攻略をしてたんだけどさ、時たま弱点部位っぽいのがやたら上にあるとかがあるんだよな」

たとえば巨人だと弱点部位は人間、つまりはプレイヤーと変わらないが、首を狙おうにも位置が高すぎる。そこで俺達が考え出した作戦が、俺がカイの背中を蹴ってヤツのところに行くっていう無謀な作戦。俺はそのせいでよく死んだ。

「で、その時は絶対に空中にいる扱いになってるんだって」

「でも、この回復スキルなら空中でも回復できるから、それでミツドの回復をしてたのよ」

「無茶苦茶な戦い方だな!？」

「お前も神名持ちの一人なら、これぐらいのことはできなくちゃいけないんだよ」

「いや、ミツド君。そんな必要は全くないからね」

俺はそう言う師匠の言葉をスルーしてミサの方を向く。

「ミサは……どうするっ？」

「あの私、やっぱり、無理ですよ〜」

まあ、だろうな。

ミサは中堅どころか、戦闘に関してはほぼ初心者と変わりない。

「……メイド服でも着せて、トムが雑用させてた方が役に立つんじゃないのか？」

「そ、それはそれであんまりですよ!？」

「……そうね、トムの方がうまく使いそうね」

「そ、そんな〜」

とりあえずミサはここでいったん別れ、トムのところに行くことになった。

何故か捨て台詞に『メイド服なんて着ませんよ!』と言っていた。

……それは、フリだな!？」

「とりあえず、ミサちゃんがいい感じにメイドフラグを作ったところで次ね」

「むしろ、メインだね」

「わかってるって」

そう言うと、俺はとりあえずしゃがみ、アスカに背中を向ける。

「アスカはそんな俺の行動に対して、さも当たり前のように俺の首に腕をまわして……。」

「ヘッドロック!」

「HPが、減る!?!」

「いや、PT組んでるから」

「……アスカさん、何やってんですか?」

そんな俺達のやり取りに、ライトはあきれた表情で見てくる。

「と、まあ、お約束はこれぐらいにして……。」

「気を取り直して、アスカが俺にその体を預けるようにしておんぶされる。」

「……こいつ……。」

「重くなったか?」

「んなわけないでしょうが」

「とりあえず、ミッド君。指輪を使わずに走ってみたら?」

「わかった」

とりあえず、軽く走ってみるが特に問題はない。

でも、ひどく懐かしい感覚だな。時間的には一年と少ししかたっていないのに……。まるで、十数年前のことみたいだ。

「じゃあ、モンスターを呼んでみる？」

「頼む。アスカはしっかりつかまってるよ？」

「分かってるわよ」

そう言うと、アスカが更にぎゅっと俺にしがみつく。

「……だが、こういうことをしても『背中になんか当たって……！』的なことがないから特に面白くもなんともない。たぶん、システムの倫理コード的な何かがそうしているんだろうと思う。」

「ライト、ロゼちゃんをお願い。あたし達はこの先のボスを倒して戻ってくるから」

「……は？いやいや、それはいくら何でも無理……」

「とっ！」

ライトが何かを言ってる途中で、師匠がカードを握りつぶす。

それは『魔香』と呼ばれるアイテムで、これを使えばダンジョンを出るまでの間にモンスターがわんさか寄ってくる。

そして、何やら獣が歓喜を叫ぶかのような雄たけびが聞こえる……。

「ちよ！？来てますよ！？」

「……だって、呼んだのよ？」

取り乱すライトにアスカは何言ってるの？って感じで返す。

目の前にはさっきの『エインヘリアル』を含め、多くのモンスターがやってきていた。その光景は、あの『阿修羅』の事件を彷彿とさせる光景だった。

「じゃ、行くぞ！・・・時よ、止まれ」

俺は急にゆっくりになった景色の中を駆け抜けた。

Player-ライト

行ってしまった。いや、むしろ逝ってしまった。

あの『スレイプニル』は何かをつぶやくと、俺の時のように唐突に消えた。

いや、よく見ればモンスターのHPバーが削れているものがちらほらと見えるから、あの大群の中を駆け抜けている途中なんだろう。

「無理だろ！？」

「無理じゃないわよ」

そんな俺の言葉に否定の声をあげた人がいた。

いや、さっき回復の戦略スキルを見せてくれたロゼと呼ばれている人だ。

「確かにあいつはダメネコよ。けど、あいつならあれぐらいの中は余裕で切り抜かれるわ。少なくとも、あの騒動では大丈夫だったわね」

「・・・」

それを聞いて、俺は何とも言えない表情を浮かべていたんだと思う。

一応、聞いてはいる。先輩の部下である『グレイブニル神の鎖』のイースから。あの、イースや『ポセイドン』でさえ対抗できなかった『阿修羅』と呼ばれているプレイヤーを『スレイブニル』一人で撃破したと。確かに、あいつは元とはいえ守護神だ。ガーディアンそれなりに対人戦闘の経験もあるはずだ。でも……。

「納得できないって顔ね」

「……………まあ」

「分かる気もしないでもないけど……………やっぱ、わたしにはよくわかんないわね」

それはそうだろう。

何で今更戻ってきたんだよ、そう思う。

なんだか、尊敬している二人の神名持ち二人を一気にとられてしまった感じた。

「確かに、あんな荒業はあのバカにしかできないわ。……けど、アンタもそうでしょ？」

「……………どういう、ことですか？」

「わたしは、回復スキルが使える。じゃ、アンタは？アンタには何ができる？……………アンタは、『トル轟雷の神』なんでしょ？」

そう、それが俺の……………。

「たかがダメネコ相手にそれでどうすんの。仮にも、神様の名前貰ってるんだから、もっとシヤンとしなさい！」

そう言つと、思い切り俺の背中をバシツと叩く。

・・・若干HPが減ってしまったが、気にしないでおう。

ひどく不器用な感じがするが、それでも俺のことを元気づけようとしているんだろう。

「ま、これからもがんばらないよ新米神様君」

「・・・わかりました。とりあえず、帰ります？」

「お願い。こんなとこまで来ちゃうと、一人じゃ無理があるからねえ」

そう言つと、俺達は歩き出して・・・蒼い塊にぶつかった。いったい何が起きたのかとバックステップを踏んで距離をとると・・・。

「・・・イース？」

魔氷狼タマにまたがったイースだった。

「・・・ロゼ、タマ二号は？」

「・・・本日一回目ってわけね」

ロゼさんは何やら意味のわからないことを言つと、イースにあつちと指をさす。

だが、そこは………。

「モンスターでこつちやけど？」

さすがに幾ら『魔氷狼』でもこれは無理だろうと言外にそう伝える。

少なくともこんなところを普通に行けるのは、俺の知る限りでは先輩だけだ。あの シーク かくれんぼ ならそれが可能だ。

「………問題ない」

言葉少なにそう言うと、イスはタマの腹をかかたで軽く蹴る。それだけでタマは主のやる事を理解し、あのモンスターの大群に突撃していく。

不意を打たれた形のモンスターたちは成す術もなく魔氷狼とその少女によって蹂躪されていった。

「……何でも、ありね」

「……だな」

なんだか、格の違いを見せつけられて気がする。

もう、イスさえいれば領地エリア・ウォー争奪戦も楽勝なんじゃと思える。

いや、それがダメだからこつちいう状況なわけだけど。

「こつちだ！」

「……了解！」「」

またも、第三者の声。

声の方向を向くと、そこには複数のプレイヤーがいた。
ただ、俺は見た覚えのないやつらばっかだ。でも、ここには『グ
リン・ユグドラシル』以外のメンバーが入ることができないはず。
まさか、何かしらの裏ルート的なもので入ってきた侵入者かと『
ミヨルニル』を構える。

「あ、『ツール』さんチーッス。」

「「ちーっす」

「（ていーす）（）／（）」

「今は忙しいんでまた今度お！」

「「さよならー」

「（バイイ）（＞）（＜）／（）」

そう言いながら俺達の横を通り抜けて行った。

後ろの方からは『マジで隊長いるの？』とか、『元隊長だろ』、
『でも、本物だったら意味なくね？』といった声が聞こえてくる。

「……いつたい、何なんだ？」

「……聞かれても困るわよ」

「……帰りますか？」

「……そうね、それが一番」

そして、俺達は一足先に戻ることにした。

クエスト16・猫妖精と樹に住まう栗鼠たち

Player・ミッド

「師匠、大丈夫か！」

「今んところはねー！」

「がんばれ！」

今、俺達の目の前には数々のモンスターたちが押し寄せてくる。俺と師匠はそのモンスターたちのわずかな隙間を縫うようにして駆け抜け、ボス部屋まであと少しといったところだ。

「つか、お前も気を抜くなよ」

「何て〜？」

どうも聞き取れなかったようだ。

「気を抜くなって言ったの」

「わかってるわよ」

俺のスピードがあまりに速くて、たまに聞き取れない時があるらしい。

俺はそのためになんかろで話している。いや、別にどうでもいいんだけどさ。

「ミッド君、前！」

師匠の言葉に反応して前を見ると、突然モンスターが視界に入ってきた。大剣を持った『エインヘリアル』か。

どうも、アスカに話すことに集中して前がおろそかになっていたらしい。俺は首にまわされているアスカの腕をつかみ、思い切り地面を蹴る。

体が浮き上がり、俺の目の前ギリギリを相手の剣が通過。俺はそれに片足を乗せ、そこを駆け上がる。

『エインヘリアル』をジャンプ台にし、更に体をひねる。体が地面とさかさまになるのを感じ、足に來た感触を頼りに、上にあつた太い世界樹の枝を更に蹴る。

そしてすぐさま元の道に舞い戻る。

「……さすが、『キヤット・ポ猫足』ね」

「すげえだろ！カイ達とダンジョンもぐってたら気付いた」

どうも、この長靴ケットシー・ブーツについてるPスキル『キヤット・ポ猫足』は、とにかく地面のように蹴られれば問題なく発動するらしい。

それなら『壁走り』もできるかと挑戦してみたがそれはダメだった。

「まあ、それも今だからできる技だと思っけどな」

たぶんあの頃じゃ無理だと、なんとなくそう思う。

「二人とも、もうすぐ到着だよ」

「おっけ」

「わかったわ」

師匠の言葉通り、既に目の前にはボス部屋の大きな門が迫っていた。

あの門をくぐればボスが出現し、バトルとなる。

「……じゃ、最後の行つとく?」

「お願い」

アスカがそう言うと、俺の背中でもぞもぞと動き出す。

俺はできるだけ背中を地面と平行になるようにして走る。

そして、アスカは頃合いを見計らって……。

「たあ!」

俺の背中を思い切り蹴る。

そして俺達の誰よりも早く門の中へと入って行く。

一瞬の静寂、すると門の扉が閉まり始め、中の部屋からボスモンスター雄たけびが聞こえる。

「じゃ、さくつと殺つとくわ」

「怖えよ」

その言葉を最後に門が閉じた。

まあ、後は……。

「ボス、逃げてくれるといいなあ……」

「俺もそう思う」

そう、切に願う。

師匠は今度はモンスターに気づかれにくくなるアイテムでさっきのアイテム効果を打ち消す。すると、俺達に向かって突撃してきたモンスターたちは、さっきのことが嘘のように静まる。

「……師匠、いつ終わりますかね？」

「……三分くらい？」

「……カップ麺が欲しい」

「そだねー」

俺と師匠はボス部屋の前でどうでもいい会話をしつつ、ぼけーと枝の隙間から見える空を眺める。

「……今日も、いい天気だ。」

そうして、しばらくすると、門が重々しい音を立てて開き始める。どうも、アスカがボスを倒し終わったらしい。

俺と師匠はさっさと中に入って行く。

まあ、案の定というか、部屋の中心にアスカがいた。

「終わったみたいだな」

「うん。はぁーっ、スッキリしたぁ！」

もう、アスカは悩み事なんか吹っ飛ばしたぜ！って感じのいい笑

顔を俺達に向ける。

俺と師匠はそんなアスカの表情に曖昧な笑みを浮かべつつ転移陣ポーターのところに行く。

転移陣は、ボス部屋にある帰還用のオブジェクトだ。

これの上に乗って『転移』と言えば、このダンジョンの一番最初のところに戻れる。

後は帰るだけ。俺はそのためにその上に乗ろうとしたら……。

「……………見つけた」

「ッ!？」

地獄の使者から、『地獄への優待券』を頂いてしまった。

俺はすぐに転移陣の上に乗って、転移と叫ぶように言う。だが、
どういうわけか転移されない。どういふことかと周りを見ると、アスカが俺のマントのすそを握っていた。

「まあまあ、ハジケてるイースが見てみたいからここにいなさい」

「バツ!？死ぬ!？」

転移陣には、転移ができない状況がいくつかある。その一つが今の状況。転移陣の上に自分がいるが、第二者が自分の体、装備の一部に接触していて転移陣の外にいるとき。その時は転移されない。そのせいで俺は生命の危機に陥った。

「……………さすが、オーデイン……………ありがとう」

「……………イースが、デレたっ!？」

「違うわバカ！」

「……そう違う。……デレるのはタマニ！」

「うっさいわ!？」

「……………いやよ、いやよも、好きのうち」

「俺は本っ当に嫌だ！」

そんなバカ話をしながらもイースはじりじりと俺に迫ってくる。
対する俺は、バカ笑いしてるアスカにマントの端を握られ、どうしても抜け出せない。いつそ殺るかとも考えたが、そんなことすれば俺の命がマジで散る。

「詰んだ!？」

「……………っふ」

もう、なんかマジでヤバイ。

だって、相手は鼻で笑ってるんですよ？
俺なんか、ぐうの音も出ない。

「……………今日こそ、お持ち帰り」

もう、ここまでか……。俺は本当に諦めかけた。

「隊長を守れー！」

「いや、元隊長だって」

「とか言つて、自分が真つ先に言つてるし」

「(笑)」

俺の目の前に四つの人影が現れる。無駄にポーズをキメて。装備はまちまちだが、全員に共通して軽装備なことがわかる。おそらく、機動性を重視している。

つか、こいつら……。

「はあく……『ラタトスク』のみんなじゃない」

笑いの発作から戻ってきたアスカがそう言う。

そう、こいつ等が『ラタトスク』のメンバー。

本来はこんな風に颯爽と表れて戦隊ヒーローよろしくポーズをとらない。

イースは初めて見たのか、呆気にとられた表情だ。まあ、そうだろうな。『ラタトスク』はあることは知られているが、誰がメンバーなのかは全く知られていない。というか、見たことさえない……。

「……………貴方達、『ラタトスク』だったの？」

ハズナンドケドナア……………。

「おい、何で顔がバレている」

「だって、イースさんを張つてたら隊長の動向がまるわかりでしたから」

「だから、元隊長だ」

「とか言っつて、自分が真つ先に潜入したくせにね」

「（爆笑）」

まあこんな風にダラけたやつらにしか見えないが、こいつ等はプロだ……。

「そんなわけでオーデイン、隊長のマントの裾離して」

「（たいちよーを離せー）」

「えー。もつとイースがハジケるの見たいんだけどー？」

「全力でやりますよ〜？」

『対人戦闘』のな。

こいつ等の主な仕事は、裏切り者の粛清、領地内のPKへのPK等々だ。

領地争奪戦ではロキの指示のもと、裏工作に励む。

まあ、そんな奴等なわけで、いくらアスカでも五人も相手じゃ不利だ。まあ、三人ぐらいまでならどうにかなつたかもしれないけどな。

アスカはそれについて文句も言わず、すぐに俺を解放した。

「……………そんな、貴方達は……………味方じゃ、ないの？」

イースは、そんな俺達を見て絶望した表情を見せる。

普段ポーカーフェイスのこいつがこんな表情を見せるのはかなり珍しい。

「もちろん、元隊長の味方だ」

「というわけで・・・」

すると、四人は何故か俺の背中を思い切り押し、俺をイースの目の前につきだす。

「・・・ダメな隊長ですがお願いします！！！！」

「（頼む）><（bビシッ）」

「おかしいだろおー！？」

「・・・・・・捕獲」

俺は状況が理解できないまま、ついにイースにつかまった。
俺の人生、オワタ・・・。

「この、裏切り者ー！？」

「違います。私達は元隊長のために、ツンデレな隊長を・・・」

「お前がツンデレとか言うな！？」

さつきから俺のことを元隊長と言う、勝気な顔したポニーテールな女子は『ツン』。いや、ニクネームなんだけどさ。なんか、本人はどうしても自分のキャラネームを教えたがらず、そして誰が言

い出したのか『ツン』で名前が通ってしまった。

そして、実際にこいつはある種のツンデレ的な要素があるような気がしないでもないことがない。

「まあまあ、いいじゃないですか」

で、さつきからこいつ等のリーダー的な態度をとっているイケメン男子が『ハンゾー』。俺の副官だったヤツで、今は隊長だろうと思う。まあ、ロキが管理してるから実際には今だ副官かもしれないけど。

「そーそ。愛する我らが隊長のためにやったんだ！」

「本当は？」

「面白そうだったから!!」

「死ね！」

さつきから本物のロキまがいなことを言ってる茶髪のチャラ男は『アレクサンドロス』。でも、明らかに名前負けし、更に装備が無意味に派手で目立ちやすく、チャラチャラしかしてないで『チャラ』と呼ばれる。よく言えば『ラタトスク』のムードメーカー。ただし実際にはただのお調子者。

「（結婚オメ）」

さつきからこのゲームに機能としてある『メモ帳』を使って筆談している短髪の少女は『へな子』。一度何でそんな名前にしたのか聞いてみたら、『なんか、萌えない？。〇。〇。〇。』

死刑宣告をか？

できれば、穏便なものがいい。それこそ俺が して××
されて（以下省略）的な事態だけは死んでも避けたい。

「……………まず、鞭がいい？」

「いきなりその選択肢！？」

「……………鎖がいい？」

残念なことに死亡フラグな予感しかない。

「……………それとも、わ・た・し？」

それを聞いた瞬間、俺はわき目も振らずにダツシュした。

だが、注意深く見ていた『ラタトスク』のバカ達が俺を即座に拘束、というかのしかかっってきた。STR値が著しく低い俺は逃げられない。

「助けて！？なんかされた後に殺される！？」

「落ち着いてくださいよ、隊長！？」

「精一杯の素直な想いにむくいることができないとは……………」

「元隊長、馬に蹴られて死ねばいいのに」

「(ぱーん) (#・・)(=)(・)()」

お前、精一杯の素直さが猟奇殺人予告ってどうよ！？
俺は必死にこいつ等の下からはい出そうとするが、どうしても抜け出せない。

「お前ら、重い！！」

「女子に向かって何たることを・・・」

「（イラッ　　（＃＾　＾））」

「や、やめ、し、し・・・ぬ・・・」

イスにやられる前に、こいつらにやられそうな気がしてきた。

「・・・・・・・・冗談」

「冗談じゃねえよ！？」

「・・・・・・・・じゃあ、嘘？」

「いい加減にしてくれ！？」

「いったいどつちだよ！？」

俺がそう突っ込むと、イスはいつになく真剣な表情になる。
その気迫押され、俺は思わず喉まで出かかったさざまな罵詈雑言等々を飲み込んだ。

「・・・・・・・・話、聞いて」

「お、おっ」

イスは、バカどもに押しつぶされた俺の前に来て、両手を俺の頬にあてる。

何故か視線が俺達に集中しているのがやけに感じ取れ、ものすごく居心地が悪い。そして、イスはその口から……。

「……リーダーが、用があるって言った。……『グリーン・ユグドラシル』に来てって」

「……は？」

「……さて、なんかいろいろとおかしいぞ。
こいつが言うリーダーってのはトムのはず。そのトムが、俺がここにいるにも関わらず来いだ？」

「……なあ、それっていつの話？」

「……三日前くらい前？」

三日前……。

要するに、俺が久しぶりに無所属領でトムと再開した日。つまりその意味するところは……。

「遅いわ!?!」

全員の突っ込みがイースに火を噴いた。
もう、いろいろとグダグダだった。

クエスト17・ロキの作戦発表会

Player - ミッド

まあ、後なって考えてみればわかることだった。

イースは無駄にスポーツマンシップに則った、一方的なバトルを挑んでくる。

そんなイースがなりふり構わずに追いかけてくることの方が異常だつてことに気づけばよかつたんだ。うん。

「……………今の、タマ二号に追いつけても……………意味がない」

「はいはい。お前はそう言う奴だったな」

まあ、そう言うわけで俺とイースの賭けレース的なものは一時休戦。

タマが俺に向かって『ふっ、命拾いしたな』とでも言いたそうに眼を向けてくる。

……………こいつ、AIだよな？

「つか、何でわざわざお前が言いに来るんだよ」

「……………リーダーに言われたから」

「実況のへな子さん、どう思いますか？」

「（挑戦者は、素直になれないお年頃ですね）（ー）（キラーン）」

「ありがとうございます、女性経験の多そうな解説のチャラさん

は？」

「うーん。・・・もう、まさにへな子さんの言つとおりだと」

「では、モテそうだけどモテない解説のツンさんは？」

「とりあえず、司会進行のハンゾーを殺ります」

後ろのバカ四人がものすごくうるさいが無視しよう。

しかも実況がへな子とか、実況になつていない。つか、普通に話せ。

「てかアンタ達も、ミッドに久しぶりに会えてうれしいのはわかるけど、ちゃんと仕事しないよ？」

「そうだね。もうすぐ領地争奪戦だし、トム君からいろいろと指示が来てるんじゃない？」

「いや、それが今回は特になんもなしなんですよね」

ハンゾーがそう言いながらツンの攻撃を適当にあしらう。

「・・・あいつ、俺の力だけで事を収めようとしてるのか？」

「あの、性悪な真面目口キに限ってそれはないわ」

「うん、俺もそこは賛成かな？」

俺とアスカ、そして師匠の中でのトムの評価は負の方向で最高だった。

その時、へな子はぴくつと体を一瞬だけ動かす。どうも、突然のショートメールに驚いたみたいだった。

「（・・・ロキから連絡）（・・）つ ホレ」

顔文字とともに、メモ帳に連絡の内容がずらっと書かれる。

どうも、作戦を考えたから来てほしいらしい。

まあ、ちょうど俺達もアスカの部屋に向かうところだったから問題ないだろう。

俺達がアスカの部屋、世界樹の執務室に着くと、そこにはミサにロゼ、ライトもいた。

ライトは俺達の後ろにいる四バカを見て驚きの表情を見せるが、ロキが四バカにアイコンタクトをして散らせる。

教育が行きとどいているなと感心した。

「・・・先輩、さっきのは？」

「あれか？『ラタトスク』の連中だが？」

「・・・あれが？」

「無意味に優秀だな」

幹部クラスにバレないように行動するって難しくない？

つか、『ツール』にぐらい教えておけよ。

俺がそんなことを思っていると、人が集まったのかトムが話を始める。

「今日集まってもらったのは今回の領地争奪戦エリア・ウォーの最終的な作戦内容と、人員の配置だ」

そう言うと、トムはホワイトボードを持ちだしてきて、そこに何かを書いていく。

左右の端に罫のような記号があり、右が緑色だ。たぶん、こっちが俺達なんだろう。

「多くのやつ等はうすうす気づいているかもしれないが、今回は勝たないといろいろな意味でヤバイ。そこで、最終手段を使うことにした」

トムの言っていることがかなり真実めいてきているのか、この場では誰もジョークの一つも言う余裕がないみたいだ。

「作戦は『オーデインの行軍』。攻撃メンバーは……」

そう言うと、トムはホワイトボードの真ん中あたりに丸を書き、そこに俺とアスカ、師匠、イースの名前、更にはミサまでも書く。

「以上だ」

「ちよつと待てよ。俺と師匠、アスカは当然としてイースが来るのまではわかる」

「お前が言いたいことはわかる。イースは今後この作戦で使えるかどうかの試験だ。ぶっちゃけた話は戦力に数えていない。だが、もしもうまくいけばお前がいなくてもできることが判明するからな。できるだけ条件を考えているものと同じにしておきたい」

たぶん、トムはいちいちピンチのたびに俺を呼びだすのをそれなりに申し訳なく思っているんだろう。だから、代替案としてイース

の魔氷狼タマにアスカを乗つけたバージョンも試してみたいが、うまくいかどうかわからない。まあ、今回は嫌でも勝てる自信があるから、実戦で試すんだろう。

「もちろん、彼女には話をつけてある」

そう言うと、トムはそばに控えさせたミサに話を振る。

ミサは若干おどおどしながらもしつかりと受けこたえる。

「あの、私は初めて領地争奪戦エリア・ウォーに参加しますが、よろしく願います！」

「・・・彼女は元々は『生産組』だ。そのため、DEXが非常に高く、使っている武器も弓なので狙撃に関しては問題ない」

「でも、ロキさんが連れてくるほど強いんじゃないですか？」

「俺達は、後がないんですよ？」

「それに、『オーデインの行軍』ってどんな作戦ですか？一応、無茶苦茶すごい作戦だって言うのは聞いたことがあるんですけど？」

「どうも、『オーデインの行軍』は俺が抜けてから全く使われたならしい。」

「ここにいる半数のプレイヤー達がその内容もよくわからない。わかっているのは『すごい』ということだけ。」

「ただ、知ってるやつはものすごく微妙な表情を浮かべていた。」

「簡単だ。まあ、ほとんどの者は知っているだろうが、そこにいる猫妖精ケットシーは、俺がこの作戦のためにわざわざ引っ張ってきた」

すると好奇の視線が一斉に俺へ集中する。
なんか、こういう状況はものすごく怖い。視線恐怖症になりそう
だ。

「一見ヘタレにしか見えないが、そのこのネコは俺とアスカ、そ
してスピカの同期の元守護神^{ガーディアン}。『スレイプニル
八足の駿馬』だ」

「……あれ？それは元々スピカさんのじゃ？」

「違う。スピカとこのネコ、二人で『スレイプニル』だったんだ。
とりあえず、時間が惜しい、今はその部分は省略する」

そしてトムは再びホワイトボードに向き、攻撃メンバーを大きな
丸で囲む。そこから敵陣の砦へ矢印を一つ。

「要するにこういうことだ。そこのお飾りオーデインを使う」

「……ねえ、さつきからもものすごく罵倒されてるんだけど？」

「……いや、だって本当のことだろ？少なくとも、俺がいた時
はこの作戦じゃないとお前は何もできなかった。つか、させなかつ
たな」

「」「」「いやいやいや!？」」「」

すると、俺が見たことのない幹部プレイヤーの一団が突っ込み始
めた。

「何その破綻した作戦!？」

「破綻などしていない。むしろ、最良の策だ」

「だって、ロキさんが言ってるのは、そのメンバーだけで砦を制圧しろってことじゃ!?」

「正確にはアスカがだけどな」

「なお悪いですよ!?!」

「安心しろ、今回の大将は俺が務める」

「いや、そういう問題じゃなくて……!」

なおも反論し続けるプレイヤーに、トムはドンと机を叩いてその言葉を止める。

「……いいか、俺達には後が残されていないうえ、先日の件で戦力が激減している。今も、多くのプレイヤーでカウンセリングもどきをしているところだ」

トムの気迫に押され、誰も言葉が発せられなくなる。

まあ、こいつのことだから意図的にそうしたんだろうが。

「エリア・ウオー領地争奪戦は大将のHPをゼロにすれば勝ちだ。俺達の目的は、敵軍を潰すことじゃない、勝つことだ。……意味はわかるな?」

要するに、敵の大将を瞬殺する。ただそれだけ。まさに、これこそ本物の電撃作戦だ。

「そして残りの者達は、こいつ等がケリをつけるまで俺を守る」
そう言つと、トムは俺達の背の前あたりに『防衛』と書く。

「だから、今回はその防衛作戦の方がメインだ。こつちに何か問題があれば言ってくれ。普段攻撃に回っているやつも今回は防衛に来てもらうからな、わからんことがあれば遠慮なく聞いてくれ」

そう言つとトムは更にいくつかの線を書き、ここにはどの部隊でそこにはこの部隊と指示を出し始める。

「……思つたよりも反発がなかったな」

「トムはそれなりに人望があるから。まあ、やけになつてこんな作戦を考える人じゃないつてのは全員わかつてるはずよ」

なんともまあ、うらやましい限りの団結力だ。

トムがここにあの部隊と言つて、プレイヤーの一人がそれは無理があると言えば理由を聞き、それを参考に更に防衛網を構築していく。

見た限りじゃ、結構新参の幹部でも普通に意見したりしている。新参古参問わずにすごいもんだ。こういう時はどうしてもベテランが仕切つてしまつて、新参は意見すらできないことが多いと俺は聞いたんだけどな。

「さすがは真面目口キだな」

「……リーダーはすごい」

まあ、それでもなけりゃこんな変態を自分の部隊として入れるよ

うなことはできないしな。つか、マジで何とかしてくれないかぁ。。。

「っていつか、ミサ大丈夫？」

「は、はい！頑張ります！」

ロゼとミサも気合は十分なようだ。

「ていつか、ミサもよく実験台を引き受ける気になったな」

「は、はい。ファントムさんがどうせならやっぱり参加して行けと言ってくれたので。私は邪魔にならない程度のことを頼んだんですけど。。。」

ミサはほんの少しだけ困ったような微笑みを見せる。

まあ、まさかの最前線投入だからな。

「どうせなら、ロキがタマに乗っけてもらえばいいのにな」

「。。。。そう言えばそうね」

「何ですか？」

俺はロキについてほとんど二人に何も話していないことを思い出した。

「トムはGスキルを三つと、すっげえ特殊な武器を持ってるんだよ」

「そう。で、狙撃を狙うんならあいつでもできるのよね」

「……あれ？ファントムさんて、『霜の巨人』よね？」

「お前、北欧神話領の人間でもないのに、よく知ってるな」

俺は意外なところで博識さを見せたロゼに驚きの表情を向ける。

「アンタが教えたんでしようが」

「……そうだったけ？」

「……でも、『霜の巨人』で、弓ですか？」

『霜の巨人』は、北欧神話に出てくる巨人族の一つだ。北欧神話領の特徴は種族の豊富さ。それゆえにステータスポイントを振ったときの補正が種族によって違う。

ある一点に突出した能力が強み。そして『霜の巨人』は、STRに補正のつくパワー系のキャラだ。

簡単に言えば、パワー系キャラでSTRがあんまり作用しない弓を使うのはただのネタキャラでしかない。

……普通なら。

「知ってるか、ロキは『トリックスター』なんだぞ？」

「……あんだ、よくそう言ってたわね」

「後は領地争奪戦でのお楽しみだな」

ロゼがええーと言いながら俺に教えろと駄々をこねるが、俺はそ

れを無視した。

Player - モリガン

「……いよいよ、エリア・ウォー領地争奪戦ね」

私は隣にいる『クーフリーン』にその声をかける。

「ああ、楽しみだなー！」

そう言うと、クーフリーンはものすごく嬉しそうな満面の笑みで私にその笑顔を向けてくれる。

……ツポ。

「我が生涯に、一片の悔いなし……」

パタン。

「死ぬなよ」

そう突っ込んできたのは『アーサー王』。

もう、この人はバカだ。

「私は、クーフリーン様が付き合うことを前提に婚約してくれないと死ねません」

そう言いながらクーフリーン様を流し眼で見つめる。
ただし、クーフリーン様には効果がないようだ。

「順番、激しく間違ってるからな」

更に突っ込んでくるのが『ランスロット』。

もう、本当にこの脳筋馬鹿間抜阿呆糞男子どもは死ねばいいのに。

「……大体考えていることはわかったけどな、もう少し女の子らし」

「バカなの？死ぬの？」

「……」

そう、バカは大人しく黙っていればいいの。

すると、ランスロットが立ちあがり、今回の領地争奪戦について話し出す。

「えー……。次の領地争奪戦は、エリア・ウォー痛手を受けている『グリーンユグドラシル』にとどめを刺しに行きます」

「……ぶつちやけ、『オーディン』の貞操が危機を迎えるので俺達は今すぐにでも取り下げた」

「は？お前、やらないとか馬鹿か？」

「バトル・ジャンキーいのが、戦闘中毒末期症状のクーフリーンを止めることが不可能だ。つか、助けてくれ」

「クーフリーン様、素敵」

「ついでにモリガンも戦っているクーフリーンを見たいそうなの

で無理でした」

ああ、これで『グリーン・ユグドラシル』にとどめを刺し、『オーディン』を手中に収めて『ふっふっふ』なことをすればクーフリーン様も私に嫉妬して振り向いて下さるはず……！

「現在、どうやって『オーディン』に被害が行くことなく平和に済ませられるのか『ロキ』と相談中」

「バカなの？死ぬの？凍死するの？消し炭にされるの？感電死するの？」

「ですが、やっぱり無理そうです」

ふん、この糞共が。

……はあ、興味なさそうに話を聞いているクーフリーン様も素敵……！

「……とりあえず、これがモリガンの考えた作戦だ」

「……明らかに、オーバーキルですよね？」

「モリガンさんは、クーフリーンさんが絡むと無意味に優秀すぎるからな……」

「しかも、あっちの戦力が激減したのも、プレイヤーのためだって聞いているぞ？」

「……『アレ』か」

「おい、モリガン。いい感じにクーフリーンといちゃついでる妄想をしているところ悪いが、なんか一言言え」

「……………ツチ」

せつかく、クーフリーン様を眺めていたのに、アーサー王に邪魔をされてしまった。

しょうがないわね、この脳筋は。

「愚民共、クーフリーン様に勝利を……！」

「いや、主にお前のためだよな？」

クエスト18・波乱の領地争奪戦(前書き)

来たぜ、来たぜー！

ついに、あの英雄がつ！

一話で済ませるつもりが、なんか二話にわけてしまいました。

・・・ネタ、扱いに定評のあるランサーのくせに。

クエスト18・波乱の領地争奪戦

Player - ミッド

ついに、この日が来た。

俺達は世界樹の前に立ち、『ブラウン・フォレスト』の連中が来るのを待っている。

暇だし、領地争奪戦エリア・ウォーの内容でも確認しておくか。領地争奪戦エリア・ウォーは、ふだんのPTプレイとは少し違う。普通、PTを組んだ者同士で互いを攻撃してもダメージはない。けど、この領地争奪戦エリア・ウォーにおいてはそれが適用されない。

うまくしないと誤爆はもちろん、下手すればロゼの使う広範囲回復魔法も相手に適用される。まあ、これが理由でアスカも本気を出せていなかったんだ。下手すりゃアスカは『誤爆の女王』的な称号をゲットできる。

後、勝利条件はいたって簡単。それは敵の大将のHPバーをゼロにすればいい。だから、今回こっちの大将をしているトムは、世界樹の奥で引きこもっていれば安全だ。

「ミッド、来たわよ」

アスカの声でその視線の先を見る。

そこには、大勢のプレイヤー達がいる。

今回の領地争奪戦エリア・ウォーはここ、『サッポロ』の世界樹の前で行われる。遠くにあるのでよく見えないかもしれないが、目を凝らせば敵の天幕のようなものが彼方に見える。今回の俺達はそこへ突貫すればいい。

まあ、そのためにはこの五千人数ほどの敵をかわして進む必要があるけどな……。

「ヤバい。帰りたくなってきた」

「今更何言ってるの」

「それに、もう遅いよ」

師匠が遅いと言ったその瞬間、突然ファンファーレのようなものが響き、電子音声が領地争奪戦エリア・ウォーの開始を宣言し始める。

そして互いの大将同士が発表され、カウントダウンが始まる。敵側は予想通り『モリガン』、まあ、別にわからなくても問題がなさそうな気がしなくてもないけどな……。

俺はアスカを背負えるように姿勢を低くし、いつでも走りだせるようにする。

そして、カウントがゼロになった瞬間　。

「ヤバい、『時よ、止まれ』！」

「え？ちよお!？」

俺はアスカの腕を引く。

急なスピードの変化に耐えられず、アスカは引きずられるようにしてその場から離脱。次の瞬間、アスカのいたところに銀色の棒が突き刺さる。

「え？何これ!？」

「……位置的に心臓。それに、銀の槍か？」

驚くアスカを無視し、俺は現状の分析。でもなんだか、ものすごく嫌な予感がする。

そんな俺の予感を裏付けるかのように、敵側の人垣の一部がモーゼの滝のごとく二つに分かれ、そこからヤツが出てきた。

「やっぱりかあ。その、コマ送りでもしたみたいなスピード。つか、この私の必殺の技を避けれるのはお前ぐらいだからなあ、『スレイプニル』!」

「……………マズいのが来た」

「最悪ね。つい最近までは出てなかったのに……………」

「そりゃあ、そうだろ? だってそこにいるやつ等、全員ザコばっかだからなあ!」

「……………ミッド、あの頭が心配になってくる人は誰よ?」

ロゼが俺に聞いてくる。

目の前にいるこの戦闘狂はケタケタと狂ったように笑っている。

「ヤツは、『^{クイフーリン}戦闘狂』だ」

「……………あの、ミッドさん、少しおかしい気が?」

「……………あれが、噂の?」

「『モリガン』が、好きな人?」

「……………そう」

俺達守護神メンバーが一斉に頷く。

それを見たロゼとミサは困惑するだけだ。
まあ、そりゃそうだろうな。だって、ヤツは……………。

「……………女の子、ですよ？」

「アア？私い？女だけど？」

そう、『クーフリーン』は女の子だ。

しかも普通に可愛い。目はぱっちり二重で、長い髪を後ろでくっつけてポニーテールにし、機動性を重視した装備に身を包んでいる。

「…………ミッド、『モリガン』が男って可能性は」

「あの変態は紛れもなく女だ」

「…………」

ロゼが言葉を失ってしまった。
無理もないだろうけど…………。

「まあ、まさか裏ボスの『モリガン』が百合とか、誰も思わないからだろうな…………」

「そう言えばアンタ、『あの変態はクーフリーンといちゃついでればいい』って言ってたわね」

「ああ」

「・・・もしかして、アスカさんを要求した理由って」

「たぶん、他の女といちゃついでるところをあの変態に見せつけて嫉妬させようとか思ってるんだろっな」

「無理でしょ!?!」

でも十中八九、俺の予想は正しい。というか、あの変態に常識を求めること自体が間違っている。でもまあ、一応は愛しの『クーフリーン』さえよければそれでいいと言うヤツだ。でも肝心の相手があんなじゃなあ・・・。

「さあ、『スレイプニル』！^{バトル}死合いと行こうかあ!!!」

「バカが！お前愛用の槍はここだぞ！」

とりあえず、地面に突き刺さった銀の槍を見せつける。

こいつはレア武器『銀槍ロンギヌス』。槍使いのプレイヤー達が愛用して使う武器だ。威力が高く、^{ゴッド・クラス}神級相手にも通用するものだ。

「つか、いい加減に学習しろよ。お前がそのスキル使って一方的にボコられるくせに」

少なくとも、初めて俺と『クーフリーン』が戦ったときはそうだ

った。

最初にこいつはスキルを使って、俺が槍を取り戻させないように戦ったら、一方的に勝てた。

だがヤツはその可愛い顔に激しく似合わない、獰猛な笑みを浮かべる。

「最速にして、北欧神話領の隠し玉。私はなあ、お前のためにこいつを手に入れたんだよお！」

そう言つと『クーフリーン』は一枚のカードを取り出して、握り潰す。

すると、俺の近くに突き刺さっていた槍が光の粒子となってヤツのもとに戻って行く。代わりにヤツの手元に光が集まって、棒のよ
うな形状をとる。

そして光がはじけたそこには、白い槍が現れた。

……いや、あれは槍と言つよりも……銛？

「……まさか、『ゲイボルグ』？」

「ああ、こいつのお披露目にやあ強えヤツとやんなきゃなあと思つててなあ。ありがたく思いなあ!!」

ありがた迷惑だ。……果てしなく。

つか、もしもこの武器が神話にそつているとしたら……!

「前衛の戦士部隊は、『オーデイン』達を守れ!『クーフリーン』に攻撃しろ!」

ライトがとつさに指示を飛ばす。

だがそれは……死亡フラグだ!

「バカ！逆だ！」

「ザコが、私の邪魔をしてんじゃねえよ！！」

そうヤツが吠えると、その手に持った魔槍を俊敏に振るう。

襲いかかるプレイヤー達を一人で難なくさばき、逆にダメージを与えていく。

よかった。どうも、最初の槍の実験台は俺にすると決めているらしい。

「アスカ！命令の変更だ。ヤツには誰も近づくな。攻撃は長距離攻撃だ」

「わかったわ。全軍に通達！あの戦闘狂は『スレイプニル』一人で十分よ！」

「ちよつと待てやあああああああ！？」

俺が指示した内容と全く違う！？

「あのなあ、俺達は一刻も速くあの変態モリガンとこに行く必要があるってこと、わかってる！？」

「でも、ミッド君にご執心の彼女じゃねー・・・」

「やっと、その気になったかあ？お前は攻撃こそザコ以下だが、それを補って余りあるほどのスピードに戦闘能力。私は・・・」

「待て、それ以上は言うな。NGワードだ！！」

「お前みたいな強いヤツは好きだぞお！」

「終わったあ！？」

「・・・そろそろね。全員、このダメネコから離れなさい！」

アスカがそう指示を飛ばした瞬間、敵の天幕の方から何やら炎の塊が飛んで来た。

・・・ああ、『モリガン』お得意の長距離射撃魔法スキル、フレア・スナイプショットか。誘導率、威力ともにはなまるな超優秀スキルだ。ただし、MP消費がマジでヤバい。

とりあえず、敵のところへ突撃しておく。そしてタイミングを見計らって離脱。そうするとあら不思議、敵のど真ん中に炎の塊が着弾。これで敵に大打撃を与えられた。

「おい、あのクソ女に伝える。私の邪魔をするなと！」

「は、はいい！？」

クーフリーンは近くにいたプレイヤーを締め上げると、そのプレイヤーにドスの利いた声とものすごい睨みでモリガンに通達させる。

「さて、これで邪魔は来ない。・・・来たら来たで殺すけどなあ」

そう言つと、ものすごくいい笑顔で俺に微笑む。

ああ、その笑顔をできればモリガンに向けてやってくれ。

「やー。ミッドつたらちよーモテモテー。うらやましいなー」

「黙れこの野郎！お前のせいで逃げられねえじゃねえか！！」

あいつはNGワード、『強い　は好きだぜえ』を言ってしまった。

この言葉を言った瞬間、『モリガン』の嫉妬メーターは一瞬で振り切れ、　の部分に該当するやつをさっきみたいにやろうとする。まあ、大抵の場合は『クーフリーン』が文句を言うことで黙る。だが、もしも『クーフリーン』が負けてしまった場合。その瞬間に『モリガン』からの熱烈な集中砲火ラフコルを受け取るハメになる。

簡単に言つと、どっちにしても遠くない死が約束されるというものだ。

「ちくしょう、前哨戦にこいつをやれつてか！？」

「………私も、やる」

俺が愚痴ると、その隣にすっと一人の影が降り立つ。

「お前は、『神の鎖』グレイブニルだったかあ？」

『グレイブニル』こと、イスだ。

むしろこいつだけにやってもらいたいが、残念なことに、あの戦闘狂は俺を逃がす気はなさそうだ。

「まあ、手伝ってくれるんならうれしいけどさ」

そう言いながら、俺はカタルのカードを握りつぶす。

本当なら、今回は運搬だけだったから、最後以外に必要なものだったんだけどな……。

「……お前がかあ？そんな犬っコロの影に隠れて戦うザコに興味はない」

「……………」

イスは無言で手に持った鎖状態の『神器・グレイプニル』を振るう。

Pスキル『思考加速』で景色がゆっくりと見える俺の目で見て、イスの攻撃はものすごく速い。

『クーフリーン』も突然自分のHPが削られたのに驚くが、そこでニヤリと悪人のような笑みを浮かべてイスを見る。

「……………私は一人で魔氷狼を捕獲した。……………これでも、ザコって言うの？」

イスはひどく感情の感じ取れない声音で『クーフリーン』にそう言う。

それに『クーフリーン』はその顔に、更に獰猛な笑みを張りつける。

「なるほどなあ。いいだろう、まとめて相手になってやるよ。この、『魔槍使いの英雄』の、愛美様がなあ！」

「いつも思うけど、名前可愛いな!？」

なんか、性格と顔、そして名前が激しくミスマッチな『クーフリーン』が槍を構える。

「……………私が勝ったら、タマ二号は諦めてもらう!」

「あれ？そついつ話だっけ？」

「とうかデジヤヴ？」

「まあ、なんかよくわかんないバトルが始まった。」

Player - ロゼ

「本当にミッドモテモテー」

「・・・あの、いいんですか？」

私は今この瞬間にもミッドが不意打ち喰らって『オーデインの行軍』ができなくなるんじゃないかと不安になり、アスカさんに尋ねてみる。

「大丈夫大丈夫。敵は、さっきから攻撃してこないでしょ？」

「まあ、確かに。」

「何故かよくわからないけど、敵は突然始まった『クーフーリン』とミッド、そしてイースの戦いを静かに見守っている。」

「でも・・・」

「アスカちゃんの言うとおり、問題はないよ」

言い淀む私の言葉にかぶせるようにして言ったのはスピカさんだ。

「まず、あの『クーフーリン』、愛美ちゃんって言うんだけどね・

「」

「・・・名前と、言動とその他諸々が激しくミスマッチね。」

「見てわかるとおり、バトルとかがものすごく大好きなの」

「・・・大好きというより、最早あれは中毒ですね」

「そう。それで、もしも今の状態で誰かが攻撃しようとしてもすると、敵でも味方でも誰彼構わず瞬殺しちゃうんだよね」

「・・・ただの中毒患者なんじゃなくて、末期なのね。」

「それに、あの子は気が済めば勝手にどっか行くしね」

アスカさんはスピカさんの説明に補足を入れる。

まあ、要するに愛美さんとやらは強い相手と戦うことのみには興味がないみたいだ。しかもその戦いを神聖視して、邪魔をするものなら排除。なんとも扱いづらい人だ。

「・・・でも、二対一ですよ？しかも英雄級ヒーロー・クラス。それじゃあ、さすがに不利すぎじゃ？」

普通、神名持ちのような神級ゴッド・クラスを英雄級が倒そうとすれば、一に對して二か三の戦力が必要。

今回は神名持ちレベルの『神の鎧』と、元だけ『八足の駿馬』ハッキリ言つて一人でこの二人に勝てるのはあり得ない。しかもミッドは『世界樹の栗鼠精霊ラクトスケ』と呼ばれるPKやPKKのプロフェッショナルともいえる存在。強さは、信じられないけど神級達に勝るとも劣らないらしい。

……ヘタレのくせに。

「でも、あくまでそれはセオリー。セオリーはセオリーでしかないのよ」

アスカさんは私にそう言う。

意味を図りかねた私はアスカさんに尋ねてみる。

「『クーフリーン』の強さは異常よ。たとえ神級と一対一だとしても、気を緩めば心臓を抉られるわよ」

「……あの、もう少しソフトな表現はないんですか？」

「知ってる？『ゲイボルグ』の意味？」

『ゲイボルグ』。

これは投げれば必ず相手に命中するという魔の槍。

「まあ、ミッドの受け売りなんだけどね。『ゲイボルグ』って、心臓を食らうものって意味らしいわ。それに今のあの子は、もしかするとこのゲームで誰よりも強い存在かもしれない」

「そんなバカな……」

あり得ない。

現最強は、あのバカカップルの『伊邪那岐』と『伊邪那美』の夫婦だ。あの二人が組めば負けることはないと言うのが現状。

それに、セオリー通りなら英雄級ヒーロー・クラスに必要な戦力は最低で四。ただし、このバカカップルは規格外なので十ぐらいは必要な気がする。

「なら、こう言えば信じてくれるかしら？あの子が『ゲイボルグ』を持っていない時点での評価は、既にあたしとタイムン一対一張れるわ」

・・・正直、アスカさんが戦っているところを見ていたので何とも言えない。でも、オーデインと言えば『グングニル』。槍の扱いも相当なものだと思う。

「って、よく考えれば『ゲイボルグ』を持っていないとか、愛美さんが『クーフリーン』じゃないときじゃないですか」

「それは大きな間違いだね、ロゼちゃん」

スピカさんが心底楽しそうに言う。

「実は、愛美ちゃんは『ゲイボルグ』を持っていない時から『クーフリーン』って呼ばれていたんだよ」

それならそれでもつとおかしい。

『ゲイボルグ』を持っているからこそ、『クーフリーン』。それ以上に何も言いようがない。

「これもミッド君の受け売りになっちゃうんだけどね、実は『ゲイボルグ』って槍の名前じゃないのかもしれないんだって」

「・・・何言ってますか？」

もう、意味がわからない。

と言うか、ミッドは馬鹿なの？このゲームをしていれば、嫌でも神話の知識が少なからずつく。『ゲイボルグ』は槍。他のゲームでも漫画でも、なんか七人の英雄達が殺し合う奴でもそうだった。

「実は『ゲイボルグ』って、投擲方法の名前だったんじゃないかってさ」

「投擲方法？」

槍に、投げ方も何もあるのだろうか？

だって普通に自分の聞き手で持って、思い切り投げるだけじゃないかい。

「・・・あ、スピカあれ見て」

アスカさんはそう言って指をさす。

私とスピカさんがその指の先を見ると、そこには何かしらの構えをとる愛美さんがいた。

そして愛美さんは手に持った槍を・・・手から離れた。

クエスト19・猫妖精と魔氷狼と戦闘狂

Player - ロゼ

「手放した・・・!?」

私は目の前で起きた光景に驚くしかなかった。

敵の目の前で自分の武器を手放す、それは自殺行為以外の何物でもない。

まして、相手はあのイスだ。まあ、ミッドはヘタレだからいいとして、とにかくそんな相手に自分の武器を手放す意味が全く理解できない。

「違うのよ。あれが、このゲームでスキル『ゲイボルグ』を発動させるのに必要なモーションよ」

アスカさんの言う言葉の意味がわからずに、私はただその光景をじっと見る。

次の瞬間、愛美さんが動く。

「喰らいな、ゲイ・ボルグ　!!!」

愛美さんは、槍術スキルにも関らずスキル名の宣言を行う。

物理攻撃系スキルは最初の動きだけを実行すれば、後は勝手にアシストが働いてくれる。

そして唯一の例外があるとすれば、それはミッドの持つEXスキル スレイプニル。ミッドから聞いた話では、あのスキルは風と光の属性を持った、魔法スキルと物理スキルを混ぜ合わせたようなものらしい。だからスキルを言わないと発動しないんじゃないかと言っていた。

「・・・まさか!」

「そう、あれはEXスキルらしいわ」

「しかも、ミッド君とおんなじタイプ。だから、愛美ちゃんもミッド君が気に入ってるんだらうね」

システムのアシストが働いて、愛美さんの体が一陣の風みたいな速さで動く。

そして愛美さんの体が回転し、足が槍の石突あたりをとらえて・・・そのまま蹴った。

「ええええええええええええ!」

槍は光のような速さで飛んでいき、イースさんをとらえる。

イースは避けようとするけど、槍はイースさんを追尾。たぶん、

これが、ゲイ・ボルグ。相手に必ず当たる必中の槍。

イースに当たる・・・そう思った時だった。突然イースの姿が消え、槍は空を貫き、地面に突き刺さる。

「やっぱ、お前相手は相性が悪いなあ!」

「とか言つて、何で嬉しそうな顔なんだよ・・・」

ミッドが持ち前の速さでイースを助けたみたいだった。

どうも、あのスキルを回避するには直前で距離を稼いで避ける以外に方法がないみたい。

「って、何ですか、あれ!??」

私は驚きの方法で『ゲイボルグ』を投げた、と言うか蹴った愛美さんに驚きつつ、アスカさんに聞いた。

「『ゲイボルグ』が実は技の名前かもしれないって言うのは言っただでしょ？ミッドが言うには、ゲイ・ボルグって足を使った投擲方法のことを言うんだって」

『クーフリーン』、何てヤツだ。

「ゲーム的な能力値で判明してるのは『必中』、『クリティカル+50%以上』、『閻属性攻撃』ね」

「ちよつと、待って下さいよ。なんですか、『クリティカル+50%以上』って!?!」

攻撃すればほぼクリティカルでしかないってこと!?!?

「だって、投げれば心臓の部分に直撃だもん。強制クリティカルが発動するの」

「それに、初めての頃ミッド君がスキルのゲイ・ボルグをつかむと普通にダメージが来たから、貫通とか防御も効かないのかな?」

ただの反則だ。^{チート}

もう、それ以上の何物でもない。

「でも、それが愛美ちゃんの弱点」

「・・・弱点、ですか？」

スピカさんの言葉を図りかねて尋ねる。

「あのスキル、ゲイ・ボルグは一撃必殺のスキル。もしも外せば武器が手元になくなる。まあ、普通は当たるけどね。でも、ミッド君は例外中の例外。このゲーム内で唯一ゲイ・ボルグを避けられる偉い子なんだよ」

「・・・じゃあ！」

「そう、今がミッド君達の攻撃するチャンス・・・」

ミッドがいつものように消える。

次の瞬間には、ミッドは愛美さんの真後ろにいた。

「だから、俺には効かないんだよ！」

ミッドの両手に装備したカタールが愛美さんを襲う。

「私も、そんなこと考えないとも思っていたのかぁ！」

ただ、相手も黙っていなかった。

愛美さんは武器を装備していないにもかかわらず、スキル発動の光のエフェクトが発生。

すると次の瞬間には、愛美さんの両手の指の間にミッドのカタールの刃が挟まれている。

「って、『白刃取り』!？」

「・・・何、あれ？スピカ、あのスキル見たことある？」

「俺はないかなあ・・・でも、ロゼちゃんは知ってそうだけど
？」

知ってるも何もあれは日本神話領で習得できるスキル、Pスキル
『白刃取り』。

とりあえず、二人にそのことを教える。

「へえ。・・・でも俺達、何で知らないんだろっ？」

「そうよね。これでも、日本神話領ともやったことあるのよ？」

「だって、あれはネタスキルですから」

「「・・・」」

『ネタスキル』。これは要するにネタでしかないスキル。それ以上でもそれ以下でもない。むしろ以下かも知れない。

この『白刃取り』は誰も使わない、と言うか使えない。理由は簡単でもものすごく難しいからだ。日本神話領で格闘スキルを専門に使いこなす上級プレイヤーでも成功させることは難しい。

「あのスキルは、発動条件が二つあります」

一つ目が、自分の掌が相手の刃に対して水平で、片手で行使するつもりなら垂直であること。

二つ目がタイミング。どうも、このスキルを発生させるために一定の指定された空間内で手を握るか、挟むモーションを行えばいいらしい。でも、その範囲が何かしらの方法で教えてくれるわけでも

ない。

「でも、この二つを戦闘中に両方ともクリアするのはハッキリ言って不可能です。それに、これを使うなら盾使った方が楽です」

「・・・そりゃそうだ。一から十まで『白刃取り』を考えでもしてない限り無理だね」

「それに、あのミッドは超高速戦闘を専門にしている。・・・クーフリーン、もうあの子が最強、というか最狂でいいんじゃない？」

そんなことを話していると、ミッドが愛美さんに思い切り蹴られ、宙を舞う。

しかもスキルのエフェクトが散ったから、たぶん格闘スキルだ。

「お前、格闘スキル何ていつの間に・・・！」

「お前のためにだよお！いつかお前を殺るためになあ、一生懸命鍛えたんだよ！」

「明らかに上級者すぎるレベルだろうが！？イース！ヤツにとらせな！」

「・・・わかってる・・・！」

イースは愛美さんにタマをけしかける。

「だからあ、ザコは消えろ！」

そう言うと、愛美さんは素早くスキルを発動。

掌底がタマの顎に放たれ、続けて回し蹴りが側頭部に入る。タマは成す術もなく横に吹き飛ばされてしまった。

「封神演義系のスキル……！」

「なるほど、打倒ミッド君を目標にいろいろな所に行ったんだね」

「いやいやいや、基本的に他の領地は行かないですよね!？」

「……まあ、バレなきゃいいんだよ。実際、結構な人はいろいろ行ってるよ?」

大人つて汚いなあと思う瞬間だった。……子供だけだ。

そして、イースまでも軽くかわして槍を掴む。

「避けれるもんなら、空中でも走ってみな！」

マズい、ミッドは『ケットシー・ブーツ長靴』のおかげで、大抵のところは走れる。

けど、さすがに本物の『スレイプニル』のように空だけは走れない。

こんな時に、ゲイ・ボルグ 何て使われたら……!

「……タマ二号！」

すると、イースが自分の鎖をミッドの横すれすれに放つ。

「ゲイ・ボルグ！」

それと同時に一撃必殺の魔槍が放たれる。

……当たる。私がそう思った時、ミッドの姿が掻き消えた。

「・・・あれ？」

「どこ見てんだ、よっ！」

今度はさつきまで空中にいたはずのミッドが愛美さんの目の前にいた。

不意を打たれた愛美さんはその攻撃を受けてしまい、HPバーが少しだけ削れる。

そして攻撃を受けた愛美さんの頭には『防御』と言う言葉がないのか、ミッドに格闘スキルを仕掛ける。ミッドはその攻撃を受けまいと、いったんイースさんのもとに合流する。

「マジかよお、空を走りやがったー！」

「まあ、イースのおかげだけだな」

「・・・これこそ、嫁の力」

「全然違うからな。つか、何で知ってた？」

ミッドはそう言いながらイースさんの頬をつねり、左右に引っ張る。

そうすると、イースの頬がむにょんと伸びる。

「・・・ひたひ」

「さあ、吐け。そしたらやめる」

「・・・もっひよ」

「……」

ミッドは無言でやめた。

イースは冗談なのにといいながらも、その表情は何故か残念そう
だ。

「ふーん。その犬っコロの飼い主のおかげ、ねえ」

「ああ。俺はあの時こいつが飛ばした鎖を蹴って、地面に帰った」

「……これも、嫁の力」

「要するに、ストーキングして知ったんだな」

「……いやあ、ここまで面白いのは久しぶりだなあ！」

愛美さんはそう言いながら右手を上に向ける。

すると、狙い澄ましたかのように『ゲイボルグ』が空から降って
きた。

……何あれ、かつこいい。

「でも、お前邪魔」

そして、獣は牙をむいた。

Player・ミッド

ヤバい。ここでイースがいなくなると、俺の勝率が著しく低下す

る。それだけは死んでも回避しなくちゃいけない。

「イス、絶対にあいつには近づくな。俺を援護してくれ！」

「……………でも」

「いいか、今の俺にはお前が必要だ」

そうじゃないと、いろいろと死ぬ。

「……………わかった」

……………やけにものわかりがいいな。

まあ、そつちのが楽だけど。

いつもよりひどく平坦な口調になったイスが気にならないでもないが、今は目の前のヤツが先決。

「なら、そろそろこいつの性能テストと行こうかあ！」

「させるか、バカ！」

俺は迷わず愛美の真ん前に突撃する。

愛美がそれを見越して、槍をまっすぐ俺に突き出してくる。俺はその槍をほんの少しだけ動き、ギリギリの回避を行う。そしてそのまま右手のカタールを突き出した。

だが、よく知らない『白刃取り』のようなスキルでまた掴まれた。

「その勘で戦うのやめてくれない!？」

「お前相手には、これが最も有効なんだよなあ！」

いや、それができるのはお前だから！？

俺がそう突っ込もうとした時、愛美は武器を掴まれて逃げる事が難しい状況の俺に槍の突きを放つ。

俺は体をひねって何とか避けようとするが、ほんの少しだけかすってしまった。

ヤバイ。俺はひねった力で左手のカタールを一閃。ヤツのカタールを掴んだ左手を狙う。

だが、ヤツはそれにはお構いなしで俺に攻撃を加えてきた。しようがない……！

俺は右手のカタールを放棄してバックステップで回避した。そしてHPバーを確認する。

「……やっぱりか」

「どうだ？すごいだろ？」

俺はかすただけにもかかわらず、HPバーの10%と少し程度削られていた。

たぶん、神話にそっているとしたら……。

「追加攻撃の効果があるんだな」

「なんだよ、面白くねえな。お前はいつもそうやってすぐに当てちまう」

『クーフリーン』の持つ槍、『ゲイボルグ』は骨でできた鍔のようなものだったらしい。

そして、投げれば三十もの鍔つばとなって降り注ぎ、一突きすれば三十の棘とげになって破裂すると言う、ひどく惨殺さいころに向いているとしか言

いようのない能力を持つ。

俺がいた時、こいつはまだ『ゲイボルグ』を持っていなかった。あの時点でも俺はこいつが槍を持っていない時以外に攻撃しようとは思ったことはなかった。

だって、こいつ無意味に死ぬほど強いんだぞ！？直感のみで俺の攻撃を感じ取り、槍で受け止めて逆に攻撃を仕掛けて俺を窮地に立たせる光景は、マジでこいつが人間かどうか疑った。

俺、一応は『ラタトスク』の元隊長で、対人戦闘（PKK）のプロですよ？

「つーか、お前もこれでお得意の十六連撃 スレイプニル ができなくなっただなあー」

「そう、だから返してくんない？」

「いや〜」

ヤツは嬉しそうな顔で俺のカタールを自分の後ろへと放り投げる。そして槍を構える。

「……………しようがない！」

俺は投擲スキルを起動。

投擲ナイフのアイテムカードをいくつか握りつぶし、指の間にナイフを挟むようにして持つ。それをすかさず投げつける。

「イース！スキル使え！」

「……………やっと、嫁の力」

「もう、それでいいからさっさとして!？」

イースはわかったと一言だけ言う。

そしてイースはじやりりと鎖を鳴らす。

「ゴウ・フォミュラ！」

イースの体が動き、鎖が蛇のように鎌首をもたげる。

そして鎖は生きているかのような動きで愛美に攻撃を仕掛ける。

時に後ろから、横から、上から、そして前から。一撃を貰えばその場から一步も動くことのできなくなる凶悪な効果を持つ攻撃を繰り出す。

だが、愛美の方はそれを紙一重で避ける。

やまない攻撃に嫌気がさしてきたのか、愛美は必殺のスキルを再度使用する。

「うっとうしいんだよお！　ゲイ・ボルグ　!!！」

あの、鎖の雨の中でよくそんな攻撃をする暇を見つけれられるもんだと感心する。

だけど……。

「それを待っていた！」

狙いはイース。俺はスキルの発動中で動くことのできないイースの前に行く。

失敗は許されない。 ゆっくりと動く景色の中、その白い槍だけが普通のスピードでイースのHPを刈り取るうとする。

だが、俺にとってはまだ遅い……!

左手のカタールの剣腹で穂先を少し滑らせ、『パリィ』のモノマ

ネを実行。そしてタイミングを見計らってカターの刃で『ゲイボルグ』の切っ先を地面に叩きつけるようにして切る。

すると、『ゲイボルグ』は地面に突き刺さり止まってしまった。

俺はその『ゲイボルグ』を駆け上がり、宙へと身を躍らせる。これで、ヤツの後ろにある俺のカタールが見える。

「……………タマ！」

イスがこれまた絶妙なタイミングでタマに指示。

タマが愛美の後ろにあった俺のカターの片方を口にくわえ、空中の俺に投げる。

俺はそれを右手でキャッチし、構える。

「なっ!？」

「……………タマ二号！」

「だから、二号じゃない！」

俺はGスキルを中止したイスの声と同時に放たれた鎖を蹴った。そして地面に降り立ち、無防備な愛美に俺の最強の一撃を与える。

「……………スレイプニル！」

俺の十六連撃を喰らい、愛美のHPバーが一気に削れる。

そして、俺は愛美のHPを削りきった。

「やっぱり、お前は面白い。しかも強いなあ」

徐々に愛美の体がドットへと変換されつつ、愛美は俺にそう言う。

「イスがいなきゃ無理だったって。つか、お前も異常に強くな
ったよな」

「唯一の天敵のお前に勝ちたかったんだよ」
ライバル

「いや、相性が悪すぎるだけだって」

「でもなあ、また殺りたいなあ」

もう、いいです。

そう言いたかったが、言ったら言っただものすごく怖そうなので
やめておいた。俺だってその程度の空気は読める。

「次会う時まで、首洗つとけよ・・・！」

「・・・ゴメン、無理」

やっぱり無理だった。

そう言つと、何故か愛美は悪役のような高笑いをして消えた。
なんか無駄にカッコよかった気がする。

クエスト19・猫妖精と魔氷狼と戦闘狂（後書き）

用語集

クーフリーン・半神^{ハーフ}半人の英雄。投げれば相手の心臓を必ずえぐる『魔槍・ゲイボルグ』を使うことで有名な人。

魔槍ゲイボルグ・クーフリーンの使う槍。骨でできた銛のような形で、投げれば三十の鏃となって降り注ぎ、突けば三十の棘となって破裂する。また、『ゲイボルグ』とは投擲方法の名前ではないかと言われている。

ゲイ・ボルグ・EXスキル。詳細は不明。放てば武器を失う代わりに、相手をほぼ一撃で葬ることが可能。

クエスト20・アーサー王とトール

Player・ミッド

「イース、さんきゅ」

「……………あれぐらい、造作もない」

いや、何の打ち合わせもなく、ああもできるのはマジですごいと思う。

まあ、こいつは俺のストーキングをしているから、俺の戦い方をいくつか知っていると俺は踏んだ。

でも、あの状況で愛美が驚いてくれなかったら絶対に負けてたけどな。もう、あの戦法そのものが一か八かのでっかい賭けだったからな。

「タマもありがとなー。後で高級そうな獣肉奢ってやる」

だが、タマは『んなもんいらねーよ、ツケ!』とでも言いたそうな表情で俺を睨みつけてきた。

…………俺の被害妄想かもしれない。

「『グリーン・ユグドラシル』、作戦開始!」

戦場にトムの大きな声が響き渡る。

その言葉で止まっていた時間が再び動き出す。俺達はいち早く体制を立て直し、防衛網を築く。そして俺とイースはいったんアスカ達の元へと戻った。

「すまん、時間がかかった」

「さすがにあの子相手じゃ無理があるわ。ロゼちゃん、ミッドと
イスに回復してあげて」

「分かってます」

そう言うと、ロゼはすぐに回復魔法スキルを使い、俺とイス、
そしてタマのHPを回復してくれた。

「ありがとう。アスカ、準備は？」

「それがねえ、ミサちゃんがないのよ」

何してんだよ。でも、ミサが遅れるとか珍しい。普段は約束の三
十分前から集合場所で待ち合わせるような健気さだぞ、あいつ。

「すみません！遅れましたー！」

そんなことを思っていると、当のミサが現れた。

「いーよ、いーよ。さっき、ちょうどミッド君達も来たところだ
ったからね」

師匠がそう言うと、イスに目配せをする。

イスは「つつなずくとミサの手をとる。」

「……タマに乗る」

「お、お願いします」

イースはタマに伏せをさせるとその背中にまたがり、ミサもそれを真似してまたがる。

そしてイースがタマの頭をなでると、タマは音もなくすっと立ち上がる。

「じゃ、あたしもお願い。『スレイプニル』」

「へいへい。『オーデイン』様のためとあらば……」

俺はしゃがみ、背中をアスカに見せる。

アスカは俺の背中に体を預けるようにしておんぶされ、俺の首にその腕を回す。

「よし、ライト君！今から俺達は行くよ！」

「分かりました、気をつけて！」

「新米神様のお前こそ頑張れよ！」

「……言ってる」

俺達は周りにいるプレイヤー達から様々な激励を受け取るとともに、敵陣へと躍り出た。

Player - 『アーサー王』

『クーフーリン』が負けた。

まさか、そんな光景が見られるとは思わなかった。

あの戦闘狂はケルト神話領、最強の切り札だ。ただし、自分が強

いと認める相手にしか戦闘を行わず、強いヤツがいなかったら適当に途中で抜けるようなヤツだ。『暇だから神級狩^{ゴッド・クラス}ってくる』とか言いながら。

そんなあいつが始まった瞬間に、ゲイ・ボルグを放ち、しかも俺達でさえ知らなかった『魔槍・ゲイボルグ』に、格闘スキルを使つてまで戦うほどのヤツがいたようだ。

遠目からでよくわからなかったが、猫妖精^{ケットシー}が三銃士のような格好をしたやつと、噂の『グレイプニル』と戦っていたように思える。

しかも驚くことに、『グレイプニル』はその猫妖精^{ケットシー}の援護をしていただけだった。途中、Gスキルを使ったようではあったが、あれは囿^{ケットシー}で、むしろ猫妖精の放った何らかのスキルが本命だったようだ。あれほどの強さなら、名前が知れ渡っていてもおかしくない。と言つか、ここまで追い詰められてやっと使う気になったという点が腑に落ちない。

一体、ヤツは何者だ？……いや、見た気がするが、思い出せない。

「……なあ、ローラン」

俺は自分の副官の『ランスロット』を呼ぶ。

「なんすつか？」

「あの、異様に強い猫妖精^{ケットシー}を知らないか？」

「……タケルの知らないヤツを、俺が知ってるわけないじゃないかい」

タケルとは俺の名前。

まあ、俺はそれなりに古参のプレイヤーだが、『円卓騎士団』自

体は割と新しいギルドだ。

こいつとは古い付き合いだけど、それで知らないとなるとなあ。。。

「でも、俺もなんか見た気がするんつすよねー」

「やっぱりか」

どうもローランもおんなじことを考えていたみたいだった。

その時、前がにわか騒がしくなる。

俺はどうしたと声を出そうとしたその時、三つの影がすぐ近くを駆け抜けた。一瞬で誰かわからなかったが、後ろを振り返るとどうにかわかった。

一人は、オーディンお気に入りの戦乙女。二つ目が『グレイプニル』と見知らぬ少女。最後の影が。。。

「さっきの猫妖精ケットシーと、オーディン!？」

「敵はあれだけだ!迎撃しろ!」

遠くから仲間の怒声が聞こえる。

だが、敵の攻撃部隊があれだけ?

「。。。おい、あいつら以外の敵はどうしてる?」

俺は近くにいたプレイヤーに戦況の報告を尋ねる。

「あ、はい。えっと。。。どうも、敵本陣は全く動いてないです。と言っか、攻撃するつもりがないみたいです」

「・・・ちよつと、それっておかしくないっすか？」

おかしい。敵には後がない。それにも関わらず籠城まがいな作戦を選んだ。

ただ、攻撃メンバーが厳選され、その中にオーデインがいると言
うことは・・・!?

「ヤバい、ローラン！」

「俺も思いだしたっすよ。あれ、『スレイプニル』っすね」

ローランはニコニコとしているが、残念なことにその膨大な量の冷や汗が隠せていない。いや、俺も似たような状況な気がしないでもないけどな。

「あの、二人とも大丈夫ですか？顔色が悪いですけど・・・」

「そんなことより、全軍に通達だ！全員、敵本陣に総攻撃を仕掛ける！」

「は、はあ！？作戦はそんなものじゃ・・・」

「タケルの言うとおりっす。あの『スレイプニル』をやつつける可能性のある『クーフリーン』は、ヤツの手でやられたからっすね」

「いいか、やつ等は昔、エリア・ウォー領地争奪戦では最強を歌っていたんだ。そんな奴等が追い詰められてガチで来やがったんだよ！？一年前にやめたくせにな!？」

「す、すみません、え、HPが・・・!?」

「タケル、ここは俺達が速攻でロキを潰した方が早いっす！ヤツは、戦闘能力は俺達と比べればザコっす」

確かにそうだ。

あの真面目ロキは他の神と比べればはるかに弱い。

「そうだな・・・では、ダブル・ナイツ『円卓騎士団』出陣だ！」

Player-ライト

「ダブル・ナイツ『円卓騎士団』が来ました！」

「・・・思ったより早いけど、まあいい。防衛ラインを下げて」

「わかりました！」

ここまでは先輩の言うとおりだ。

時折先輩からショートメールで指示が来るけど、今回の指揮全般は俺に任されている。

なら、次に打つ手は・・・。

「俺が前であいつらをできるだけ喰いとめる。魔法使い、弓兵も援護をお願い」

俺はそれだけ言うと、本陣の前に行く。
すると、ちょうど向こうも出てきた。

「……『アーサー王』」

「『トール』か。どけ、と言っても無意味だろうな」

そう言つとアーサー王、タケルはカードを取り出し握りつぶす。そしてその手に現われるものは、十字架のような形の騎士剣。あまりに有名すぎる伝説の剣……。

「『聖剣・エクスカリバー』、か」

「今は、『木剣・エクスカリ棒』だがな」

……まあ、確かに。

本来、『神器』はその名前を言つとGスキルが行使できるようになる。名前を言う前にGスキルを発動させてみようとしても発動しないのは確認済みだ。

そしてさらに重要なことが、『英雄級』ヒトロー・クラスは『神器』がない。その、唯一の例外が『アーサー王』の持つ『聖剣・エクスカリバー』。今でこそ見た目はただの木刀だが、Gスキルを使えるようになると、その力はすさまじい。

「だが、今回は余裕がない。『エクスカリバー』！」

タケルがそう叫ぶと木刀が光を帯び、一振りの真剣に変わる。

「ソード・シース！」

続けて叫ぶのはGスキルだ。

やつのGスキルは『聖剣の鞘』の召喚。アーサー王がエクスカリバーを鞘に納めていると、アーサー王は死ぬことがない。そして、

このゲームでもその力が反映された。

タケルはエクスカリバーを鞘におさめ、戦闘の邪魔にならないように背中に装備する。そして、更にもう一枚のカードを握りつぶす。もうひとつも剣の形をとる。エクスカリバーとよく似ているけど、微妙に色合いが違う。

あれが、ヤツのもう一つの神器、『王剣・カリバーン』。

「準備は整った。これで、俺はお前に負けない」

「・・・」

俺は何も言わずに、『雷槌・ミヨルニル』を取り出し、いつでもGスキルを使えるようにしておく。

そしてひどく柄の短い、金色の大槌を構え、俺はヤツの一挙手一投足に注意を払う。

タケルはマジでヤバイ。ヤツの特殊性はその回復量。剣を鞘に納めていれば常時回復リジエネーションし、更に状態異常にかからない。バフ等のステータスを下げる補助スキルも効かない。しかも、常時回復量が数秒ごとに10%と言っ上げつなさだ。『スレイプニル』のあの攻撃でもしないと削りきれない。

・・・つか、よく考えると、あいつの攻撃喰らわなくて済んだ俺ってある意味ラッキーかも。

「来ないのなら、こっちから行く！」

相手が俺に向かって突っ込んでくる。

俺はタイミングを見計らって詠唱していたスキルを発動する。

「スンダ・ウースラ！」

『トール』の十八番、雷の魔法スキルだ。

天から轟音とともに閃光が走り、タケルに直撃する。

だが、攻撃の手は休めない。

今度はミヨルニルをタケルがいるであろうところに思い切り叩きつける。

だが、手ごたえがない。たぶんヤツはこの大槌を避けた。

俺はとりあえず、バックステップを踏んで距離をとる。そして早口で詠唱して、魔法スキルを発動。

「エアル・アフリル！」

地面が鳴動し、石や岩が地面から浮く。

そしてそれらは四方からタケルを押しつぶす。

普通ならこれで大抵のプレイヤーをやれるが……。

「少し、驚いたな。『トール』は雷の神じゃなかったのか？」

「……あんまり知られてないけど、『トール』は農耕を司る神でもある」

そのおかげで俺は雷属性の魔法スキルの他に大地属性の魔法スキルを使える。

タケルのHPは半分ぐらいがなくなっている。ただし、既に常時^{リジエネ}回復が働いて回復している。見る見るうちにHPバーが全快になった。

「……どうやって倒す？」

「無理だな。俺を倒すことは、例えあのバカアップルでもな！」

「……それ、本気か？」

「……いや、さすがに調子乗ったかも」

あれに打ち勝てるヤツがいたら拝みたい。むしろ崇める。崇拜する。

まあ、確かにあの二人相手に一番持ちこたえることができそうなのはこいつだけだ。

だが、マジでどうする？

……いや、俺の役目はこいつ等の足止め。こいつに勝つことが目的じゃない。それに、こいつの戦い方は回復力任せのゴリ押しみたいなものだ。俺はHPとSTR、たまにINT系にステータスを振り分けている。だから、早々に負けることはない。

「だから、ここは通さない！」

「……俺は回復力任せに戦うだけのプレイヤーじゃ、ないぞ！」

そう言うと、タケルは俺に猛攻を仕掛ける。

いくつものエフェクトが走り、剣技スキルを発動させる。俺はそれをバランスの悪い大槌で何とか防ぐ。

でも全部を防ぐことはできず、俺のHPが徐々に減って行く。

ヤバい……！

「負けるか！」

俺も槌技スキルを発動させる。

破壊力のある一撃がタケルを狙う。だが、それをタケルはいとも簡単に避ける。

そしてカウンターとばかりにヤツはスキルを発動させる。

「喰らえ、 キングス・ブレイド！」

ヤツがそう吼えると、剣が光り始める。

そして俺を十字に切りつけると、とどめとばかりに突きがクリーンヒット。そして剣の光がレーザーのように俺に放たれる。

「何っ!?!」

俺は思い切り吹き飛ばされ、大ダメージを負う。

なんだよ、あのスキル……!?!

「これが、カリバーンのGスキルだ」

カリバーンにまでついてるのか!?!

だが、タケルの言葉はまだ続いた。ヤツは背中 of 剣をしゅっと抜き、構える。

「そして、これがエクスカリバーのもう一つのGスキルだ。 カイザー・スラッシュ！」

今度はただ剣を横に大きく薙ぐだけのもの。

ただし、薙いだところから三日月の形の斬撃が放たれ、俺どころか、後ろのプレイヤー達にまで届く。

そして、カリバーンのスキルで既に大ダメージを受けていた俺はHPがゼロになった。周りにも、何人かHPがゼロになってしまったプレイヤーがいるみたいだ。

「マジ、かよ」

俺はドットに変換されつつ、そう眩くことしかできなかった。そして、タケルは俺の横を堂々と通り過ぎていく。

「なっさけないわね」

「ん？」

俺が声のした方向を見ると、そこには後方支援をしているはずのロゼさんがいた。

肩に剣を担ぎ、タケルと対峙する。

「アンタが噂の『アーサー王』？」

「そうだけど？」

「なら、ここから先は通行止めよ」

そう言つと、ロゼは猛ダッシュでタケルに駆け寄り、不意を突く。タケルはとっさにロゼの剣をはじき、再び自分の背中に剣を収める。そして、カリバーンを装備する。

ロゼさんは流れるような動きで剣を動かし、スキルを発動。そして発動したスキルに続けて更にスキルを発動と、相手に隙を与えない。

「・・・お前、面白いな。名前は何て言つんだ？」

「・・・」

「・・・なんだよ、スキルの発動に精一杯で名前も言えないのか？」

そう言うと、さっきまで防御に専念していたタケルが動く。
ロゼのスキルに合わせてヤツもスキルを発動する。
剣と剣が激しくぶつかり合い、スキルのエフェクトが互いの間で
はじける。

「だが、甘い！」

そう言うと、タケルは一瞬のすきをついてロゼさんに突きを放つ。
ロゼさんはその攻撃をもろに受けて吹っ飛ぶ。

「……まあ、なかなか強かった。名前ぐらい聞いてやる。言え」

タケルは余裕の笑みでロゼさんにそう言う。
そして、ロゼさんは何故かここで不敵な笑みを浮かべる。

「……なんだ、その顔？」

「……黄泉帰りの呪言　！！」

すると、ロゼさんを中心に金色の光のエフェクトが発生する。

それは俺達を巻き込み、効果が発動した。

俺の体からドットの光が消え、ゼロになったはずのHPが突然全
快した。

信じられない光景に俺とタケル、さっきHPがなくなったプレイ
ヤー達はただただ驚くだけだ。

「まったく、何が名前を言えよ。無理だっつもの。こっちは、蘇生魔
法スキルの熟練度足んなくて、長ったらしい詠唱をしなくちゃいけ
ないのよ。……祈禱の祝詞」

そう言つと、ロゼさんの削られたHPが回復して全快になる。

「それに、こっちはごく普通のソロプレイヤーなんだから、あんたみたいなバケモノに勝てるわけがないでしょ」

「ソロ、プレイヤーだと？てか、お前、そんなハイレベルな回復魔法スキル……！」

「そうね。でも、無茶苦茶なダメネコとバカ魚のせいで回復スキルは既にほぼカンスト」

「回復魔法スキルを、カンスト！？お前、どんな廃人だよ！？」

「アンタ達みたいなやつらに言われたくないわよ」

そう言つと、ロゼさんは剣を構え、俺の横に来る。

「さあ、そのこの新米神様、こいつをぶっ飛ばして！」

「お前がやるんじゃないのかよ！？」

思わず突っ込んでしまった。

「ツチ、そこの回復を潰すか！」

そう言つと、タケルはさっきと同じ構えをとる。

「ヤバい、避けよ！」

「キングス・ブレイド！」

「Gスキルね。堅忍不拔の陣！」

タケルの声に続いてロゼさんの声が響く。

すると、俺達を中心に半透明のドームが形成される。

キングス・ブレイド が結界に阻まれ、無残にも散っていった。

「甘いわね。日本神話領の回復とかのスキルは、補助系も山のようにあるのよ。それに、このスキルはあの『ポセイドン』のGスキルも止めれることは確認済みよ」

「日本神話、だと？それに、『ポセイドン』？だが、日本神話でそんなヤツ！・・・お前、何者だ？」

「まあ、いい加減に教えてあげるわ。私はロゼ、『神官騎士』よ」

「・・・破壊僧の間違いじゃ？」

「うっさい黙れ！」

クエスト21・トールの再挑戦

Player・ミッド

「ダメだ、敵はやつつけるな！」

「そう！適当にHP残しておけば、次は回復するから時間が稼げるよー！」

「……………わかった」

俺と師匠はイースにアドバイスをしながらも邪魔な敵だけを適当に相手していく。

こういう時は、最後まで敵を倒すと、その空いた場所に次々と敵がなだれ込んできて、相手に動ける隙を作ってしまう。だから敵は最後まで倒さず、動きを止めておいた方がいいというのが俺達の研究成果だ。

「師匠、あとのくらい！？」

「わかんない！けど、さっき『テーブル・ナイツ円卓騎士団』が動いたって報告が来たから急いで！」

「わかってる！」

「やつほー！みんなのアイドルのオーディンちゃんが通るわよー

！」

「お前は真面目にやれよ！？」

「アスカは何故か有名人よろしく、手を振りながら自分の宣伝をしていた。」

「……………こいつ、蹴落としたい。」

「ここは通さ」

「『邪魔!』」

「俺と師匠、アスカの声とともに突然目の前に出てきたやたらとついでに男が一瞬で消えさる。」

「……………ミスってキルしてしまった。」

「と言うか、いい加減うっとうしくなってきた。」

「師匠、後一分で着くと思う?」

「……………ああ、なるほど。まあ、つかなくてもミッド君だけで行けばいいと思うよ。」

「じゃ、師匠頼むよ。」

「……………何のこと?」

「俺はイースの質問には答えない。」

「まあ、答えはすぐにわかるし。」

「戦乙女の導き!」

「師匠の体が光を放ち始め、スピードが一気に上がる。」

「これは、戦乙女たちだけが使える専用スキルで、一時的に自分のステータスを上昇させる。時間は六十秒…………。」

「今のうちに行くよ!」

「おっけー、師匠!」

そう言つと、俺と師匠は示し合わせたように地面を思い切り蹴り、軽くジャンプ。

そして相手の肩や頭の高さまで飛んで更にそいつを蹴る。

狙われやすくなってしまつが、今の俺達を補足するのは『クーフーリン』、『アルテミス』あたりでもない限り無理だろう。

文字通り相手の頭上を駆け抜ける。タマは後ろから敵を薙ぎ払つてこちらに必死に着いてきている。

やっぱり、身軽な分こつちのが楽っちゃ楽だよな。

タマは『ナゴヤ』みたいな建物を駆け上がることは比較的楽だが、こういう人混みを駆け抜ける時はその巨体がどうしても邪魔になる。

「ミッド、あそこ!」

声に反応してアス力が指をさす方向を見ると、そこには天幕や、投石機があった。

ケルト神話領の特徴で、ケルト神話領は中世あたりの兵器がたくさんある。その代表的なのが大型兵器。高レベル制作スキルを持っている人たちが作ることでできるもので、エリア・ウォー領地争奪戦ではよく見かける。

「……一応、連絡しておいた方がいいですか?」

「うーん……。今回、『ラタトスク』達の行動がよくわかってないからなあ……」

師匠は伝えるべきかどうか悩んでいる。

こういう相手の戦略兵器等の破壊は『ラタトスク』の裏工作のお仕事だ。ただ、今回はトムがやつ等の仕事は忙しいから無理とか言っただけで今回はナシになっている。

「まあ、連絡しておくだけしておこう。ミサ、頼む！」

「はい、わかりました！」

俺は後ろの方でタマにまたがっているミサに言う。

ミサは手早くショートメールを起動し、ロキ宛にメールを作る。素早く内容を打ち込み、作業は終了する。

「これで、連絡できたはずですよ！」

「じゃ、問題の天幕に突撃だ。ここから敵の攻撃は激しくなる、注意して！」

そして俺達が駆け出そうとした時、いきなりシステム音が響く。

こんな時になんだよと思いつつも素早く操作。どうも、ショートメールのようだ。内容はさっき俺達がトムに報告したことだ。そこには戦略兵器を長距離魔法スキルや狙撃でダメージを与えると書いてあった。

「仕事速い!？」

「……ちょっと、五秒くらいしか経ってないわよ?」

「……さすがリーダー」

いや、絶対に無理だから。少なくとも俺じゃ無理。
まあ勢いがそがれたでもないけど、突撃と行くか。

Player - ロゼ

「ほらほら新米神様！頑張らないと負けちゃうわよ！」

「手伝えよ!?!」

「ライトお前、か弱い女の子に手伝えとかマジ最低だな」

「そうよそうよ、アンタ、よくわかってるわ」

「騎士ですから!」

「ロゼさん、味方なの!?!敵なの!?!」

私は何度目になるかわからない常時回復補助魔法スキルを使い、
ライトのHPを一定に保つ。

私は、攻撃に転じたくてもできない。

相手がそれを許さないようライトの猛攻を仕掛けているからだ。

・・・こんなの、ミッドかカイなら既に八つ裂きか圧殺で決着が
ついている。

二人は地味に強かったんだなあーと思いつつ回復をしまくる。

「アンタ、ヘタクソなのよ!もっとミッドとか見習え!」

「うるさいですよ!?!」

「そうだぞ、ヘタクソなんだからアドバイスは聞いとけ」

「こいつらウゼエ!？」

でも、本当にヘタクソだ。

このチビツ子は自分のSTRを使ったごり押ししか考えていない。しかも、『ミヨルニル』は柄が短いためにリーチが剣ほどしかない。それなら、小回りのきく剣が有利だ。

「ライト、よく聞きなさい！アンタのその武器は特殊だから・・・」

「そんなの、わかってる！」

・・・殺^ちつてもいいかしら？

でも、こいつがないとアスカさんの貞操の危機が・・・。
つく、ここはお姉さんの余裕で心を広く持つしかない。

「ライト君、君の武器はリーチが短い。だから・・・」

「知ったかぶってんじゃねえ！」

「・・・」

とりあえず、剣を収める。

そして、普段めつたに使わない格闘スキルを使おうと決意。

「ふん！」

「どわあ!？」

「!？」

私は格闘柔術スキル、 背負い投げ を発動………チビツ子に。

私の行動に二人の男が目を白黒させる。私はそれを無視し、ライトに言う。

「いい、よく聞きなさい。じゃないと、アンタはあの『アーサー王』に負けるわよ?」

「……」

茫然としているライト。

……ダメだこいつ、何とかしないと。

「アンタのその武器はね、槌系にもかかわらず柄がやたらと短いよ。だから、リーチがほぼ剣と一緒なの。わかる?」

私が顔を覗き込むようにして言うと、ライトはがくがくと首を振る。

たぶん、この首筋にあてている剣が効いている。

「だから、アンタは剣の間合いで戦わなくちゃいけないのに大槌のまんまやってるもんだから体のあちこちがガラ空きのよ」

そんな剣で別に相手の体勢が崩れたとかでもないのに剣を大ぶりで振るとか、そんなのバカの極み以外の何物でもない。というかバカだ。

わざわざ相手に自分のスキを見せるとか、ミッドが使っいやらしい戦法以外に見たことがない。

「いい、もう一回言うけどアンタはもって考えて戦わなくちゃいけないのよ。急に剣の間合いで戦うのは無理としても、スキルなら何とかなるはずよ。まあ、相手もモーションキャンセル狙ってくるに決まってるけど、やらないよりはマシ。回復は私が全力でサポートするから」

そう言うとライトを立たせ、再びアーサー王の前に立たせる。

「待たせたわね。準備完了よ」

「あ、ああ・・・」

向こうは微妙な返事をしつつも剣を構える。

そして、ライトも大槌を構える。

先に動いたのはアーサー王。剣の素早い動きでライトを翻弄する。そして、ライトはその動きに対していつものような攻撃を放つ。

「ダメよ！このバカ！そんなんじゃ相手に攻撃してくれって言ってるようなものじゃない！」

「わ、わかってる！」

そう言うと、ライトはスキルを使う。でも、何でよりによってそれなの！？

ライトが使ったのは全神話領に共通して存在する槌スキル グラ・スマッシュ。これはシンプルに相手の頭へ自分の槌を叩きつけるとても強いスキル。だけど、タメが大きく、対人戦闘や自分よ

り攻撃の素早いモンスター相手には全く使えない。

「なんなの、アンタ素人!？」

「そんな力とHPに頼った戦い方じゃ、俺どころかロキにさえ劣るぞ!」

そう言いながら、アーサー王はライトに切りつけた後、バックス
テップを踏む。

それで完全に避けられる・・・!

「・・・あれ?」

「・・・HPが、削れた?」

「・・・何で?」

三人が三人ともよくわかっていない状態に陥った。
でも、さっきのは確実にかわせるタイミング。それにも関わらず、
アーサー王はダメージを受けた。まあ、すぐに全快したけど。

「・・・とにかく、スキルを使って!」

「あ、ああ!」

そう言うのと、ライトは無難なスキルを発動させる。
でもやっぱりと言うか、槌系はどうしても大きな動きになるスキ
ルが多く、相手にダメージを与えづらい。
でも、何故か当たる。

「どういうことだ！？タイミングが・・・！」

アーサー王もよくわからず、困惑するだけだ。
でも、何で相手もわかっていないの？

「・・・ねえ、ライト！質問があるんだけど？」

「無理、です！スキルの発動に集中して、るんで！」

「それよ！アンタ、槌系スキルってどのくらいの頻度で使うの！？」

「・・・俺はスキルは魔法中心です！」

・・・もしかすると、もしかするの？
いや、でもそれって・・・いくらなんでも気づかないって・・・。
でも柄も短いし・・・。。。

「ライト。たぶんそれ、大槌系のスキル発動が地味に速い！」

「はあ！？物理攻撃スキルに速いも遅いもあるか！？？」

そう、普通は無い。

どんなに熟練度を上げて、補正がかかるのは攻撃力やその他の
補助的な効果。

でも・・・。

「それは他の槌と違って柄がやたらと短い。だから、その分だけ
速くなってるのよ！」

「それなら、小槌と同じで威力が低くなるはずだ！」

「だからそれは分類は大槌なんでしょ？それに、それは普通に強い。意味わかるわよね！？さっきの私の動きを参考にしなさい！」

「さっきの動きって・・・」

「来るわよ！」

私が声をかけたその瞬間、アーサー王が動く。

ライトに向かって次々に剣技スキルを連発してくる。

そしてライトはやけくそだとか呟きながら槌技スキルを発動。

槌系にしては異様に速いスキルをアーサー王は次々に受ける。そ

して、槌系のスキルの特徴である高威力によるダメージで常時回復リジエネーションが徐々にだけども間に合わなくなっていく。

「速い・・・！」

「マジかよ」

「つか、自分で気づきなさいよ。アンタ、バカ！？」

まあ、半年ぐらい前に入った新人神様だからしょうがないの？

・・・でも、カイが言うには普通に強いはずなんだけどなあ。やっぱり、あの二人は相当強いよね。

「あいつらがいれば、私は最強な気がするわ」

「助けて！？HPがっ！」

泣きごとを言うライトに回復魔法スキルを放つ。
すると、HPが回復してまたも全快。ついでに常時回復系のスキルもかけなおしてある程度のダメージを軽減する。

「ツチ！これじゃ殴り合いだ！？」

もう、アーサー王のHPは結構ピンチだ。

常に回復しているとはいえ、それも完全じゃない。徐々に、徐々に削られてあと数回ダメージを受ければHPがゼロになるのは明白だ。

「これで、最後だ！」

ライトもとどめを刺そうとスキルを発動させる。
だが、何故か発動しない。

「クールタイムかつ！？」

「この、間抜けが！お前こそ、Gスキルで……！」

……何やってるんだろう、このバカ。

「そう言う時のための魔法スキルでしょうが」

「あ、そうか」

詠唱の必要がない下位魔法スキルを発動し、攻撃。不意を打たれたアーサー王のスキル発動をキャンセルさせることに成功。

もう、このド素人な戦いを見ているのが面倒になってきた。

ライトは今度こそとどめを刺すべくアーサー王にその黄金の槌を

叩きつける。

「・・・セーフっす」

「アンタ、だれ？」

やってきたのは騎士の恰好をしたイケメン。

・・・私の好みにはカイの方がいいと思うけど。でも、カイと付き合っかっていうと疑問が残る。いや、今はそんなことはどうでもいい。

「ローラン、助かった！」

「オツケーっす。つい最近までツールはザコだったと思っているんですけどね」

「その女がアドバイスした途端に動きがあらゆるさまによくなっ
た」

「なるほど、戦闘はそんなだけサポートに特化してるっすね」

「・・・回復をカスタスさせるまでにな」

「それはそれは、っす！」

気合の声とともにライトの大槌を斬り払う。

ライトは態勢を崩されないようにわざと力を後ろへと流し、その勢いで私の隣に来る。

「で、あのイケメン誰？」

「『裏切りの騎士』だ」

「なるほど、名前から考えるに『円卓騎士団』の一人ね」

「ああ、ヤツは水系の魔法スキルと剣技スキルの使い手だ」

「・・・ひよつとして、『アロンドイト』って武器持ってて、Gスキル持ちとかは？」

「Gスキルは無いと思う。今までに見たことがない」

「・・・でも、油断は禁物ね」

私は緊張しつつも剣を構える。相手は英雄級ヒーロー・クラスが二人だ。緊張するなって言うのが無理。

そして頭の中に幾つかの補助魔法スキルを思い浮かべ、いつでも発動できる準備だけは忘れない。いざという時は奥の手のスキルだつて使うしかない。

「タケル、意外にも敵の壁が厚いっす。たぶん、その回復魔法の使い手のせいっすね」

「ご明察ね。私がちよくちよく回復して、常時回復のスキルを使ってるからね。HPがゼロになっても、ドットに変換されてる途中なら戦線に復帰させることができるわ」

「・・・何て娘っす。しかも、剣技スキルも相当に鍛えてあるっすね？タケルならまず最初にアンタからやるっすからね。ライト君に邪魔されてたってセンもあるっすけど」

「さあ？ 案外、アンタが私のスキルを喰らえばわかるかも」

「遠慮しとくつす。俺はどっちかと言うとMじゃなくてSなんつすよ」

「激しくいらぬ情報ね」

「全くだ」

私とライトは目配せし、どうやって敵を倒すか模索する。

でも、相手に隙が見当たらない。しかも、私は剣技スキルがあるとはいえ本職は回復と補助。たとえこっちにライトと言う神級ゴッド・クラスがいたとしても、英雄級ヒーロー・クラスに勝てる自信がない。しかも、この新米神様はヘタクソだし。

まあ、比べる対象が間違っているような気がしなくてもないけどね。

「では、行くつすよー！」

その言葉とともにランスロットとアーサー王が同時にこっちへと駆けてくる。

それを向かい打つべく、私は剣技スキルを発動させようとし、ライトはとりあえず二人を足止めするために魔法スキルを発動しようとする。

「アクア・インパクト！」

先に仕掛けてきたのはランスロット。水系の魔法スキルで私達に攻撃を加えようとする。

でも、この程度なら・・・！

「守護の陣！」

私とライトの周りに結界が張られ、魔法スキルを遮断。こっちは全くのノーダメ。こんな魔法スキルで倒そうなんて、私を舐め過ぎね。

「タケル！」

「ああ！」

私が防御用スキルを使ったのを確認すると、ランスロットはアーサー王に一言だけ声をかける。すると、それだけで意味を察したアーサー王は素早く私達の横をすり抜けていく。

「しまった、これが狙い・・・！」

「よかつたつす。君が回復と補助のハイレベルプレイヤーで」

防御魔法系スキルを使っている時、その効果範囲内から出ることができない。効果範囲内から出たい時は、このスキルがやられるか、スキルの効果時間が終わったときだけ。

ミスった・・・！

「ライト、ファントムさんが危ないわ！」

「分かってる！」

そう言うと、私達は目の前のランスロットを無視してアーサー王

を追いかけてようとする。

でも、さすがに相手もその気は全くないみたいだった。

私達の進路上に水の魔法スキルが放たれ、足を止めざるを得ない。

「行かせると思ってるっすか？」

しゅっと『アロンドイト』を抜き、私達にその剣先を向ける。

どうもこの人をやっつけられない限り、アーサー王に追いつくことは難しそうだ。

「ライト、行きなさい！」

「だから、お前が行かないのかよ!？」

そう言いつつもライトはランスロットに突撃していく。

ランスロットはアーサー王と違い、魔法スキルを多用した戦法でライトに攻撃を加える。

どうも、ランスロットは剣よりも魔法に重点を置いてるみたいだ。

「そいつは、あのアーサー王よりは強くないわ！」

「アンタのおかげで何とかかなりそうだ！」

そう言うと、ライトはクールタイムが切れて使用可能になった大槌系のスキルを連発する。地味に速い大槌スキルの発動にランスロットも戸惑いを隠せない。

「アドバイス一つで、ここまでっすか!？」

「ユ・フ・ツラスこれでも、神級の回復と補助をしてんのよ!！」

私はダメ押しとばかりにランスロットに剣技スキルをかます。
私が得意な剣技スキルのコンボで流れるような攻撃を繰り出す。
本来このスキルは日本刀でするともつと素早く、流れるように動けるらしいけど、今のところ日本刀で回復魔法に補正がつくものがないのでこの『祈りの剣』で我慢している。
・・・今度、あいつに頼むしかない。

「ゴット・クラス神級とか、アンタ何者っすか！？それに回復使う上に、その剣技スキルっ！？」

「そこだ！」

ライトはスキルを発動させ、ランスロットを叩き潰す。

たったの数発にも関わらず、ここまでのダメージを与えられるのは、さすが神名持ちとでも言うか。まあ、これでほんの少しだけ汚名は返上できたかしらね。

「じゃあ、今すぐあいつを追っわよ！」

「補助はいいのかよ!？」

「アンター一人で勝てるならここに残るわよ！」

ぐっと言葉に詰まったライトを引っ張り、私達はアーサー王のあとを追いかけた。

クエスト22・ロキの策略

Player - ロゼ

「どこまで行ったのよ!？」

「分からない!けど、転移結晶は無効してあるからヤツは階段を使うしかない!」

「私達も同じだけだね!」

私とライトはアーサー王のあとを追って世界樹ユグドラシルの中の階段を駆け上がっていた。時折ドットとなつて消えていく人がいるけど、今は蘇生している時間がない。私は申し訳なく思いつつも階段を駆け上がり続けた。

どんなに駆け上がっても一向に見当たらない。既に第五階層、本格的にまずい。

「こんな時に、あのダメネコがいれば・・・!」

「俺も今だけはそう思います!」

そしてついに第九階層。オーディンこと、アスカさんの執務室のある階層。フロントムさんはそこに籠っている。

「ダメ、なのか・・・!」

「弱音を吐くな、新米神様!まだ領地争奪戦エリア・ウォーの終了が宣言されていないってことは、まだフロントムさんは大丈夫なのよ!」

弱音を吐くライトに檄を飛ばすけど内心は私も同じだ。でも、こんな姿をあのだメネコに見せたら、ものすごくバカにされそうなので脳内でミッドを惨殺しておく。

そして、ついにアスカさんの部屋の前に来てしまった。

「いない・・・!」

「さっさと中に入るわよ!」

私がそう言った瞬間、部屋の扉が派手な音を立てて開き、中から誰かが吹き飛ばされる。

まさかファントムさんかと思ったけど、中から出てきたのはアーサー王だった。

「お前達、何者だ・・・!?!」

アーサー王は部屋の中に向かってそう言う。すると、それにすぐ返事が返ってきた。

「俺ですか？俺はこの『グリーン・ユグドラシル』のメンバーの一人、『ハンゾー』です」

そう言いながら、数人のプレイヤーが出てくる。

それは、私達が帰る時に見かけたプレイヤー達・・・。

「『ラタトスク』、か？」

「あ、トールさんじゃないかあ！お疲れーっす!」

「(2)」

「適当なツンデレ発言が見当たらない・・・！」

「いや、必要ないからな。今はアーサー王をなんとかしような」

「そこだ！」

すると、アーサー王が一番最初にハンゾーと名乗った人へ攻撃を仕掛ける。

「危ない！ フルীগ・ハンメル！」

ライトがそう言いながらスキルを発動。

ライトの持つ『ミヨルニル』が電気を纏ったかと思うと、それをアーサー王に向けて投げる。不意打ちを受けたアーサー王はそれをもろに受ける。でも、まだ終わっていない。投げれば帰ってくる『ミヨルニル』は雷になって更にアーサー王を攻撃。ライトはシステムのアシストに従ってアーサー王に肉薄し、手に戻ってきた『ミヨルニル』をアーサー王に向けて思い切り叩きつけた。

「ツチ、HPが！」

「ありがとうございます、トルさん。じゃ、俺も・・・」

そう言いながらハンゾーさんはさっと手を振る。それだけの行動のはずなのに、アーサー王は大きく回避行動をとる。

「・・・ありゃ、バレてきた？」

「じゃ、俺とへな子で行く。いいよな？」

「（おふこーっ！）」

なんだかチャライ印象の男の人と、さっきからメモ帳機能で会話する少女が前に出る。

男の人は両手にナイフを、少女は小太刀を構えると素早い動きでアーサー王に肉薄。ミッドには劣るが、相当速い……！

「（喰らえ、隊長直伝！）」

「スレイプニル！」

すると、二人はスキルを発動。しかもスレイプニルだ。でも、以外にも私の目でも捉えられるぐらいに遅い。ミッドなら発動した瞬間に、コマ送りでもしたかのように相手の後ろにいる。そしてHPはゼロになっている。更にこいつ等が使ったスレイプニルは威力が低い。

「……ツチ！高速の連続スキルか！」

アーサー王は舌打ちしつつ距離をとる。

「隊長に比べたらまだまだだっつての」

「（隊長なら、既にHPはゼロ！）（っフ）」

「お前ら、元隊長だからな」

「はいはい。アーサー王は異常な回復力を持つ。一気にたたみかける」

「おう！」

「（ガツテンダ！）」

そう言うのと、二人はまた突撃。
そして、構える。

「あのスキル・・・！」

次の瞬間、エフェクトが散り、四つの斬線が残る。それに加えクリティカルの発生したことを示すエフェクトまでも散っている。しかも、二人ともだ。これが意味すること、ミッドお得意の強制クリティカルをこいつらも発生させてみたいだ。これじゃあ、リスタ・ソニック を使ったミッドの戦い方そのものだ。

「舐める、なっ！」

「ほい！」

反撃しようとしたアーサー王にそのタイミングをそぐようにして矢が放たれ、更にはツンデレ発言がどうか言っていた女の人が不思議な武器を振るう。

それはまるで鞭のような剣とも言うのか、剣身が複数のパーツに分かれ、それらがワイヤーでつながれているっばい。

「見たか、連節剣の力！」

どうも、連節剣と言うらしい。剣の柄の部分に銃の引き金のようなものがついていて、それで剣を伸ばしたり、元に戻したりしているみたいだった。

「これでフィニッシュ！」

ハンゾーと言う人が手をさつと振る。

でも、特に何も起こったように見えない。だって、アーサー王のHPバーはゼロになっていない。むしろ全快になりかけている。

「ツチ、これじゃ動けない……！」

「……なんで？」

「ああ、ロゼさんはこれを見たことがないですか？」

何で私の名前を知っているのか疑問に思いつつハンゾーさんが差し出した手を見る。

……特に、これと言って何も無いけど？

「知らないみたいです。これ、『鋼糸』って言う暗器なんです。この専用のグローブをはめて使うんですけど、無茶苦茶難しいんですよね」

そう言いながら朗らかに笑う。

「まあ、こいつは本当は切断に使うらしいんですけど、スキルに相手を拘束するものがあって、それを使わせてもらいました。これは鋼糸で相手をぐるぐる巻きにして拘束するんで、状態異常の効かないアーサー王にも通用する数少ない武器です」

そう言いながら私に見せる。

確かに、よく見ればとても細かい糸がアーサー王にぐるぐると巻き

ついている。

「あ、そう言えば紹介が遅れました。『ラタトスク』、現隊長のハンゾーです」

「（癒し系のメモ娘兼副隊長のへな子です（^ ^）/ヨッ）」

「ツンです。べ、別にアンタのために名乗ったんじゃないんだからね…」

「ツンちゃん無理やりだあ。俺はアレクサ…」

「チャラです」

「…俺はアレクサン」

「こいつはチャラ」

「俺はアレクサンド…」

「（彼はアレクサンドロスです）」

「俺はチャラです…はっ!？」

ものすごくばかばかしいことをしているけど、大丈夫なんだろうか？

すると、部屋から声が聞こえてきた。

「あの、大丈夫でしょうか？」

と言うか、聞き覚えのある声。
何気なく声の方向を向くと……。

「何で……!?!」

そこには意外と言うか、あり得ない人物がいた。

Player・ミッド

「やっぱり、敵の攻撃がきつい!」

「ミッド君、どうせなら空を走ってよ!」

「無理です!」

「……………嫁の力を、使う時が来た?」

「なんなの!?! イースはそのフレーズが気に入ってるの!?!」

「……………ハニーと言ってくれれば元気百倍、マイダーリン」

「意味がわからない…………!」

「だ、ダメ、ぶくく!も、もう、笑い死ぬ…………!」

俺達は緊張感のかけらもなく敵本陣の前で足止めを喰らっていた。そして、アスカは敵陣のど真ん中にも関わらず笑い死にそうだった。誰が指示をしたのか、相手は魔法の弾幕で俺達を寄せ付けまいと鬼のような攻撃を仕掛けてくる。

「でも、本気で空でも飛ばないと難しいかもよ」

「・・・だよな」

相手の方からは『ちょこまかと・・・!』的な感じのセリフが多々漏れ聞こえる。そのうち後ろから敵の増援も来るだろうし、てか来てるし何とかしないと・・・。

「・・・はあ・・・。で、ミッド。あたし思いついたのよ」

「何がだよ?」

俺は敵の集中砲火を避けつつ、アスカの言葉に耳を傾ける。

「アンタが、空を走る方法」

「それができりゃ苦労はしない」

時折やってくる攻撃、矢や剣を適当に捌く。

イスはタマを必死に操って敵を蹂躪しているが、ミサはどうも振り落とされないようにするだけで精一杯なようだ。

今一番戦力として活躍しているのが師匠。

師匠は風のように走って相手を切り刻み、風の魔法スキルを使って敵を吹き飛ばす。それはまさに一騎当千。緑の颯風が吹いたかと思えば、敵は次々に倒れていく。ただ・・・。

「見るなあー!?!」

「え!?!ちよお!?!」

普通に戦ってほしかった・・・！

今の師匠は軽く暴走状態だ。師匠は普段ボロボロのマントに身を包んでいる。理由は簡単、恥ずかしいから。自分の装備が。

これは『グリーン・ユグドラシル』創設の頃、アスカが四つの戦^{ヴァ}乙女の鎧なるものをゲット。その一つを師匠に無理やり装備させ、現在に至る。師匠は可愛い妹のようなアスカの頼みを断り切れなかったのだと思う。そして、師匠はこの装備を見られるとバーサク状態になり、見てしまった相手はもれなく瞬殺される。

まあ、俺やアスカと言った昔から知っている、あるいは知られてしまった相手に対しては既に悟りの境地に達し、開き直っている。

「・・・さすがスピカね。マントを奪ったかいがあったわ」

「お前が犯人か!？」

酷い上司だった。

「そんなことより、アンタ投擲スキルを鍛えてるでしょ？」

「ん？ああ・・・言っただけじゃなかったか？」

投擲スキル。これは投擲専用武器を投げることができるスキルだ。熟練度によって威力と精度が上昇する。カンストさせても絶対に命中とか言うのは残念なことにならない。

「それを使うのよ」

どう使うんだよ。俺はそう聞こうとしたが、次の瞬間察した。

何回も言うが俺は『猫足^{キャット・ボ}』と言うスキルを使える。その発動条

件はいたって簡単。ただ蹴ればいい。壁はもちろん、人であれモノであれ、相手の剣、武器等々。つまり、こいつが言いたいことは……。

「……無理だ。確かに実行できるかもしれない。けど、そうすると助走がいる」

「どれくらい？」

「……たぶん、二十から三十メートル。追いつけることは既に確認済み。けど、ミスる可能性が何とも言えない」

気分は某赤い帽子とツナギを着ているの配管工だ。そいつのまねごとをするにしても、ここじゃ人が多すぎて距離が確保できない。

「何のためのスピカなのよ。……スピカ、その男がスピカをエロイ目で見てた!!」

「……はい!?!」

いきなり指を指された男は急に顔を赤くし、拳動が不審になる。……なるほど、その手があったか。

師匠はアスカの声を聞いた瞬間、そのターゲットをアスカが指さした人に変更。師匠がその人もろとも敵の陣を切り崩し、道を作る。

「……思いのほかうまくいったわ、ミッド!」

「わかってる!ミスっても文句言うなよ。イース、俺の動きを目で追って、必要がありそうだったら助けてくれ!」

イースに一言だけ言う。

たぶん、これだけであいつに意味は伝わるだろう。

俺はアスカの作戦通り『投擲』スキルを起動。投擲ナイフを等間隔で師匠の作った道に投げる。階段を作るように。

「行くぞ！」

「行きなさい！」

俺は全力で走る。

景色がゆがみ、目の前にあるナイフもカタツムリのようにゆっくりと動いているようにしか見えない。

俺はそのナイフを踏み、蹴りつけ、更にその次にあるナイフを踏んで、また蹴りつける。

こうすれば、俺は最早空を走っているようにしか見えないだろう。実際に、俺達を見たプレイヤー達は啞然としているほかに何もできない。

そして……………。

「モリガン！」

アスカが親の仇でも見るかのようにモリガンを睨む。

まあ、もしも負けたらやられることに鳥肌が立つのはわかる気がする。俺もイースの被害に遭っているものの身としては同情せざるを得ない。

俺は目の前に見える最後のナイフであいつの近くに飛び降りればいいと判断してそのナイフへと飛び移る。

「ライトニング・サンダー！」

・・・忘れてた。俺はあいつの嫉妬メーターを振り切れさせていたことに。

既に詠唱の準備がしてあったのか、これまた大規模魔法スキルを俺に向けて放つ。あんなの喰らえば、俺はおるか、アスカでさえもただじゃ済まない。

紫電の塊が俺とアスカの進路上に放たれる。慣れないことをして、スピードがいつもより遅くなって捕捉されたんだろう。ヤバイ、詰んだ・・・!?

これはもうアスカを適当に投げるしかないと判断した俺はアスカを思い切り投げようとした。

するとその時、一筋の光が紫電の塊を貫く。そしてそのままスキルを相殺してしまった。

「さっさと行け!」

俺は聞こえた声に驚くしかない。

だってそれはここにいないはずのヤツの声で、もっと言えば数日前に久しぶりに聞いた男の声だ。

「トム!?!」

クエスト23・オーデインの行軍

Player-タケル

時間は少しだけ遡る。

俺はローランの機転で世界樹の内部に侵入することに成功。敵が攻撃してくるが、俺の回復力を持ってすれば問題ない。適当に敵を潰しつつ先に進み、俺はそこに着いた。俺は扉を蹴破るように入り、剣を構える。

「ロキ・・・！」

「は、はひい！？」

そこにいたのは数人のプレイヤーだった。しかも、驚いた少女以外は凶々しくもお茶と菓子を食いまくっている。俺を見ても「あ、なんか来た」とその程度の反応だ。

明らかに戦闘要員じゃない雰囲気。まさか、部屋を間違えたか？

「ようこそ、アーサー王」

「誰だ！」

突然声が聞こえた方向に向けて剣をぶんと振る。

だが、相手を確実にとらえたかのように見えた俺の剣は空を切り、突然現れたプレイヤーはのほほんと会話を続ける。

「危ない危ない。とりあえず、戦場に放った他の『ラタトスク』達の報告によれば・・・その彼女に見覚えがありません？」

そう言いながらさつき驚いた少女を指さす。

チャライ男にナンパまがいのことをされているが、律儀にも俺の方を示して『お話を聞かなくてもいいんですか』と聞く少女をじつと見るが、覚えがない。

「こう言えばわかりますか？ 貴方は五人のプレイヤーと魔氷狼を見ましたね？」

「……」

そう言えば、魔氷狼に乗っていた少女に似ていないこともない。いや、まさか……！！

「御名答です。と言うわけで……！」

俺に話しかけていたプレイヤーがいきなり動く。

手をさつと振る。それだけで俺の体がヤツに引き寄せられ、ヤツはタイミングを見計らって俺を思い切り扉に蹴る。

「（プレゼント！）」

一瞬、そんな文字が見えた気がした。

その瞬間、俺の目の前に黒い物体が投げ込まれる。それは見るからに……。

「爆弾……！？」

爆弾だった。それが爆ぜ、俺は吹き飛ばされる。

あまりの威力に扉の外へと飛ばされてしまった。

そして俺はやつ等と戦うが、異様な強さ、チームワークの前に成

す術もなく拘束された。

その後、やつ等はのんきにもさつき俺と戦っていたライトと、ロゼとか言う廃人プレイヤーに自己紹介を始めた。
「……………こいつら、仲間じゃないのか？」

「あの、大丈夫でしょうか？」

ロゼと呼ばれた少女がその声に反応し、振りかえる。
すると、驚愕の表情を顔に貼り付けて言う。

「何で、ミサがここにいるの？」

Player・ミッド

「トム!？」

「何で、あいつがここに!？」

アスカも突然のトムの登場に驚き、目を白黒させる。
しかもトムがいた場所はイスの後ろ、つまりはタマの背中にいる。でも、そこにいたのはミサのはずで…………。

「ドッセルなりすまし か!？」

「それでミサちゃんになり済ましていたのね!？」

「とにかく行け!」

そう言うと、トムはこのゲームの雰囲気になんとも似つかわしくない、や

たらと機械的な弓を敵に向け矢を放つ。この弓はMPを消費して光の矢を作り出し、それを相手に射ることができる。

これがトムの持つ武器『魔法の杖』レベルアップアイテム。

俺も詳しくは知らない謎に包まれた武器。わかっているのはロキが鍛え上げたということだけだ。この『レベルアップアイテム』は一般的には剣と言われているが、槍や矢、枝じゃなかったかとも言われている。

そして、このゲーム内ではそれら全部があてはめられた。

トムは近寄ってきた敵に牽制の矢を放ち、レベルアップアイテムをいじる。すると弓が折れたため、剣の形をとる。それで敵を薙ぎ払い、自分に敵を寄せ付けない。

「イス！俺を敵から守れ！」

「……………わ、わかってます」

イスは事態に驚きつつもタマを駆って戦場を縦横無尽に駆け抜ける。

だが、敵も魔法スキルや弓スキルでトムを狙う。

「トリックスター！」

これが、ヤツの最後のGスキル。

効果はいたって簡単で、SPDと回避率を+50%するというものだ。発動すれば最後、遠距離攻撃系スキルはほぼ当たらなくなる。しかも、こいつの装飾品アクセサリは回避率上昇系で統一されていたから、もう絶対に当たらないと思う。

「ミッド、今のうちに行くわよ！」

「お、おう！」

トムがいい感じに敵を引きつけておいてくれるおかげでこっちは攻撃が来ない。

俺は最後のナイフへと思い切りジャンプし、そこから下へ向かって蹴る。

そこは既に敵の本陣の真ん前。突然現れた俺達にここを守っていたプレイヤー達が面食らうが、すぐに攻撃を仕掛けてくる。だが、もう遅い。

「アスカ、行って来い！」

「分かってるわよ！」

そう言うつとアスカは俺の背中を蹴り、目の前にいるプレイヤー達を無視して中に飛び込む。これで、俺の仕事は完了。

「……いや、少しだけ残ってるか？」

俺はアスカを追おうとしたプレイヤー達を回り込み、その前に立つ。

「……残念だけどな、こっから先は通行止めだ」

「どけ！」

「邪魔だ！」

そんなことを言いながらプレイヤー達が俺に襲いかかってきた。

Player - モリガン

目の前に突然一人の少女が現れた。
眼帯をした少々エキセントリックな少女。 と言うか知り合いのオ
ーディンことアスカさんだ。

「・・・まさか、この作戦を使ってくるとは思いませんでした」

「・・・」

目の前にいるアスカさんはただただ沈黙を守る。

私の近くには数多くのプレイヤー達がありますが、誰も動かない。
いえ、誰も動けない。なぜならここにいる全員が古参プレイヤーで、
この作戦が発生した場合に起こる次の内容もわかっているから。
もう、既にゲームは終わっている。

「・・・アンタねえ、あたしがどれだけ迷惑被ったと思ってるの
？」

「・・・」

もう、目の前で青筋立てて怒るアスカさんが鬼か何かにしが見え
ない。

と言うか、本当ならここで土下座でもして謝りたいけど、これは
彼女の怒りの火に油を注ぐだけのようない気がしてならない。

「と言うわけで、死んで詫びなさい！」

「全員、総攻撃！希望を信じなさい！」

「イエス・サー！！！」

もう、みんな無理だとわかっていながらも、スキルを発動してアスカさんに攻撃しようとする。
でも相手は……戦争と死の神だ。むしろただの死神。

「デア・ローガンツェ！」

オーデインのGスキル。意味はよくわからないけど、たぶん不吉なんだろうなと言うことはわかる。

アスカさんの上空に魔法陣のようなものが浮かび上がったかと思うと、そこから光が放たれ、更には哄笑までもが響く。そして、私達は殲滅され始めた。

Player - ロゼ

私達ここは任せてくださいと言う『ラタトスク』達を信じ、戦線に戻ってきた。

まさか、もしもの時のためにミサとファントムさんが入れ替わっていたとは驚きだった。ミサはついさっきまで『ラタトスク』の人達とお茶していたらしい。

そしてその時、急に相手の本陣方向で光が散った。何事かとそっちを見るけど、そこには阿鼻叫喚の地獄絵図としか言いようのない光景が広がっていた。

敵本陣付近に魔法陣のようなものが展開され、幾筋もの光が敵を襲う。すると、当たった瞬間に敵はHPがゼロになってドットへと変換されてしまった。

「何、あれ!？」

「・・・俺も噂で聞いてただけですけど、まさかあそこまでとは
そう言つと、ライトが説明をしてくれる。」

「実ははこの北欧神話領の神名持ちの俺や先輩と言つた人達のG
スキルは対人戦闘向けじゃないんです」

確かに、そう言われるとそんな気がする。

「イスも一応は範囲っぽい気がしないでもないけど、狭いし。ラ
イトのヤツは完全に対人向けだ。」

「でも、オーディンだけは違うんです」

「違うつて、広範囲型のGスキルつてこと？」

「はい。まあ、それがあれです」

そう言いながら私に敵の殲滅されていく光景を見せる。

「オーディンの使う『グングニル』は百回投げれば百回当たる百発
百中の槍。しかも、手元に戻ってくるらしい。けど、このゲームで
は少しニュアンスが違うみたいだ。たぶん、このライトの持つ『ミ
ヨルニル』とかぶってしまうからだろう。」

「アスカさんの『グングニル』は百回投げれば百回当たる技じゃな
くて、百回投げて百回当たると言つた技なんだろう。」

「まあ、そう言つわけかあのスキルは異常に強いって先輩から聞
いてたんですけど・・・」

「・・・どうしたのよ？」

「……いや、それより恐ろしいのがスキル発動中のアスカだつて言っていました」

よく意味がわからず、首をひねる。

「……いや、あんなにすごいスキルなら、別にここからやればいいんじゃない？わざわざ相手の陣地にまで出向いて発動する必要性がない。」

「……どうも、アスカさんは『トリガー・ハッピー』ならぬ『スキル・ハッピー』らしいです」

「……は？」

一瞬、意味がわからなかった。

いや、意味はわかる。『トリガー・ハッピー』は確か銃を持って撃ち始めるといろいろとヤバい方向へイッチャウ症状。だから、『スキル・ハッピー』はそのスキル発動バージョン。

でも、あり得ない。だってアスカさんはミッドに対してはあんなのだけど、基本的には優しくかった。スピカさんに続く超まともな^{ガー}守護神^{ディアン}だと思っていたのに……!?

「……まあ、そう言うわけでスキルの発動ができないとは聞いていたんだ。確かにあれじゃ、敵も味方も巻き込んでアスカさんの一人勝ちって状況になる」

確かに、いまだにものすごいエフェクトが散り続ける。たぶん、アスカさんはMPが切れるまで暴れ続けるのだろう。そしてミッド達じゃないと無理な理由。それはアスカさんのあのスキルを避けることができるのがミッド達だけって意味なんだと思う。

私は今も続いている目の前の光景に、ただただ啞然とするだけだ

った。この光景はシステムアナウンスがこちらの勝利を告げるまで延々と続いた。

Player・ミッド

あの領地争奪戦、エリア・ウォーと言うかただの惨劇から数日。

俺と師匠、そしてイースにトムはあの死神の哄笑アスカとともに敵陣に降り注ぐ光線の雨の中を必死で生き抜いて勝利した。

と言うか、俺が指示を試してみんなに当たらないようにしてたんだけどな。正直な話、この作戦はアスカにとっちゃラッキーと言うものかもしれないが、俺達にとっては悪夢以外の何物でもない。

今俺達は世界樹の外の庭にいた。思い思いに適当な時間を過ごしている。

「つか、何でお前はあんなところにいたんだよ？」

俺は味方をも騙してミサになり済ましていたトムに聞いた。

「あれか？簡単だ。敵側には少なからずお前とアスカを見れば俺達が何をしようとしているのかわかるやつがいるだろう？」

「まあな。それはわかる」

「なら、効率的な対処法もすぐに思いつくだろう？」

「・・・なるほど。俺に追いつけるような奴はほぼいない。しかも今回に限って言えば、俺を倒せる可能性のある愛美クォーリンもやられてる」

「そうだ。だからやつ等はアスカがスキルを使う前に勝つ必要が

あった。そうだったら今回の大将である、神名持ちでも戦闘能力の低い俺ならと、こぞって敵の大部分が来る」

「そうすれば、敵は俺達とお前の方に戦力が分散されるわけか」

「ああ。まさか敵の大将が自ら乗り込んでくるとはだれも思わな
いだろうからな。そのうえでお前等攻撃組で一番安全そうないース
の後ろにいたんだがな」

「だから、あんどとき不自然にいースとミサを俺達の方に入れたん
だな」

「ああ。だが、彼女には悪いことをしたな。作戦とはいえ、結局
はあのアホ共と会話していただけだしな」

「・・・まあ、別にいいんじゃないか？」

俺はそう言いながらある方向を指さす。トムがその方向を見ると
・・・。

「ミサちゃん、とりあえず俺とデート行かない!？」

「ミサさん、とりあえず元隊長の普段はどんな感じですか?」

「(たぶん、いースさんにちょっとかきを受けて死にそうになって
ると見た!)(」

「甘いぞ、二人とも。俺の考えではロゼさんもそこに加わってい
る」

「たぶん、みなさんの考えている通りだと思います」

「話を聞いてくれー!？」

「な？」

「……まあ、よかった」

地味に『ラタトスク』と打ちとけたミサの姿がそこにあった。

しかも、会話の途中に『じゃ、今度ミサさんのお店に行きますね』とか聞こえた。……なんだか、ミサの店の客層が大変なことになりそうだ。

「ミッド、トムと話してる時に悪いんだけど、報酬は？」

アスカが俺とトムの会話に参戦。

でも……。

「……そんな話あったっけ？」

「無いわよ。でもアンタ達がこういう傭兵まがいなことをするんなら報酬はキツチリ出さないと、足元見られるわよ？」

なるほど、ここでタダ働きポフンティアしたのに俺のところでは何でしないみたいな感じが。

「まあ、それならそれで適当にやるだけだな。それこそ『スレイプニルの指輪』と『スレイプニル 縛りで戦う』」

「……それじゃあ、アンタはただのザコじゃない」

「それに、基本的に俺達は好きなように好きなことやってるような連中が多いからなあ……」

俺がふと視線を投げると、そこにはロゼとライトがいた。

どうもロゼはライトの戦い方にいろいろと不満があるらしく、スバルタで教え込んでいる。

「遅い！もつと早く！」

「剣と鎚じゃ勝手が違うんだよ！？」

「なら、つなげられるスキルの組み合わせを考えなさい！」

……まあ、ロゼは回復がすごいからそっちに目が行きがちだが、ロゼ自身も相当強い。ロゼはスキルの多さを生かして次々にスキルをつなげていくことが得意だ。一回、どこまでつなげられるか実験してみたが、途中でループしたので諦めた。本人は武器が欲しいと嘆いていたけど。

「……そういや、ロゼが武器の素材を欲しがっていたな」

「何なに？呼んだ？」

「うわっ、早っ!？」

いきなりロゼがやってきた。なんというか、地獄耳だな。

「ロゼちゃん、武器の素材が欲しいの？」

「ああ、まあ。私は本当は刀使っんですけど、ほとんどの刀は魔法に補正がかかなくて……。それでしょうがなくこの剣を使ってるんです」

そう言つと、ロゼは自分の腰にさした剣を見せる。

確かこの剣は『祈りの剣』。回復効果に補正のつく実は超レア武器。槍使い達が使う『銀色ロンギヌス』並みに有名ではないが、一部では結構高額でトレードされていると聞いたことがある。

「……これでも納得しないの？」

「だって、私の友人が言うには素材さえあれば、この『祈りの剣』を使って刀にできるらしいんです」

「要するに、『祈りの剣』ならぬ『祈祷の刀』でもできるのか？」

俺がそう言つと、ロゼはうなづく。

「たぶん、そんな感じ。私の使うスキルも元々は刀のスキルだから、刀にできたらそっちのが威力が高くなるのよね。それに、装備ボーナスの関係で刀装備の時のセットのが強いんだよ」

装備ボーナスつて言うのは、装備した時に発生するボーナス。まあ、そのまんまだな。

これは神話領ごとのキャラでその神話領に関係した装備をすると若干ステータスに補正がかかる。

たとえば、日本神話領だったら着物とか武者鎧とかを装備するとステータスが少しプラスされる。

ロゼの装備はまあ、なんというかちぐはぐだ。アクセサリは日本神話領のモノだし、鎧とかは西洋系の。たぶん、性能重視してん

だろう。

そして、ロゼが装備ボーナスついて装備しそうなのは……。

「……破壊僧が武装巫女にでもなるつもりか？」

「薙刀でも装備してアンタに斬りかかるうかしら？」

「やめてくれ。うなされる」

「はいはい。アンタ達が仲いいのはわかったから……で、素材は？」

「確か……」

ロゼが必要な素材を二、三上げていく。

どれもモンスター素材で、しかも俺達みたいな弱小PTじゃ手が出せないようなものばかりだった。まあ、守護神ガーディアンぐらいの大手ギルドなら簡単に手に入るようなものばっかだけだな。

「……それぐらいならすぐに上げれるわ。……でも、ロゼちゃんはアーサー王相手にかなり奮闘したのに、これだけでいいの？」

「……正直な話、これ以上に欲しいものは無いですからね」

「そう？でも、こっちの都合でかなり振りまわしたし……」

「それがわかってるなら、いい加減に俺のストーカーを何とかしてくれ」

「いいじゃない、生まれてこの方モテたことのないアンタにモテ

期到来よ？」

「ストーカーにモテて嬉しいヤツがいたら見てみたい」

「でも、イースちゃんって可愛いよね」

「・・・師匠、アンタもいきなり出てきて何を言い出すんですか？
と言うか、つい最近『どぞの（以下省略）』的なことをイース
に言っただけでバトルしてませんでしたっけ？」

「え、なんのことかな？」

「ナチュラルに心読んで・・・。まあ、そんなことより、ミサは
いいのか？今ならアスカが権力乱用してすっげえ報酬くれるぞ？」

「そ、そんな・・・私は何もしてませんし・・・」

「・・・じゃあ、『レーヴァテイン魔法の枝』をやる」

今まで空気と化していたトムがそう言った。

「・・・まあ、トリッキーな武器だけど大丈夫か？」

「・・・いいんじゃない？」

「まあ、ミサちゃん弓使うしね」

アスカと師匠もそれでいいんじゃないかと言うノリで言う。
じゃあと言いなからトムはトレードウィンドウを立ち上げ、ミサ
にも早くあげると促す。

「ちよ、ちよつと待って下さい!？」
『レーヴァテイン』なんて、
明らかに超レアな匂いのする武器はダメですよ!？
明らかに神級ゴット・クラスですよね!？」

・・・ミサ、ひよつとして勘違いしていないか？

「・・・ああ、これは大丈夫だ。この『レーヴァテイン』は俺の創作スキルで作れる武器だ」

「・・・はい?」

「知ってるか?ロキは実はいろいろな神話武器の創作に関する。まあ、ほとんどが口八丁で作らせたものだけだな」

「で、その中の一つが『レーヴァテイン』。俺がロキになった時、ミッドが創作スキルでひよつとしたら作れるかもしれないってことに気づいてな。やってみたらあんな武器ができた。・・・どれがいい?」

俺とトムはそう説明しながらミサに無理やり言ってトレードウィンドウを開けさせる。

そして、ミサはげんなりとした表情になる。

「・・・何で、『レーヴァテイン』って名前の武器がいくつもあるんですか?」

「作ったからだ」

「・・・じゃあ、これにします」

「わかった」

そう言うと、トレードが開始。すぐに終了して武器の所有権がミサに移る。

これでPKでもされない限りこの武器をなくすことはない。

「それは癖が強い。その武器は弓の他にも剣やなんかのスキルも使えるからな。他にもあるが、大体はその武器を使っていれば勝手に覚える」

「分かりました」

「よかったな。これでミサも最強への一步を踏み出したぞ」

「何故か、嬉しいと思えないんですけど？」

「……で、アンタは？」

アスカが俺に聞いてくる。

「……正直な話、特にこれと言ってない。」

「しいて言うならイースのことを頼む」

「分かったわ。イースにミッドが会いたがっているって言うってわ」

「分かっててやってるだろ!？」

「……呼んだ？」

「呼んでない!？」

神出鬼没すぎるイースが出現した。

つか、何で俺の位置がこんなに簡単にわかるんだよ!？」

「……………タマには、Pスキル『追跡』がついてる」

「心を読むな!？つか、それで俺を追ってたのかよ!？」

無駄な使い方すぎる…………!

Pスキル『追跡』は登録した相手を簡易マップで追えると言うものの。俺の『索敵』が対象を選ばないのに対して、これは対象を選ぶという感じか?たぶん、タマの『追跡』を使えばタマが自動で俺のところに来るようにしてあるんだろう。イースは俺を追跡しているタマに乗るだけで俺にたどり着ける。

「……………ハニーたるもの、ダーリンの位置は把握すべし……………」

「誰がハニーで、ダーリンだ!？」

「……………そんなにテレしないで」

会話ができない!

頼むから普通の会話をしてほしい。

「……………そう言えば領地争奪戦^{エリア・ウォー}、終わった」

「いきなり内容が変わったな。それがどうした?」

「……………
フェンリル
魔氷狼召喚」

そう言うと、イースの近くに魔法陣が浮かび上がり、そこから蒼い毛並みの大きな狼が現れる。そしてイースはいつものようにタマにまたがる。

……もしかしくなくても、嫌な予感しかない。

「……………タマ二号、覚悟」

「何で！？休戦中じゃ！？」

「……………終わったから」

「卑怯だ！？」

俺はその言葉を最後に思い切り逃げた。

他のヤツ等が俺かイース、どっちが勝つか賭けを始めやがった。

しかも、全員何故かイースに賭けている。賭けが成立しない上に、

俺の味方がいない……！？

やたらと天気の良い世界樹の周りをただ必死に逃げた。どうも俺の平和な日々はまたも遠ざかってしまったみたいだった。

クエスト23・オーデインの行軍（後書き）

というわけで二章はこれにて終了です。

もう少しうまく終わらせられるような気がしなくてもありませんが、自分の技量では無理でした。すみません。

一応、三章のほうもぼちぼちと進めていこうと思っています。メインで書いてるほうよりもなぜか進むので、ひよっとすると、こっちを先にするかもしれません。

次の話の内容はカイを中心にした話にしようか、それともミッド達の過去の話にしようか少しだけ悩んでいます。もしよければ、感想にどっちがいいか書いていただければ、それも考えの中に入れてやっていこうかなとも考えています。

では、次回の話でもよろしくお願いします。

プレイヤー達のステータス

キャラクタータス

NAME：ミッド

JOB TITLE：『スレイブニル八足の駿馬』

RACE：猫妖精ケットシー

EQUIP：猫の刃キャット・クロー 両手用武器・カタール SPD + 20% C

RI + 10%

ケットシー・ブーツ 長靴 装備時のみ、特殊スキル・『キャット・ポー猫足』を取得

スレイブニルの指輪 装備時のみ特殊スキル・『思考加速』を取得 SPD + 200%

SKILL：リスタ・ソニック・熟練度MAX 近接武器汎用型の高速4連続攻撃。補正無し

投擲スキル・熟練度236 投擲専用武器を投げるこ
とができる。DEX + 10%

EX スレプニル・熟練度MAX リスタ・ソニックの派生スキル。近接武器汎用型の高速八連続攻撃。このスキルでの攻撃力はSPDに依存される。

『気配察知』・熟練度671 敵、トラップの位置がわかる。
『キャット・ポー猫足』・熟練度 - - - 歩けない場所も歩ける。高い

場所から落ちてダメージ無し
『思考加速』・熟練度 - - - キーワード『時よ、止まれ』

PROFILE：本作の主人公。『アナタには、速さが足りない！』を地で行く。元々は『ガーディアン守護神』の一人。現在は無所属領でロゼやカイ、ミサと一緒に楽しく過ごしている。イースとは犬猿の仲？猫が好きで、装備も猫シリーズ。

NAME：ロゼ
JOB TITLE：『神官騎士』（『破壊僧』）
RACE：人間^{ヒューマン}
EQUIP：祈りの剣 INT+10% 片手用武器・長剣 補助
系魔法補正+35%

銀系の巫女風装束 INT+5% 回復魔法補正+10%
補助系魔法補正+10%

巫女の髪飾り INT+25% 回復魔法補正+20%
SKILL：神楽の舞 熟練度・764 回復魔法 PT全員に
対して回復

堅忍不拔の陣 熟練度・594 防御魔法 魔法、物理
ダメージを無効

疾風迅雷の陣 熟練度・607 補助魔法 PT全員に
対してATKとSPDに補正+50% DEFに補正-50%

神罰 熟練度・897 攻撃魔法 神聖属性の魔法攻撃
『女のカン』・熟練度 - - - 女子しか持ち得ないスー

パースキル

PROFILE：ゲームが大好きな女の子。ただし何気に体育会系。
『GWO』にて回復魔法を極めている数少ない人物。ミッド達をあ
ちこちに連れまわしてはいろいろなクエストをこなし、楽しい日々
を送る。

NAME：カイ
JOB TITLE：『^{ボセイドン}海と馬の神』
RACE：魚人^{マーマン}

EQUIP：神器・海王星の三叉矛ネプチューン・トライデント両手用武器・三叉矛トライデント 水属性魔法スキル効果補正 + 120% 装備時のみGスキル アポファシ・トウ・ポシドウーナ を取得

ケルビーアーマー
馬魚妖精の鎧 水耐性 + 50%

サイクロラス・ネックレス
一つ目鬼の首飾り STR + 40% VIT - 35%

SKILL：パリランキ・アンデクセン ・熟練度 871 水属性範囲魔法攻撃

ペガサス召喚 ・熟練度 - - - 移動用モンスター、ペガサスを召喚

Gスキル アポファシ・トウ・ポシドウーナ ・熟練度 -

- - - 『海王星の裁き』

PROFILE：エジプト神話領守護神の幹部の一人、というかなンバースリー。神名『海と馬の神』ホセイドンを持つ。水属性系の範囲魔法攻撃を得意とするえげつない子。何故かミッドやロゼと仲がいい。

NAME：ミサ

JOB TITLE：『喫茶ひだまりの店主』

RACE：エルフアルヴ

EQUIP：森の狩人の弓両手用武器・弓 CRI + 10%
エルヴン・ボウ

職人の包丁 料理成功率 + 50%

エプロン 様式美

SKILL：クリティカル・アロー ・熟練度 354 クリティカルの出やすい攻撃 CRI + 15%

トリプル・アロー ・熟練度 267 弓矢による三連続攻撃

『料理』 ・熟練度 MAX ありとあらゆる料理を作れる

『匠の業』 ・熟練度 MAX 作成した料理の見栄えをよくする

『レシピ作成』・熟練度464 作成した料理の調理方法をレシピとしてアイテムインベントリに作成する

PROFILE：お店を獲得するために日夜モンスターと戦ってお金を稼いでいた少女。PKされそうになるが、スピカによって助けられる。その後、ミッドをスピカと勘違いして仲間に。現在では『喫茶・ひだまり』を運営している。

（北欧神話領守護神）

NAME：イース

JOB TITLE：『グレイブニル神の鎖』

RACE：半白エルフハーフアルヴ

EQUIP：神器・神の鎖片手用武器・鞭 INT+40% ST

R+45% 相手に拘束付与 バインド 装備時のみGスキル ゴウ・フォミ

ユラ 取得

魔氷狼の牙 ATK+30% 氷属性系スキル補正+50%

タマ二号リーダー タマ二号の居場所が何となくわかる気がする

SKILL：魔氷狼召喚フエンリル・熟練度 - - - ユニークモンスター

Ⅰ魔氷狼を召喚

咆哮フレス・熟練度 - - - タマ専用スキル 氷属性魔法

ダメージ

『DS』熟練度MAX ある意味最強の称号

PROFILE：無表情でDSな見た目十代の、今後に若干不安の残る少女。見た目は普通にいいのだが何故か、どこか残念（某猫妖精談）。しかし、ユニークモンスターの魔氷狼フエンリルを捕獲タイムすることに成功した猛者。ことあるごとにミッドを追い掛け回す。以前ミッドに会った事があるようだか・・・？

NAME：スピカ
JOB TITLE：『シルフ・ヴァルキユリア風の戦乙女』
RACE：半白エルフハーファルヴ
EQUIP：戦乙女の剣片ブリュンヒルデ手用武器・長剣 装備時のみ特殊スキル
戦乙女の導き を取得

戦乙女の緑鎧 SPD+20% 風耐性+20%
ボロボロのマント 装備時のみ『隠蔽』

SKILL：リスタ・ソニック ・熟練度392 近接武器汎用
型の高速4連続攻撃。補正無し

ヴィンダ・リスタ ・熟練度703 風属性斬撃攻撃ス
キル ATK+50%

戦乙女の導き ・熟練度 - - - 六十秒間、全能力値
+150%

『乙女の恥じらい』・熟練度 - - - 「さすがに、これ
は恥ずかしい・・・」
PROFILE：ミッドの『ガーディアン師匠』。北欧神話領守護神で、『戦争
イデインと死の神』直属の部隊、『エレメント・フォース四色の戦乙女』の一人。ミッドをこよな
く愛して(?)いる。自分装備が恥ずかしいのか、めったにマント
を外さない。外したときは恥ずかしさのあまり、漏れなく相手が消
え去る。

NAME：フアントム
JOB TITLE：『ロキ悪戯の魔神』
RACE：霜の巨人ヨトゥン
EQUIP：魔法の枝レイヴァーティン 特殊武器・??? 魔法スキル補正+25
% 鳥獣系モンスターへのダメージ+150%
常闇の皮鎧 闇耐性+50% 光耐性-25%

トリックスターの証 回避 + 50%
SKILL: Gスキル かくれんぼ^{シーク} ・ 熟練度 - - - 特殊隠密
スキル

Gスキル なりすまし^{ドッペル} ・ 熟練度 - - - 物真似スキル
Gスキル トリックスター ・ 熟練度 - - - 三十秒間
SPD、回避率上昇 + 50%

PROFILE: 『グリーン・ユグドラシル』創造者の一人にして
神名持ち、その性格で周りからは真面目なロキと揶揄される。だが
その本性は実に狡猾で、攻撃方法も暗殺が得意。三つの部隊を持ち、
イースはその一つの隊長。

NAME: ライト

JOB TITLE: 『轟雷^{トール}の神』 (『新米神様』)

RACE: 霜の巨人^{ヨトゥン}

EQUIP: 神器・飛雷^{ミヨルニル}の大槌 大槌スキルの発動が若干早くなる。
Gスキル フルীগ・

ハンメル 取得

力の腰帯 STR + 100% VIT - 75%

雷山羊の飾り 雷系スキル使用時補正 + 50%

SKILL: Gスキル フルীগ・ハンメル ・ 熟練度 - - -
『飛来する大槌』

スキル スンダ・ウースラ ・ 熟練度 893 雷魔法 対空魔法

スキル エアル・アフリル ・ 熟練度 799 地魔法 対地魔法

スキル グラン・スマツシュ ・ 熟練度 395 まれに敵をスタ
ンさせる

PROFILE: 半年前に入った新米神様。ファントムのことを先

輩と言って慕う。魔法系スキルを中心にしてお戦うが、ロゼにより槌系スキルを極め始めた。愛すべきチビツ子神様。

NAME：アスカ

JOB TITTLE：『オーディン戦争と死の神』

RACE：黒エルフドウェルグ

EQUIP：神器・神ケンゲニルの投槍 両手用武器・槍 装備時のみGスキル
デア・ローガンツエ 取得

戦神の眼帯 STR + 70% 命中率 - 25%

鷲の羽飾り SPD + 30%

SKILL：Gスキル デア・ローガンツエ 熟練度 - - - 『
舞い降りる死』

『スキル・ハッピー』熟練度MAX よい子はマネしないでね

PROFILE：北欧神話領の最高責任者。昔のミッド、スピカ、ファントムでPTを組んでいた。オーディンになるまではそうではなかったが、オーディンとなってGスキルを取得してから『スキル・ハッピー』を発症。当時北欧神話領が最強ならぬ最凶を誇っていたのはこのせい。

ケルト神話領守護神ガーディアン

NAME：???

JOB TITTLE：『モリガン三色の魔女』

RACE：死の妖精バンシー

EQUIP：魔女の杖 両手用武器・杖 INT + 50%
早口の帽子 沈黙無効 装備時Pスキル『スベル・カット詠唱省略』を取得

烏の羽飾り INT+25%

SKILL：フレア・スナイプショット ・熟練度617 炎属性の超遠距離狙撃魔法スキル

ライトニング・サンダー ・809 雷属性の最速魔法

攻撃スキル

『溺愛』 ・熟練度MAX 「クーフリーン様・・・はあはあ・・・」

PROFILE：ケルト神話領の裏ボス。守護神ガーディアンの神名持ちでありながら、唯一Gスキルと神器を持たないプレイヤー。愛美を思うあまり、周りがまるで『モリガン』だと言ったことでもうなった。ただし、本人は三属性の魔法スキルを使いこなす高レベルのプレイヤー。残念なことに女の子大好きな女の子。

NAME：愛美

JOB TITLE：『魔槍使いの英雄』
クーフリーン

RACE：人間
ヒューマン

EQUIP：銀槍・ロンギヌス 両手武器・槍 神殺し属性 STR+30%

猛犬の耳飾り STR+15%

魔槍・ゲイボルグ 両手武器・槍 追加ダメージ発生 ク

リテイカル+30%

SKILL：EXスキル ゲイ・ボルグ ・熟練度502 闇属性
必中 強制クリティカル

Pスキル『白刃取り』 ・熟練度439 斬撃属性ダメージ
無効 ネタスキル

『バトル・ジャンキー』 ・熟練度MAX 「強いヤツあ、どこだあ！

？」

PROFILE：ケルト神話領最凶のプレイヤー。戦闘が大好きで、

強い相手であればあるほど燃えてくると言う生粋の戦闘狂。ただし、見た目は普通に可愛い女子。自分と似たようなスキルを使うミッドがお気に入りのように。

NAME：タケル

JOB TITILE：『アーサー王』
ヒューマン

RACE：人間

EQUIP：聖剣・エクスカリバー 両手武器・大剣 装備時Gスキル『ソード・シース』、『カイザー・スラッシュ』取得

王剣・カリバーン 両手武器・大剣 装備時Gスキル『キングス・ブレイド』取得

聖騎士の鎧 DEF+40%

SKILL：Gスキル ソード・シース ・熟練度 - - - 『聖剣の鞘』

Gスキル カイザー・スラッシュ ・熟練度 - - - 『

王の斬撃』

Gスキル キングス・ブレイド ・熟練度 - - - 『王

の刃』

PROFILE：ケルト神話領の英雄級の一人であり、『ヒトロー・クラス円卓騎士団』のリーダー。英雄級で、唯一Gスキルを持つ存在。エクスカリバーを鞘にしまった時の彼は最強と言っても過言ではない。また、モリガンに振りまわされるプレイヤーの一人でもある。ただし、厄介事は相棒でもあるローランに丸投げすることが多い。

NAME：ローラン

JOB TITILE：『ランスロット裏切りの騎士』

RACE：幻影の妖精スプリガン

EQUIP：アロングイト 片手武器・剣 水属性 耐久値の減らない武器

騎士の盾 DEF + 20%

湖の妖精のお守り 水属性耐性 水属性スキル + 30%

SKILL：アクア・インパクト ・熟練度593 水属性範囲魔法スキル

ウォーター・エッジ ・熟練度773 水、斬撃属性の剣技スキル

PROFILE：タケルとは長い付き合いのプレイヤー。苦勞人で、これならアーサー王を刺してもしょうがないと周りから言われている。顔が広く、人脈も豊富。領地争奪戦エリア・ウォーでは、指揮と戦闘を行える凄腕。

クエスト24・ポセイドンと迷宮（前書き）

どうも、お待たせしました！

・・・待ってねえよという方、調子に乗ってすみません。

というわけで、今回はタイトル通り、カイ君のターン！

クエスト24・ポセイドンと迷宮

Player - カイ

「つたく、何で急にこんなところに・・・」

「まあまあ、いいじゃないですか。きっとアニキさんも嬉しんですよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・ああ」

俺にそう言うのは『狂乱の英雄』の二つ名を持つ少年、『レグルス』。そして異常にテンションが低いこの男が『冥界の神』の二つ名を持つ『エルダー』。何故か兄貴の愛称で親しまれている。

まあ、そんなことはどうでもいい。俺は『喫茶ひだまり』に行っただけ、何故か臨時休業でミッド達がいなかった。後でわかったことだけど、どうもミッド達はわざわざ北欧神話領に助っ人として行つてたらしい。そんなわけでやることもなくボケーっとしていた俺に兄貴が一言。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・ついてこい」

黒一色の装備に身を固めたこの人が言うとは何故かものすごくかっこよく見える。そして更に偶然通りかかったレグルスもついてきた。でも、まさか来るのがここだとは思わなかった。

遅くなつたが、ここはギリシャ神話領の地下鉄ダンジョン『ダイダロスの迷宮』。『ミノス王』や『ミノタウロス』が闊歩すること
で有名な神話にも実際に出てくる迷宮だ。

このダンジョンにもそれが反映され、ボスモンスターにミノス王、モブにミノタウロスと言う布陣だ。ちなみに、ここに数人のPTで挑むのはただのバカだ。このミノタウロスは普通にボスクラスのモンスター。ミノス王はここにしか出てこないが、それは神級のモンスター達に匹敵する。更に、入るたびにパターンの変わる迷宮。しかも、入ってから一定時間で勝手に迷宮が組み換わり、噂ではゴール直前で通路が変化してしまつて泣く泣く別のルートを探し、結局当初の予定の三倍の時間がかつたと言う話もあるぐらいだ。

しかも他のダンジョンと違い、帰りは自分でお帰り下さいと言わんばかりに転移陣がない。

要するに、例え神級のプレイヤー達がいたとしても、ここに三人だけで乗り込む酔狂なヤツはそうそういない。

……ただ、今回の俺達のようなPTだったら安心だけだな。

「おい、来たぞ」

「へいへい。……パリランキ・アンデクセン」

とりあえず、狭い通路に俺が得意な範囲魔法スキルをミノタウロスに向けて放つ。それにより、ミノタウロスがのけぞる。そこへレグルスが風のような早さで肉薄。ミノタウロスは二メートルの巨体に似合わず俊敏で、更にはパワーもある。だから、近接戦闘はとても難しい。

「はあ！」

んだけど、レグルスには当てはまらない。ヤツは格闘スキルの使い手。しかも攻撃に防御、スピードとどれをとっても申し分のない、ある意味では完成されていると言つてもいいレベルのプレ

「あの、どうかしましたか？」

「一番人当たりの良さそうなレグルスがそのPTへ声をかける。

「あ、はい。．．．実は、仲間が一人だけどこかに消えてしまっ
て．．．」

「．．．迷子か」

「まあ、この迷宮じゃしょうがない。
そこで更にレグルスは質問。」

「でも、何を悩んでるんですか？」

「彼女を探すべきか、否かを．．．」

「いやこの迷宮じゃ迷子になったらまず会えないし、それに一人
だけなら確実にミノタウロスにやられるぞ？」

「一瞬、脳裏をケタケタ笑いながら『強いヤツはどこだあ？』と言
う、見た目は可愛い女子が槍を担いで通り過ぎていった。
．．．．．ヤツはしょうがない。」

「それがですね、迷子になったのがボス部屋なんですよ」

「．．．．．
意味がわからんな」

「俺もそう思ったよ。」

ボス部屋で迷子って、どんなんだよ？

「しかも、PT情報じゃ迷子になって二時間はたっているのにまだ生きているって」

「・・・それは、すごいな」

ここでは嫌になるぐらいミノタウロスと遭遇する。それで二時間も生き残るのは正直すごい一言に尽きる。

「神隠しにでもあったのか？」

神様が出てくるゲームだからありそうで怖い。

レグルスの冗談を笑える猛者はここにはいなかった。

俺達の間には何とも言えない沈黙が舞い降りた。だが、それは次の瞬間にブチ壊された。

「あゝ！？みなさん、どこに行ってたんですかー!？」

やたらと元気な少女がこっちに向かって走ってきた。

・・・ボス部屋の中から。

「おい、まさかとは思うけど・・・」

「おま!?!何でそこから出てくるんだよ!?!」

どうも、彼女が探し人らしい。

種族は鳥人族^{バードニア}。ショートカットの髪に、カチューシャのアクセサ

リーを付けている。武器は、珍しいことに楽器。たぶん、吟遊詩人^{バード}のような補助系スキルに特化しているんだろう。

「もう、皆さんがどっか行っちゃってびっくりしましたよー」

「こっちはお前が消えてどうしようか悩んでいたんだけど!？」

間延びしたしゃべり方をする彼女に仲間のプレイヤー達は呆れた声で言う。もう、怒る気も何も起こらないみたいだ。

「はあ、すみません。お騒がせしてしまって・・・」

「いや、まあ無事に見つかって何よりだったな」

俺達はそう言うのと、互いに別れた。

「・・・・・・・・・・なんだか、疲れました」

「そうだな」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

まあ、とにかくボスだな。

俺達は微妙な疲れとともにボスと対峙した。

（数日後）

俺は今だ北欧神話領に出張中ミッド達と会えず、暇な日々を過す

していた。

まあ、あいつが帰ったということは何をしようとしているのかぐらいは簡単に想像がつく。おそらくは一年前、まだミッドこと『八^{レイブニル}足の駿馬』がいた時に使われていた最強、あるいは最凶と名高い作戦、『オーデインの行進』をしようとしているんだろう。あれはミッドがアスカさんを背負って敵陣に特攻し、そこでアスカさんが『スキル・ハッピー』を使うと言う凶悪極まりない作戦。こうなってしまうたアスカさんは誰にも止められず、あの『伊邪那岐』と『伊邪那美』ですら敗北するという始末。そしてアスカさんは俺達の間ではひそかにこう言われている……『死神』と。

もう、オーデインの『戦争』の部分はいららないと言う結論に達してしまったらしい。

まあ、それ以外はまともな人だから大丈夫だ。ミッドに言わせれば奇人変人の巢窟の守護神^{ガーディアン}と言われているが、ギリシャ神話領はま^{ザナミ}だまと。

「お兄さま……貴女は離れなさい、アバズレ」

「あんたこそ、離れなさいよ！」

「これもお兄さまへの愛がなせる業……！」

「何が愛がなせる業よ!? レグルスが困っています！」

「あの、二人とも、仲良く……」

「「お兄さまは黙ってて！」」^{レグルス}

「……すみません」

……俺は何も見えていない！

まあ、そのまま何もしないわけにもいかなかったもので、俺はこのレグルスからこの二人を引き剥がす。

こいつ等は双子の姉妹だ。

お兄さまと言っていたのが『アポロン太陽の神』の名前を持つ『ヒナ』。

そして丁寧な物言いの少女が『アルテミス月の女神』の名前を持つ『サヨ』。

こいつ等の顔は全く同じ。二人が同じ格好をしていればどちらがどちらかわからなくなるだろう。まあ、幸いにも二人は似たような格好をしてはいるけど色合いが違うものを装備しているのでどこにわかる。

「またかよ、いい加減にしるよお前ら……」

「無理です！ヒナが悪いんです！」

「サヨが悪いの！お兄さまに色目なんて使うから！！」

「先に使ったのはヒナでしょ！？」

……不毛だ。こいつ等は一卵性双生児のためか、思考や行動パターン、果ては好きなものも全く同じ。最早同一人物ドッベルゲンガーが二人いるとしか言いようがない。そのせいで好きな異性の好みも同じで、レグルスに突撃中。

「・・・たまに、俺はお前がオーディンに爆撃されたらいいの
って思うことがある」

「何ですか！？僕は好きでこうなっているわけじゃないですよ
！？」

「リア充とか、マジで爆ぜればいいと思うんだ。ハーレム形成中
のヘラクレレス君？」

「お願いですから助けてください！？僕にはリアルに彼女が・・・
！？」

マジで爆ぜればいいと思った。

くそ、ネトゲしてるやつで彼女がいるとかなんだよ。神様は本当
に不公平だな。俺はこのゲームの根本的な何かを否定しつつ、自分
の席に座る。

ここは、現実のアキバ辺りの位置にあるギリシャ神話領守ガーディアン護神、
通称『ホワイト・オリュンポス』。

ここは山ではなく、普通のビルの中だ。まあ、いろいろな区画
があるけどな。鍛冶専用のエリアだとか、戦闘用のエリアだとか、
屋上に至っては畑だしな。ちなみに今俺達がいるのはやたらと広い
会議室のような部屋。そこには十二の席が置かれている。ヘラクレ
スの席がないはずなのに、レグルスがここに居るのはあの双子のせ
いだ。

そんなことを考えていると、いきなり扉が派手な音を立てて開か
れる。

何事かと思ってみてみると、そこには一人の男がいた。

「や、やったぞ。ついに、ついにできた・・・！」

「・・・あの案山子さん、どうしたんですか？」

こいつは案山子^{カカシ}。農業スキルを極めている一風変わったプレイヤード。しかも、神名持ちの一人で、『葡萄酒の神』^{ディオニソス}の名を持つ。

「・・・できたんだ、ついに、あれが・・・！」

何やら興奮しすぎて言葉遣いがおかしい。

俺はとりあえず落ち着くように案山子さんに言う。

「とりあえず、落ち着きましょう。・・・で、何ができたんですか？」

「ああ、よくぞ聞いてくれた！」

何故か無駄かつこよくにビシツと俺に向けて指をさす。

・・・あの、さっさと話してくれませんか？

「ああ、すまない。少し興奮してしまった・・・コホン。私はつい最近、とあるものを開発していた」

要するにスキルを使つての実験か？この人は生産系スキルを多く取得している。

更に、このゲームは自由度が非常に高い。例えば、何か料理を作つたとすれば、味付けなんかを個人で変えられる。もちろん、下手な料理をすればまずくなると、かなり現実に近いことができる。

そしてこの案山子さんの料理はものすごくうまい。何をどうやつたらこんなにうまいのだろうと思えるぐらいに。そんなわけで俺達は案山子さんに頭が上がらない。・・・末席なのに何でこんなに権力が強いんだろう・・・？まあ、今は何を開発したかだな。

「何か、新しい料理の開発に成功したんですか!？」

「はい、はい!私食べてみたい!」

双子が身を乗り出すようにして案山子さんに詰め寄る。

「いや、今回はちょっと違う。いつも『主夫なディアオニソス』
って言われているから、たまには男らしいことでもしようと思っ
てね!」

「「ええ〜・・・」」

双子がステレオ音声で落ち込む声を出す。

「と言うか、気にしてたんですね。『主夫なディオニソス』ってヤ
ツ。」

「とにかく私はがんばった、葡萄酒の神として・・・!」

「・・・え?それって、まさか!？」

このゲームに酒類の料理や酒造カテゴリのスキルは無い。

まあ、理由はなんとなくわからない気がしないでもないけどな。

でも、『ディオニソス』はギリシャ神話でも有名なお酒の神様。で
きたのはおそらく葡萄酒ワインなんだろう。まさか、そんなものまで作る
なんて・・・!？」

「ファ タっぱいモノを作れた・・・！」

ワインよりすげえ！？

このゲームは残念なことに現実世界と同じ製品は無い。スポンサーの関係だとは思うけど・・・。

と言うか、結局『主夫なディオニソス』の看板は下ろせてませんよ？・・・もしかして、『料理研究家なディオニソス』の称号でも欲しかったんですか？

もうみんなも唾然とするしかなかった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・盛り上がってるところ、いいか？」

「あ、こんにちわ。アニキさん」

「アニキさん、こんにちわ！」

声のした方を見ると、そこにはいつの間にもいたのか兄貴が。

何故かみんなの言い方がアニキ。

いや、俺もそう呼んでるけど。

「ああ、兄貴君。ちょうどよかった。ついさっきファ タっぱいモノが・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・ならば、それを此処にいる全員に

ふるまってくれ。……………それと、此処にいるお前達に話すことがある」

そう言うと兄貴は自分の席に座る。

俺達はいつもより口数の多い兄貴にどこか不安を感じつつも言われたとおりに座る……………。

「レグルスはこっちに座ってください!」

「いいえ、お兄さまは……………!」

……………もう、いい加減にしてくれ。すると、兄貴が一言。

「……………レグルス、そいつらの真ん中に立ってる」

「わかりました」

まあ、元々レグルスの席は無い。立つてもらうのは悪いともうが、どうもこの様子じゃ緊急事態のようだ。さっさと話しを進める必要がある。

そこに双子の痴話げんかはいららないからな。

「……………話がある」

この人のテンションじゃ話が進まないのが俺が代わりに説明すると……………。

どうもここ最近、無所属領以外のEXダンジョンが見つかったら

しい。しかも、驚いたことに場所が『ダイダロスの迷宮』。つい最近俺達が行ったばかりのところだ。更に驚くべき場所がEXダンジョンへの入り口がボス部屋の中にあるという点。

「でも、それがどうしたんですか？」

「私達で攻略しちゃおうとか？」

双子が兄貴にそう尋ねる。

だが、まだ話は終わっていないらしい。

更に聞くと、そのEXダンジョンには何故かモブが一切いないらしい。だが、迷路の難度が跳ね上がっているらしいけどな。そして問題なのが、ボスモンスターの攻撃に痛みを感じるとかいう噂が出てきているらしい。

「・・・バグモンスターですか？」

レグルスが深刻な顔をして言う。

確かに今回はマズい。通常ではありえない現象システムが起こるモンスター、『バグモンスター』。誰が言い出したのかはよくわかってはいないが、このゲーム内のバグの一種らしい。普通のモンスターに比べて強く、時たま変なスキルを使用したり、痛みを伴ったりとわけのわからない奴等だ。

それがよりによって『ダイダロスの迷宮』のEXダンジョンのボスと言うのは、もう悪夢でしかない。こういう時にこそバグモンスター狩りのプロ的なスピカさんやミッドに頼むべきなんだけど・・・。

「あの二人、今は忙しいから・・・」

俺の言葉にみんなは何とも言えない表情を浮かべる。

ミッドはいつもの『長靴を履いた猫』の恰好で、顔を隠すようにしているから『スレイプニル』の名前でしか知られていないからともかく、スピカさんはかなり有名だ。

現在の北欧神話領の命は風前の灯。だが、基本的に神話領から神テベリ級の貸出とか、応援はできない。そんなことをすれば各神話領の戦力バランスが大きく崩れるからな。だから、俺達は無茶苦茶なことを吹っ掛けられた北欧神話領に加勢したくともできない。まあ、それがわかった上でのモリガンのあの暴拳なんだけだな。

ただ、今回は運が悪いことにケルト神話領の敗北が既に目に見える。・・・御愁傷さまだな。

「カイ君は何で合掌しているのかな？」

案山子さんが思わず合掌してしまった俺にそう尋ねる。

・・・聞かれると、こう答えるしかないんだよな。

「いえ、既に負けが確定しているケルト神話領に・・・」

「「「「？」」」」」

全員、俺のそんな言葉に怪訝な表情を向ける。

そりゃそうだ。『スレイプニル』の正体を知っているのは極少数。他の神話領ともなればおそらくそれは俺だけだろう。たぶん、ミッドが『ラタトスク』とか言うグループの一人だったことが関係しているのかもしれない。

そう言うわけで今のところ、北欧神話領が久々に『死神オーディン』を使うことを知っているのは当人達を抜いて俺だけだし。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

・続けていいか？」

そうだった。今はEXダンジョンのボスのバグモンスターをどうしようかという問題だ。

ハッキリ言って、このメンツじゃ心もとない。けど、あれは早急に対処しないと被害が出る。ミッドに言わせれば、これは俺達の現実であると同時にゲーム、そしてゲームは楽しむためにある。だから、こんなことは知らないならそのままの方がいい。

わざわざ、苦しい思いまでしてゲームする必要なんてないしな。なら、俺がすることは決まっている。

「俺が行く。その『ダイダロスの迷宮』のボス討伐にな」

「……………」

・…いいのか？」

「何言ってるんだよ」

この人は何を言うのか……。
ただの猫妖精ケットシーにできるんだ。それなら……。

「俺は、『海と馬の神』だぞ？」

クエスト24・ポセイドンと迷宮（後書き）

用語集

ギリシヤ神話領・関東地方を中心に広がる神話領。これといった特徴はない。強いて言うなら、装備が近代的なものが多い。

リア充・リアルが充実している人のこと。具体的には彼女、あるいは彼氏がいることをさすことが多い。そして爆発物でもあるので取り扱いには注意。

ファ タ・作者が一番好きな炭酸飲料。

クエスト25・ポセイドンと毛糸玉

Player-カイ

まあ、ああは行ったものの、実際には俺一人じゃ無理だ。しかも、聞くところによれば迷宮が更に上げつないことになっているらしい。まず、EXダンジョンの名前は『ダイダロスの裏迷宮』。・・・変わり映えしないな。

『ダイダロスの迷宮』と同じでダンジョンは迷路を攻略するところから始まる。入る度にパターンが変化するのも一緒。ただ、迷路の変化の時間が変わっているらしい。『ダイダロスの迷宮』の変化時間間隔はおよそ三時間。今回挑もうとする『裏迷宮』は時間がラウンドらしい。運が悪ければ数十分置きなんてのはザラにあるようだ。

モンスターが出ないのは幸いだと言いたいが、あまりに何もなさ過ぎて嫌気がさしてくるらしい。

・・・精神的なものを徹底的に潰す気満々の極悪極まりないダンジョンらしかった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
他にも問題がある」

どうも、モブ達がEXダンジョンの方に流れて行ってるらしい。

原因がわからないが、バグモンスターのせいじゃないかというのが結論。

・・・もう、何でもありだな。

「とにかく、カイ君だけでは難しいかもしれませんね。・・・私も行った方がいいかい？」

案山子さんがそう言うってくれるが、貴方は非戦闘要員だ。いや、戦闘は一応できるけどあんまり好きじゃないとか言っても逃げる。でも、今回に限ってはついてきてくれるらしい。

「……でも、案山子さんってどんな戦い方でしたっけ？」

「ああ……。私のGスキルは生産系だし、あんまり知らないかもね」

「……生産系のGスキルとかあるんだ。初めて知った。

俺と同じことを思ったのか、全員が少しだけ驚いた表情だ。

「……あれ？みんな知らなかった？」

「でも、確かにカイさんだけじゃ辛そうなんで、僕で良ければついていきます」

「レグルスならむしろ歓迎するぞ？お前ほどの戦力なら十分だ」

案山子さんがあのーとか言ってるけど、今回は無視しよう。

「「^{レグルス}お兄さまが行くなら！」」

すると、もはや当たり前でも言いたげに双子が立候補する。それにレグルスはほんの少しだけ疲れたような表情を作る。

「……喧嘩しないならいいよ？」

「何を言ってるんですか、お兄さま？」

なんてそうそういないぞ？

「だいぶ前に組んだんですけど、本当に面白かったですよ？」

「どんなふうに、面白かったんですか？」

俺は気になって聞いてみる。

まあ、周りも興味があると言った風だけだな。

「いえ、それは会ってからの方が早いと思います」

そう言うと、案山子さんはショートメールで誰にメールを送る。そしてしばらくすると、案山子さんが動く。

「では、その子の所に会いに行きましょう」

「・・・俺達から、行くんですか？」

「・・・マジかよ。」

俺達は一応神名持ちと呼ばれる、最強のプレイヤーの名前を冠する者達と言っても過言ではない。普通なら、こっちから来いと言えはそれだけで大抵の人は何も言わずにやってくる。だが、わざわざこっちから訪ねる。それほどの相手なのか？

「まあ、そうしないと面倒ですからね。・・・では、ついてきて下さい」

「と言つか、本当にその人は何者なんですか？」

レグルスが気になったのか、案山子さんに聞く。

まあ、かく言う俺達も気になる。わざわざこっちが出向くほどの相手。まさかのミッドレベルか？

「では、これだけ言っておきましょうか？・・・システム外スキル、『毛糸の道標』アリアドネの使い手とでも」

俺達は、その言葉に絶句するしかなかった。

システム外スキル。

それはこのゲームのシステムには実装されていないスキルを、あたかも実際にあるスキルのように使うことだ。

・・・地味にミッドはシステム外スキルっぽいことをしているが、あいつの技は全てが『スレイプニルの指輪』と『ケットシュー・ブーツ長靴』に集約されている。

しかも、今回のそのシステム外スキル『アリアドネ毛糸の道標』はどんなダンジョンでも最短距離で攻略できる異常なスキルらしい。

「いえ、私も最初に会った時は驚きました。あんなこともあるんだなあ」と

「・・・だから、そのあんなことの部分を教えて下さいよ」

「気になるじゃないですか！」

双子が交互に尋ね続けているが、案山子さんは楽しそうな表情を見せるだけだ。

すると、案山子さんが足を止める。

「この辺にいるはずなんですけど……」

「……何で、こんなところを待ち合わせ場所にしたんですか？」

「……そうですね、僕からしてみれば懐かしい場所ですけど」

ここはダンジョン……かどうかも怪しいが、俺達が『家畜小屋』と呼んでいる場所だ。関東の隅っこにある場所で、ひどくわかりづらい。

レグルスが懐かしいと言ったのには理由がある。まず、英雄の名前を持つには、特殊クエスト『英雄の条件』と呼ばれるモノを受け必要がある。あいつの装備で重要なのは武器じゃない、防具の方だ。

レグルスは本来ならPTで受けるべきクエスト、『ネメアの獅子討伐』をソロでこなし、『硬獅子の外套』なる防具を手に入れた。当時のレグルスは、お？ラッキーと思いつながら装備したが、そこできなりクエストが受注された。

『十二の功業』、それがクエストの名前。内容を見てみると、どうも『英雄の条件』。『神の試練』と同様に、神級とまではいかないが、それなりに強力な装備やスキルが手に入ることが多い。そこでレグルスはやったーと思ったものの、次の瞬間には顔が青くなつたらしい。理由はこのクエストのクリア条件だった。

1・このクエストが終了するまでPTが組めません。また、貴方はPK扱いになります。

2・この装備は外せません。

3・また、武器は装備不可となります（正確には籠手のみとなります）

4・今までの覚えたスキルは使用できません、格闘系スキルのみ使用可能。

次々に明らかになっていくふざけた条件。完全に呪われた防具だった。

急いでクエストウィンドウを開き、一体どれだけのクエストがあるのかチェックすると、その数はなんと十二個。しかも全部討伐系。当時のレグルスがメインウェポンとして使っていたのは戦斧。しかも、結構地味にグレードの高い『キユクロプスの大戦斧』と言うものらしく、もう泣くしかなかったみたいだ。

幸いにも格闘スキルはそれなりに覚えているから良かったものの、・・・いや、よくないけど。その代わりに、この呪われたコートのスータスは地味にすごかったらしいけどな。

全身防具の類でライオンの毛皮っぽい色合いの、現代風なものだ。所々にライオンの意匠が施されている。

まあ、そんなこんなでレグルスはどうにか十二の討伐クエストを攻略。途中、マジモんのPKと間違われて守護神ガーディアンの人達に追われたのは、今じゃいい思い出だと本人談。ちなみに、何回かPK・・・いや、PKKなのか？まあ、とにかく『地獄逝き』にさせられたこともあるらしい。

そして、ここがその討伐モンスターの一団が出てくる場所。モンスターの名前は『アウゲイアースの牛』。このモンスターを三千匹も狩ったらしい。しかも、レグルスによればこのモンスターも地味に強い、と言うか数の暴力で何回死んだことかと言っていた。死んでも討伐数がリセットされることはないのが救いだったらしい。

「でも、何でここに？・・・まさかとは思いますが、ヘラクレスの『英雄ライセンスの条件』でも取っちゃったんですか？」

すると、レグルスはものすごく同情した表情を作る。

「……昔の自分と重ね合わせているのがよくわかる表情だった。」

「……無きにしても非ずですが、たぶん違います」

「いやあああああああ!?!」

すると、家畜小屋から悲鳴が上がる。

それと同時に小屋の扉がバンと音を立てて開き、中から一人の少女が飛び出してくる。

「か、案山子さん! 助けてください!?! も、モンスターが大量発生しています!?!」

その少女は案山子さんに飛びつき、そう言う。

すると、ものすごい音がこちらに近づいてくる。その方向をみれば、そこには黒い牛が雪崩のようにこちらに突進してくる。

「……レグルス、まさかと思うけど?」

「いやあ、別に『ライセンス英雄の条件』をしてなくても出てくるんですね」

「マジかよ!?!」

どうも、こいつ等が件の『牛』らしい。

「……ヤバい、死ぬしかないかも?」

「まあまあ、ここはカイ君の出番だね。……兄貴君でもいいんじゃないかい?」

まあ、それもそうだ。

スキルを使おうとした兄貴に俺は大丈夫だといい、前に立つ。魔法使い系のプレイヤーが前衛に出るとかバカ以外の何物でもないが、俺にはそれが当てはまらない。

魔法スキルを発動するために詠唱を行う。

魔法スキルはショートカットキーに登録したアイコンをタッチすると、自分の眼の前に文が現れる。それを読み上げ、最後にスキルの名前を言えばスキルが発動する仕組みだ。もちろん既に暗記してしまったのであれば、わざわざ呪文を表示する必要はない。覚えた呪文を口に出して言い、最後にスキル名を言えば発動する。ちなみに、熟練度が上がれば文が短くなったり、あるいはそういうPSキルもあるようだ。

だが、Gスキルはたとえ魔法スキルであつたとしてもそれが足りないからチートって言われる原因なんだけどな。

「アポファシ・トウ・ポシドワーナ！」

掲げた三叉矛トライデントの先に巨大な水塊が生成される。俺は三叉矛を振るって水塊を牛の大群へとぶつける。すると、牛たちは正面から俺の攻撃を喰らい、大半がやられる。だが、まだまだいる。俺は続けて魔法スキルを発動させる。

たしか、『大津波』の意味を持つ広範囲の魔法スキル。

「パリランキ・アンデクセン！」

三叉矛の石突部分をドンと地面に突き立てる。すると、そこを中に水が生まれ、うねり、一つの波へと変わり、最終的に大きな波となって牛たちにぶつかる。

それによって、後続の牛たちも俺の魔法スキルでやつつけることができた。

「残りは僕達でやるぞ！」

「はい！」

レグルスと双子が牛の残党を狩る。

そして、俺達は三千もの牛を撃退することに成功した。

「……すい」

そんな声が聞こえた。

と言うか、案山子さんにしがみついている少女からだ。

「……案山子さん、その子が？」

「ああ、この子がそうだ。……久しぶりだね」

「あ、はい。『カナリア』と言います、初めま……して？」

そう言うと、『カナリア』と言う少女は俺と兄貴、そしてレグルスを見て何故か首を傾げる。

「……まあ神名持ちだし、それなりに有名だからな。」

「……ああ！？貴方達は、前に『ダイダロスの迷宮』で出会った！？」

「……」

名指しされた俺達は互いに顔を見合わせる。

……確かに最近『ダイダロスの迷宮』には行った。けど、この

子に会ったっけ？俺達のお互いの顔にはそう書いてあった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
ボス部屋か？」

「なるほど、さすが兄貴」

その言葉で思い出した。

たぶん、この子はボス部屋で迷子になったと言っ猛者だ。

・・・・・・・・おい今思っただけど、まさか？

「EXダンジョン見つけたのって・・・・？」

「はい？あ、私らしいですね」

自分のことなのらしいと言っのはどうかと思っが、タイミング的にもたぶんそうだろう。

「と言っか、君達は会ったことがあるのかい？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・す
れ違っただけだな」

言葉少ない兄貴に変わり、俺とレグルスがその時の状況を案山子さんに教える。

「なるほどね、そういうことがあっただのか」

案山子さんはそう言いながらカナリアを見る。
カナリアはと言っど、急に何かを思い出したのか、案山子さんに

でも、知らないといろいろと困るからな……。俺は兄貴に代わって簡単に状況を説明した。

「で、そこで案山子さんにお前を紹介されたんだ」

「そ、そうなんですか？でも、バグモンスターなんて、聞いたことがないです」

「そりゃあな。一部の守護神ガーディアンがプレイヤー達の安心と安全のために狩っている。そして、誰が言い出したのかはわからないけど、このことは俺達の間で極秘扱いになってる」

まあ、誰が言い出したのかは正直なところわかる。 どうも『ラタトスク』とか言う組織はそう言う情報操作がやけに得意らしい。だが、カナリアはそう言う俺の言葉に首をかしげる。

「なら、わたしじゃなくてその人に頼めば……？」

「ああ、言いたいことはわかる。けど、今回はヤバいんだ」

「……いろいろな意味で、ですよね」

レグルスの言葉はスルー。

カナリアは更に首をかしげて、周りの人間を見るが、そこにはすっと視線をそらす神名持ち達。

「とにかく、第一人者は神話領で領地争奪戦エリア・ウォー」

「もう一人は一年前に行方不明。……そう言えば、カイさんが無所属領に顔出すようになったのってこのころですよね？」

俺は地味に勘のいいレグルスに曖昧な笑みを向けてスルー。

一応ミッドにはあんまり言うなって言われてるしな。たぶんいろいろと面倒だからだと思う。

「とにかく、だ。いろいろとワケあって、できればお前の力を借りたい。もちろんお前のことは俺達が全力を持って守る。だから、俺達を助けてくれ」

オレがそう言うと、カナリアは不安げな表情で案山子さんを見る。だが、案山子さんはそれに気づかないフリをしてあさっての方向を見ている。

少しだけ考えるしぐさをした後、彼女はこちらを見て意を決した表情で言う。

「わかりました。私でよければ頑張ります」

「助かる。じゃあ、今回はできるだけ急ぐ必要がある。報酬やなんかは後で頼めるか？」

「あ、はい」

そして、俺、兄貴、レグルス、双子、案山子さん、そしてカナリアを含めた七人のPTで『ダイダロスの裏迷宮』へとその足を向けた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5784t/>

箱庭ゲーム

2011年12月26日17時46分発行